

御書を深く理解し、日蓮仏法を文底から講義された**日寛上人の教学**を、継承、世界に弘められた牧口・戸田・池田三代会長のご指導ー **発迹顕本、久遠元初自受用報身如来、人法一箇の御本尊の根本義** ーを、創立93年目にして、突如、理由なく削除した「**教学要綱**」と、文上の記述だけに終始する**近刊の教学書**は、即刻、絶版にすべきである！

本日、8月24日は、**池田先生の入信記念日**、そして、**壮年部の日**でございます。池田先生に心より報恩感謝申し上げます。



不死鳥か 依正不二なり 君と僕 私が、この句を詠んだのは入信三十周年を迎えた一九七七年（昭和五十二年）の八月二十四日であった。この日は、「**壮年部の日**」であった。私は、信頼する全国の壮年部の同志に、共に「不死鳥」の如く前進をと、この句を贈ったのである。（中略） **師の如く、「師子王の心」で戦え**ーこれこそ、師弟不二の壮年部の魂である。（31－33頁）

日蓮の曼荼羅は誤りとブログで配信した宮田幸一氏が書いた「**教学要綱**」をなんと池田先生の監修として出版して1年9カ月。その間、須田晴夫氏の著作「**創価学会教学要綱と日蓮本仏論の考察**」又、中村誠氏の著作「『**教学要綱**』と牧口・戸田・池田三代会長の書物50冊との比較検証」、更には、ネット上の、Clear Sky 氏の「創価学会の会員のための資料」<https://t.co/0pCNeSSStyC> 等により「**教学要綱**」に潜む**釈迦本仏論の邪義**は、学会内だけでなく社会の内外に広く周知されました。しかし、「**教学要綱**」は、未だ、その**邪義**を認めず、今なお、聖教新聞、大白蓮華、更に、多くの近刊、教学出版書籍の底意になっています。

この事態を、**池田先生**がどれほど憂慮されておられるか。私は先生の獅子吼<https://x.com/TY0EQfB82xwHa0s/status/1933351526485143981> の「自分の信じる思いをどんどん言ってゆけ！」を拝受、一刻も早く「**教学要綱**」はその非を認め絶版になるべきと、1月、2月、4月、5月の拙文に続き、この度も記しました。（前の拙文は、<https://jikatsu.net/80198/> を参考下さい。）私は、池田門下生として日蓮仏法の真義と三代会長の正義を厳守するべく、この拙文を記します。

78年前の8月14日、山本伸一青年(池田先生)は座談会に参加、戸田先生に「**その南無妙法蓮華經というのは、どういうことなのでしょう**か」と質問し、戸田先生は下記話されました。(以後、引用部の**赤**、**青**字、下線は図齊によります)

「これは、詳しく言えば、いくらでも詳しく言える。釈尊が一代に説いた八万法蔵といわれる膨大な教えも、煎じ詰めれば、この南無妙法蓮華經の説明とも言える。一言にして言えば、一切の諸の法の根本です。宇宙はもちろん、人間や草木にいたるまでの、一切の宇宙現象は、皆、妙法蓮華經の活動なんです。だから、あらゆる人間の宿命さえも転換し得る力を備えている。つまり、宇宙の根源力をいうんです。別の立場からこれを拝せば、無作三身如来、すなわち根本の仏様のことであり、永遠に変わらない本仏の生命の名前です。

釈尊滅後二千年以後、すなわち末法という時代に入っては、その仏様は日蓮大聖人であり、その**大聖人様は、御自身所具の久遠元初の生命を、御本尊様として顕されたのです**」(中略)戸田は、なおも無造作に語り続けた。「難しく言えば、**法本尊即人本尊で、人法一箇のこの御本尊こそ、南無妙法蓮華經の実体**といえるのです。(中略)…話せといえ、一晩でも、二晩でも話してあげたい。だが、山本君も少し勉強してからにしようじゃないか」と言われました。すると、山本伸一青年は、その場で次の即興詩を朗唱しました。

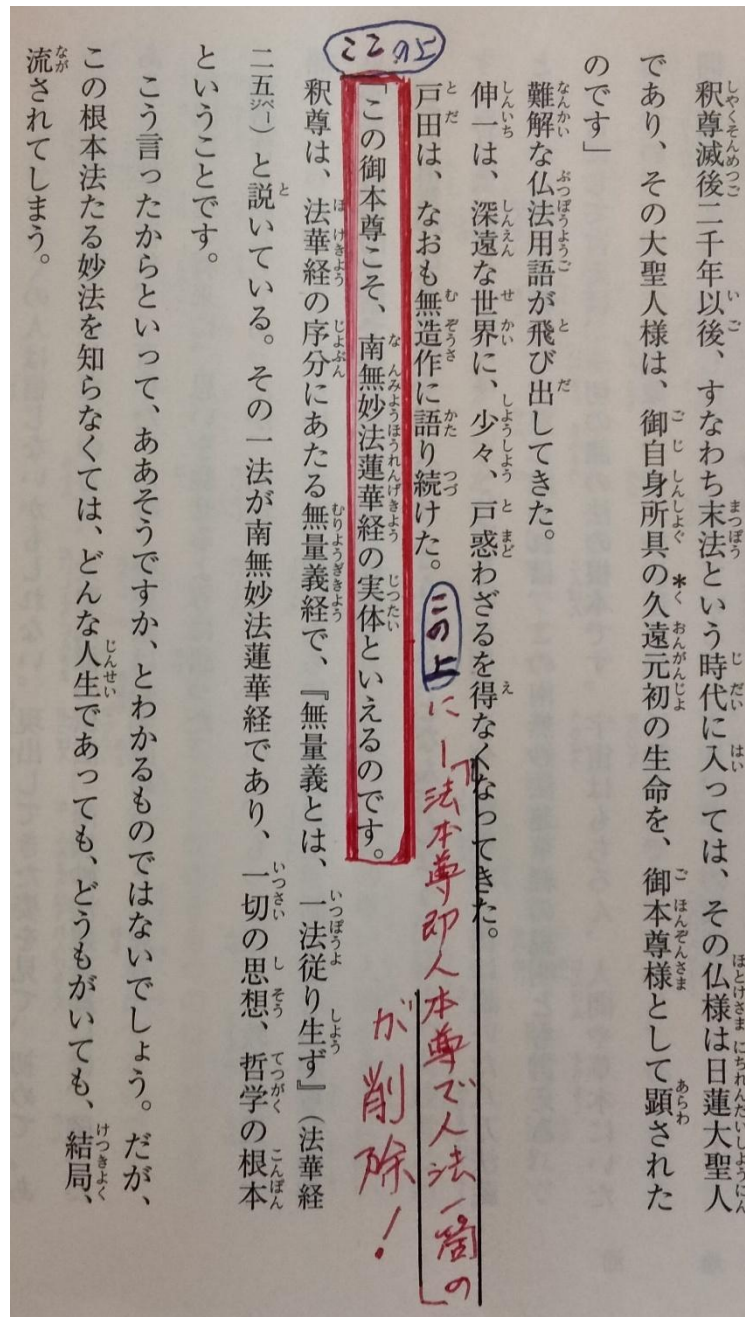
「**旅びとよ／いずこより来(きた)り／いずこへ往(ゆ)かんとするか／月は沈みぬ／日いまだ昇らず／夜明け前の混沌(カオス)に／光もとめて／われ進みゆく／心の暗雲をはらわんと／嵐に動かぬ大樹求めて／われ地より湧き出(い)でんとするか**」一と。(小説『人間革命』第二巻地涌の章、池田大作全集第144巻より)

私は、上記「人間革命」の戸田先生と山本伸一青年の最初の出会いの対話こそ、**美しき師弟の邂逅、感動劇**であり、学会員さんお一人お一人が胸中深くに刻まれる信心の原点なのだと拝察しています。その師弟の原点の記述が、**今の聖教ワイド文庫で、下記の一節が削除**されているのです。―「難しく言えば、

法本尊即人本尊で、人法一箇のこの御本尊」―この、戸田先生の重要な

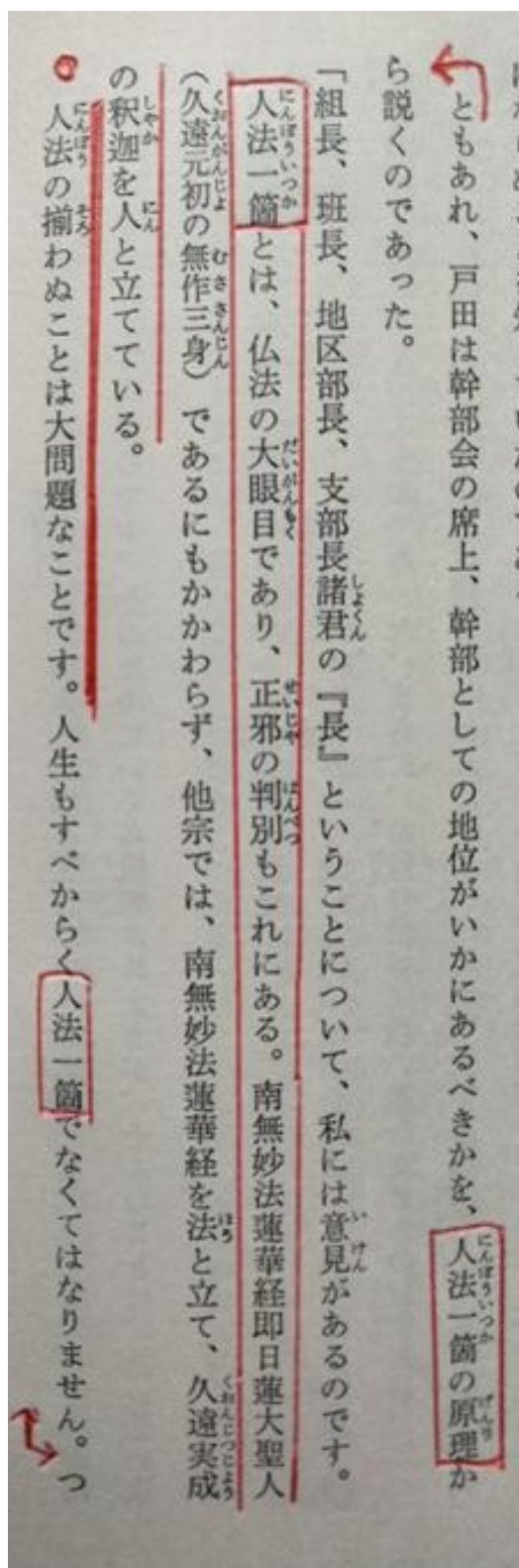
記述を、なぜ、削除したのか？私は驚愕、憤慨、悲嘆でいっぱいです。

これは、「**教学要綱**」が**人法一箇**を捨て去ったのと全く同じではないか！



(ワイド版文庫 第2巻での削除)

私は、池田先生の「**方便品・寿量品講義**」が新刊の教学書で改竄された実態を、先生のご生誕日1月2日、<https://share.google/X8sOificawnSDegVU> において、また、「**御義口伝講義**」の改竄の実態を日蓮大聖人のご生誕日2月16日に、<https://share.google/4By0Zxc2EAzo7D5LE> において、皆様へお知らせしました。そしてこの度、小説「人間革命」の改竄を知り、さらに大きな衝撃に襲われ、近刊の教学出版書籍、聖教新聞、大白蓮華等での改竄の実態を明らかにすべきと決意しました。



人間革命第7巻の原本

また、左に掲示の昭和47年発刊『人間革命』第7巻190頁に記述されていた戸田先生の人法一箇のご指導の内、一南無妙法蓮華経即日蓮大聖人（久遠元初の無作三身）である—が、池田大作全集第147巻では削除され下記に変更です。

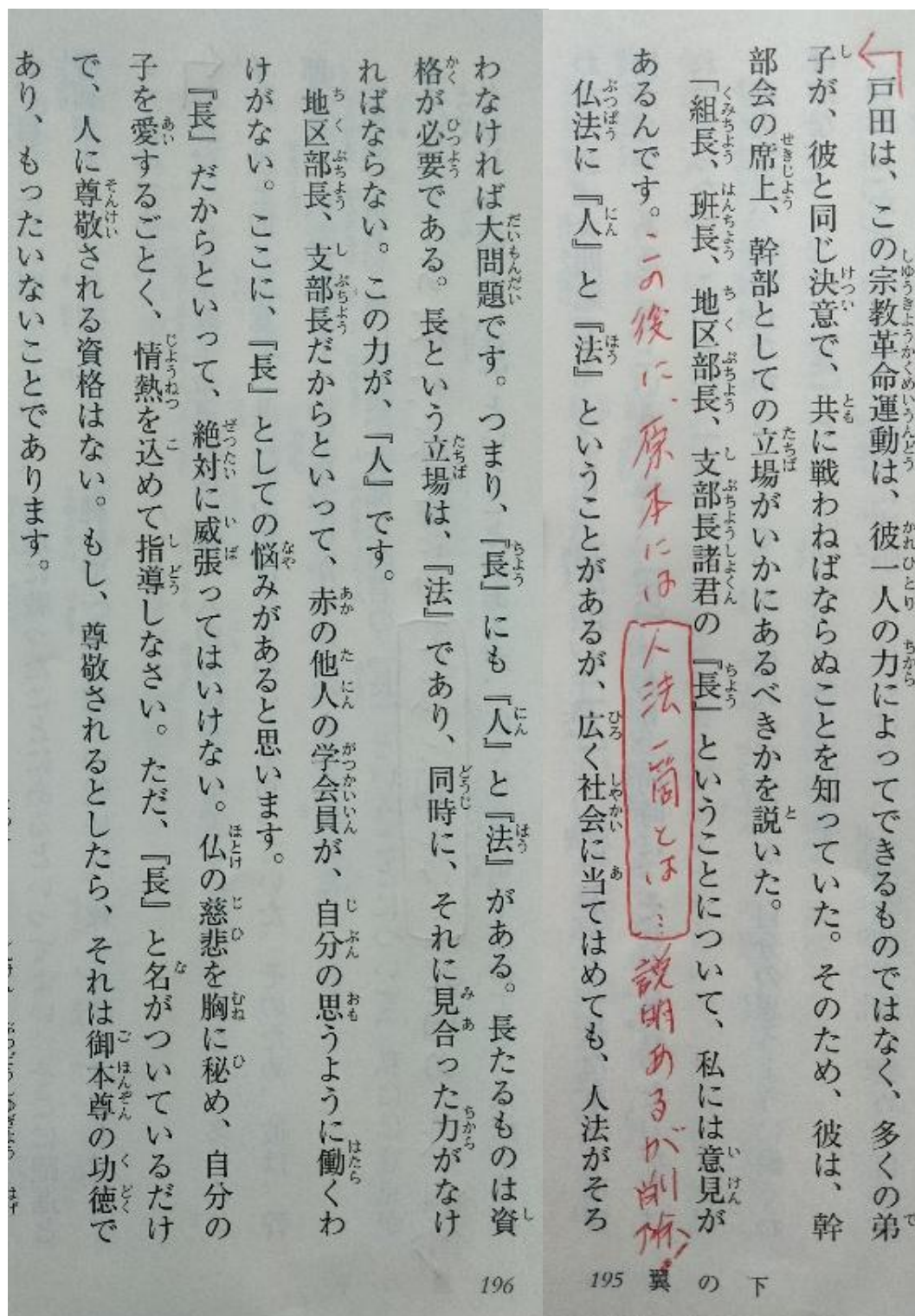
— 仏法に『人法一箇』ということがあるが、広く社会に当てはめても人法がそろわなければ大問題です。つまり『長』にも『人法一箇』がある。長たるものは資格が必要である。長という立場は『法』であり、同時に、それに見合った力がなければならない。この力が、『人』です。—とだけに。

そして、驚くことに2023年第二版第八刷の聖教ワイド文庫では、昭和47年（1972年）の原本に記述されていた、左の文章の赤線の文章が完全削除なのです！（次頁に掲示 なお、2013年のワイド文庫には、まだ「人法一箇」は残っています。）

つまり、現在は、池田大作全集に掲載されていた「人法一箇」まで、何と、完全削除！なのです。何の意図、意味があるのでしょうか？ これは、

池田先生への背信行為、そのものです！

即日蓮大聖人（久遠元初の無作三身）が共に完全消去です！



続いて、以下、近刊教学書 3 冊の改竄の実態を明らかにします。—



「御書と師弟」(2024 年 11 月 18 日刊)

「池田大作先生の『仏法哲理の泉』」(2025 年 4 月 28 日刊)

「我らは地湧の菩薩なり」(2025 年 5 月 3 日刊)

この 3 冊について、その記述が池田先生の本来のご教示と、どれほどかけ離れ、浅薄で、文上だけからの解釈、作文であるかを明らかにしたいと思います。さらに、本年初めからの聖教新聞と大白蓮華にも同じような文上解釈だけからの記述が多くあり、その代表事例を示します。

まず、この 3 冊についての論述の大前提として、日蓮仏法の正義、真髄を理解する上での根本的姿勢である法華経及び御書の「文底解釈」の絶対的必要性を、池田先生の大著「法華経の智慧」から以下、引用申し上げます。

この「文底解釈」を捨て去り、浅薄、狹隘なる「文上解釈」に陥ったのが「教学要綱」と、近刊の教学書なのです。そして、それは結果的に、身延派日蓮宗への逆行なのです。三代会長のご教示は全て「文底からの講義」なのです！三代会長のご指導に違背した「教学要綱」は師敵対の極み、日蓮仏法を破壊した、まさに言語道断の悪業です！なぜ、池田先生に弓を引くのか！です。

小題 「文底」が説かれて仏法は完結

齊藤 仏教の歴史を「仏因の探求」という観点から語っていただきましたが、その探求の究極が「寿量品の文底」にあるという結論になります。ここまで至らないと、「生きとし生けるものを仏にしたい」という釈尊の願いも完結しません。

池田 寿量品文底の「仏因」とは、言うまでもなく、無始無終の妙法であり、南無妙法蓮華經です。これは「仏因」であると同時に「仏果」です。「因果俱時・不思議の一法」です。これを寿量品の説法を聞いて覚知したのです。

寿量品を、虚空会上の”三十二相の、きらびやかな釈尊の話”と思ったら間違いです。その色相莊嚴の仏を見上げているだけなら、所詮は”他人ごと”になってしまう。そうではなく、五百塵点劫の説法で、どんどん過去にさかのぼっていったあげく、自分の究極の”原点”は、釈尊の”原点”と同じであったと分かったのです。”虚空”を見上げていて、はっと”足もと”に気づいたのです。これが「等覚一転名字妙覚」です（成仏の本因が南無妙法蓮華經如来であることを述べた文。等覚という最高位の菩薩でも、久遠元初の妙法を覚知して、「等覚」から一転して「名字即」という凡夫の位になり、そこから直ちに仏の位である「妙覚」になること）

須田 一段一段、成仏を目指して階段を上った果てに、じつは「出発点」に戻った。自分を生み、支えている宇宙生命そのものを自覚したということになります。

遠藤 「具騰本種」というのも同じ意味ですね。（「^{つぶさ}具^あ」に本種を騰ぐ」と読む。妙楽大師の言葉。成仏の根本原因＝本種は、寿量品の文底に蔵されており、この本種を覚知したがゆえに法華經の会座の衆生も、成仏したとする）

齊藤 その「本種」が「南無妙法蓮華經」である。それを目覚めた。

池田 文上を聞いただけで文底がわかった。そういう機根の衆生は、それでいい。しかし、わからない機根の衆生は、どうするのか。これが「滅後の弘教を上行菩薩に託した」理由です。

上行菩薩という「菩薩仏」——すなわち「因果俱時・不思議の一法」を、その身に体現している人が、「因果俱時・不思議の一法」を弘めるのです。仏法では必ず「説かれる法」と「説く人」が一致しているのです。（中略）

池田 日蓮大聖人は「本果妙の釈尊・本因妙の上行菩薩を召し出す事は一向に滅後末法利益の為なり」と仰せです。末法の機根の衆生には、まっすぐに、そのまま、成仏の「本因」を、久遠元初の妙法を説くのです。そのための如来神力品の付嘱です。ゆえに如来神力の「如来」の元意は、釈尊だけのことなく「一切衆生」のことになる。「神力」とは「生命の力」です。凡夫を代表とする「一切衆生」の本当の「生命の力」を示したのが如来神力品なのです。それを示すために、全宇宙的儀式の「十神力」が説かれた。

遠藤 三十二相の「色相莊嚴の仏」は、そのことに気づかせるための「仮の仏（権仏）」だということですね。

以上、何と素晴らしい池田先生のご指導でしょう！このご指導だけで、もうすでに「教学要綱」と、その底意を潜在した近刊教学書の不正が明らかです。

何故なら、池田先生は寿量品文底の真義を一上行菩薩という「菩薩仏」——すなわち「因果俱時・不思議の一法」を、その身に体現している人が、「因果俱時・不思議の一法」を弘める—と。

このご教示は、私見、日蓮仏法の根本義「人法一箇」のご教示であり、これだけで「教学要綱」の邪義—日蓮は釈尊から『法華經』肝心である「南無妙法蓮華經」の教えを託された地涌の菩薩（94頁）—の文上解釈を完璧に破折、日蓮大聖人が、仮の仏（権仏）の釈迦を成仏に導いた本種と分かるからです。

法華經と御書の「文底解釈」をご教示されたのが創価三代会長であり、そのご指導の中でも日蓮仏法の根本義と言えるのが本拙文、表題の下に掲げた—日寛教学（日蓮仏法の文底解釈）を継承された、牧口・戸田・池田三代会長のご教示—発迹顕本、久遠元初自受用報身如来、人法一箇の御本尊—の根本義です。これらの根本義について、前述の近刊教学書3冊が用いる浅薄な文上解釈の邪義を、三代会長の本当のご指導を通して、以下、破折、論証致します。

私は今年70才、入信70年になります。60年以上、池田先生のご指導を拝して参りました。結果、私見、上記の3冊を一読後、感動、感応妙が全くないのです。ゆえに、これらは池田先生のお名前を利用した作文集と思っています。資料の寄せ集めなのです。

まずは、新刊「池田先生の『仏法哲理の泉』」の文上解釈です。これは、大白蓮華の2018年5月号～2023年11月号掲載より20回分を選んだ新刊です。

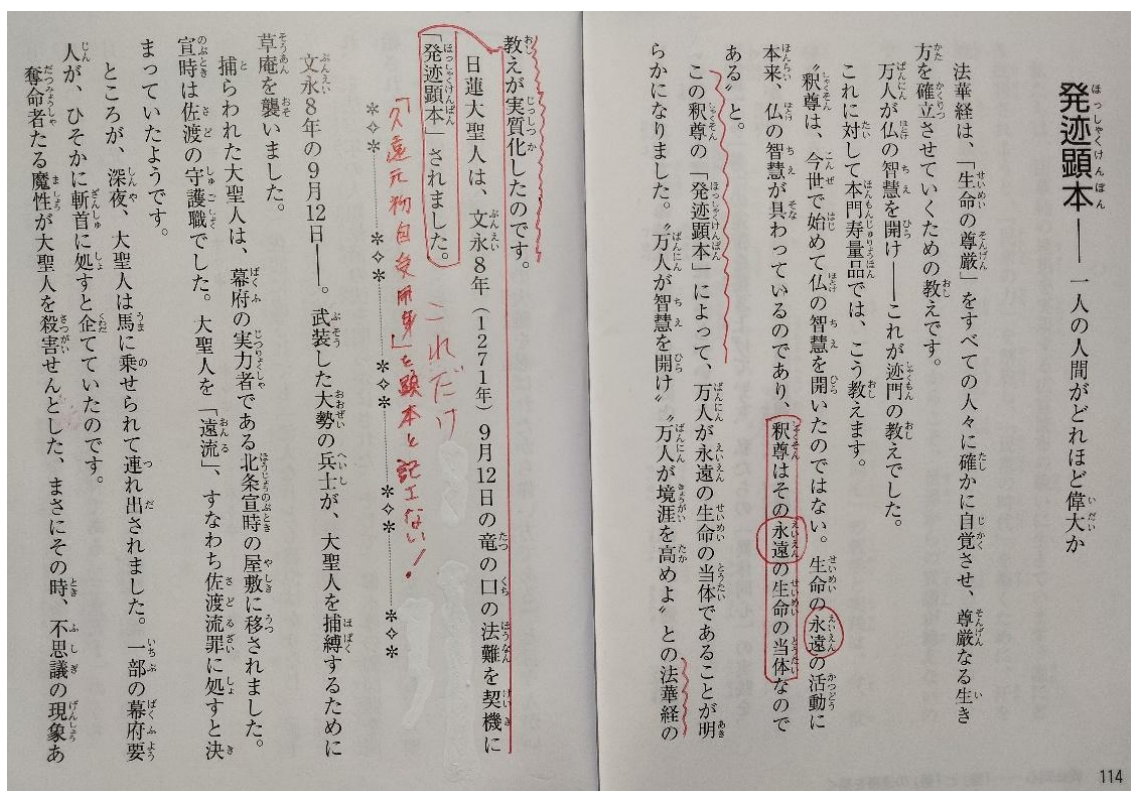


私は、この本は若い方々への素晴らしい本であると、心弾ませて読みました。しかし一読後、全く失望しました。

日蓮仏法の根本義である「発迹顕本」について、本義が全く記されていないからです。

日蓮大聖人は「発迹顕本」されました。一だけです！

私にとって、池田先生のご指導こそが人生の根本なのです。ゆえに、先生のご指導の真義を記さない本書は、『仏法哲理の泉』ではなく、『仏法哲理が澱んだ水溜まり』です！



「**発迹顕本**」の真義が全く記されていない上記への破邪顕正に入る前に、上記には

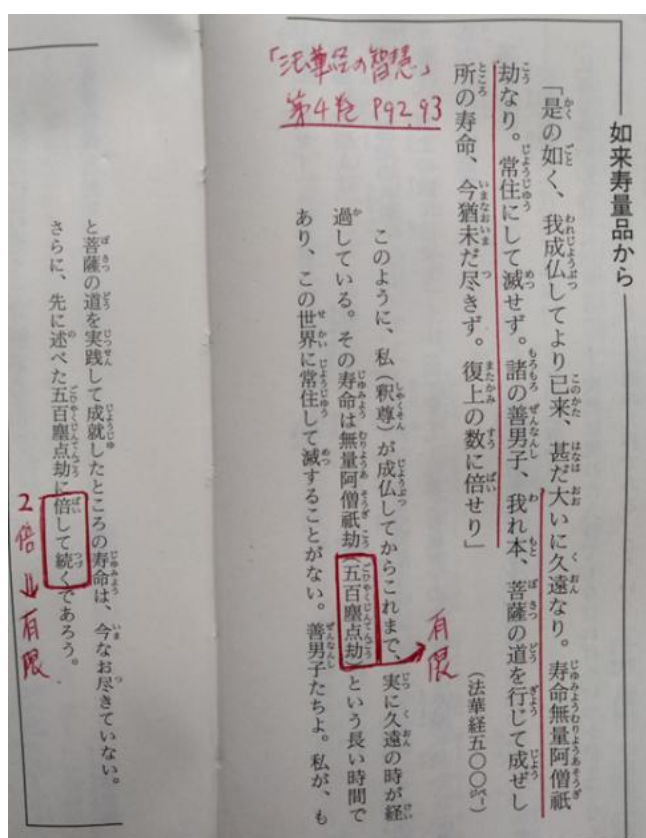
— 法華経で、— 釈尊はその永遠の生命の当体—との、

「教学要綱」p28と同様の邪義がありますので、まず、これを糺します。

以下、私の親友、中村誠氏の著書「『**教学要綱**』と**牧口・戸田・池田三代会長の書物50冊余りとの比較検証**」の論述を引用します。(赤字他、下線は図斉によります。)

— 釈尊の寿命とは有限なのであろうか、無限なのであろうか。『教学要綱』の主張と戸田・池田両先生の主張はどちらが正しいのか。これは法華経の原本に当たってみるほかない。

釈尊の寿命が無限か**有限**かの決定的な答えとなるものは次の経文にある。
「私（釈尊）がもと菩薩の道を実践して成就した寿命は、今日もなお尽きることなく、また上述の数の**二倍の年数**がある」(三枝充憲『**法華経現代語訳**』p. 372)



ここで非常に重要な点は、法華経が**釈尊の寿命を二倍**していることだ。「教学要綱」の主張するように、釈尊の寿命が永遠の過去から常に存在する仏であるならば、その寿命を二倍すると**いう数学上意味のないこと**を法華経は行っていることになる。

無限を二倍しても無限であるし、無限を無限倍拡大してもやはり無限であり、これほど無意味な操作はない。

即ち、法華経を絶対視するならば、五百塵点劫とは無限に近い数ではあるが、その**本質は、有限**でなければならない。

そして、釈尊が菩薩の道を実践していたそれ以前は何をしていたかという
と、開目抄に「不輕菩薩は、過去に法華經を謗し給う罪身に有るゆえに瓦石を
かぼるとみえたり」とある。即ち、釈尊が謗法を犯していた時代に達する。こ
れではとても永遠の仏とは言えない。(中略)池田先生の主張を見てみよう。
「(久遠実成の釈尊は)無始無終の宇宙即妙法と一体とは言えない。”すき
間”がある」(『法華經の智慧』第5巻 p. 277)。正にその通りではないか。即
ち、釈尊の寿命とは無限に近いとはいえ、その実態は有始有終の仏である。

池田先生は次のように述べている。「では永遠の仏を説くにはどうすれば良
いかというと、『仏因』に『仏果』を認めなくてはならない」(『法華經の智
慧』第5巻 p. 212)。「この「因位(仏因の位)の仏」——それが上行菩薩で
す。『因果俱時の仏』です。上行菩薩が出現しなかったならば、無始無終の本
仏は示せないのです」(同書 p. 212-213)。即ち、究極の仏の形態とは、釈尊の
ような金ピカの仏ではなく、因果俱時の仏、菩薩仏でなければならないのだ。

御義口伝にはこうある。「末法の仏とは凡夫なり、凡夫僧なり」。いかに池田
先生の洞察が鋭いか、そして御義口伝の素晴らしさも、これで理解できるの
ではないかと思う。須田晴夫氏は著書「『創価学会教学要綱』と日蓮本仏論の考
察」において、「久遠実成の釈迦仏は南無妙法蓮華經によって仏にさせてもら
った仏であるから根源の仏ではない。また、五百塵点劫という一時点において
初めて成道した仏であるから無始の存在でもない」(同書 p16)と主張してい
るが、正にその通りだろう。—と。

中村誠氏の論述、全くその通りと拝します。そして、上記に引用の須田氏の
論述を、更に補足、詳述されたのが、同書 p 34 ~ p 36 の以下です。この箇
所は法華經神力品の肝要(教主の交代)ですので、ここに記させていただきます。

— 教主の交代という視点は神力品の結要付嘱の意義を考える上でも重要な鍵
となる。神力品の經典上では久遠実成の釈迦仏が滅後の仏法弘通の使命を自身
が教化してきた弟子である地涌の菩薩なканずく上行菩薩に委託(付嘱)したこ
とになっているが、先に見たように地涌の菩薩の本地は単なる釈迦仏の弟子で
はなく久遠の仏であるから、釈迦仏から上行への付嘱は仏から弟子の菩薩に対
する権限の付与、役割の委託ではなく、その実体は釈迦仏から上行菩薩という
教主の交代を意味している。

しかも釈迦仏は根源の妙法によって成仏させてもらった本果の仏だが、上行は成仏の本因となる根源の妙法を所持してそれをそのまま弘通する本因の仏である。

この点について池田大作は『法華経の智慧』で次のように述べている。

「神力品の『付嘱』の儀式は、端的に言うならば、『本果妙の教主』から『本因妙の教主』へのバトンタッチです。それは、燦然たる三十二相の『仏果』という理想像を中心とした仏法から、凡夫の『仏因』を中心とした仏法への大転換を意味する」（『法華経の智慧』第五卷一九〇頁）。

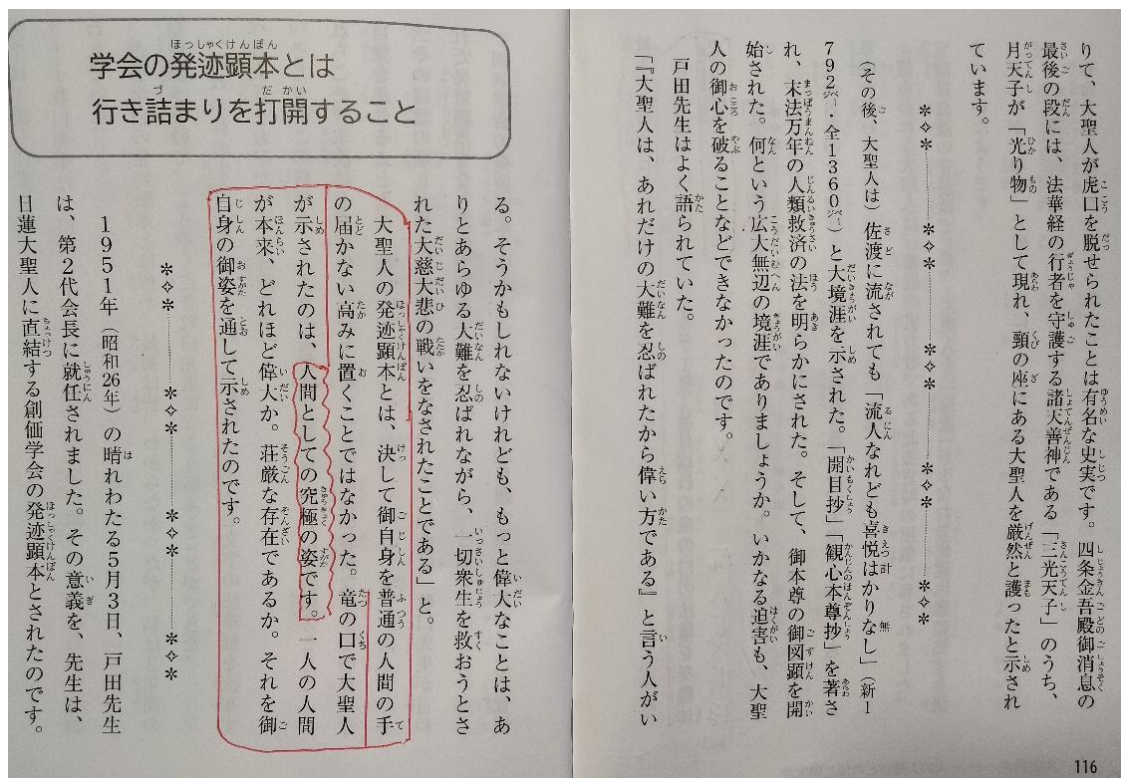
教主が交代するのであるから末法は釈迦仏が出る幕ではなく、釈迦仏は過去の仏となる。末法では妙法を弘通する上行菩薩が教主として出現するので、その時代には上行の化導に従うべきであるとの未来へのメッセージを示したのが神力品の趣旨である。

法華経は寿量品の文底において釈迦仏だけでなく万人成仏の本因となる根源の妙法の存在を示し、不軽品で末法における実践の在り方を説いた。その上で、神力品で妙法を弘通する上行菩薩が末法に出現することを予言した。法華経それ自体は末法には救済力を喪失しているが、末法に妙法を弘通する教主の出現を予言することによって、その仏の化導を助けることを目的として作成されたと解することができる。

法華経は誰のために説かれたのかという問題について日蓮は「法華取要抄」で「**寿量品の一品二半は、始めより終わりに至るまで、正しく滅後の衆生のためなり。滅後の中には、末法今時の日蓮等がためなり**」（一五四頁）、「疑って云わく、多宝の証明、十方の助舌、地涌の涌出、これらは誰人のためぞや。（中略）経文に『いわんや滅度して後をや』『法をして久しく住せしむ』等云々。これらの経文をもってこれを案ずるに、ひとえに**我らがためなり**」（一五五頁）と述べている。法華経そのものは末法の衆生を救うことはできないが、末法の教主の化導を助ける補助役の役割を果たす意義を持つのである。 一と。

上記、法華経は日蓮のために説かれた！ 須田氏の玉稿です！！

さらに、新刊「池田先生の『仏法哲理の泉』の文上解釈の記述は以下です。



創価学会の発迹顕本は記しても、大聖人の発迹顕本の真義は記さない。これは、「**教学要綱**」が本稿にも巻末の語句索引でも、日蓮の発迹顕本について、何も記さないことと同じです。若い方々に、日蓮仏法の最奥義を伝えないでどうするのかと、怒りでいっぱいです。日蓮大聖人の「発迹顕本」の真義について、三代会長のご指導を引用致します。**牧口常三郎全集**第八巻には以下ございます。

竜の口の法難の時、大聖人は**久遠元初の自受用報身如来**としての本地をあらわされた。（**発迹顕本**）。（127頁）

上行菩薩は、法華経従地涌出品第十五に「大地の底の虚空界に住んでいた地涌の菩薩が釈尊の呼びかけに応じて涌出し、虚空の中であって、釈尊から『法華経』を末法にひろめるべきを託された」と説かれる地涌の四菩薩の上首。さらに、法華経神力品第二十一で釈尊は滅後末法弘通のため法華経の肝要である四句要法(南無妙法蓮華経)を上行等の四菩薩に付嘱する。この結要付嘱の儀式を受けて末法に南無妙法蓮華経を立て弘通されたのが、**上行菩薩の再誕である日蓮大聖人**である。しかしこれは外用浅近の姿であり、**内証深秘の辺は久遠元初・自受用報身如来の再誕**となる。**日寛上人**は「文底秘沈抄」に「若し外用の浅近に望めば上行の再誕日蓮なり。若し、内証の深秘に望まば、本地自受用の再誕日蓮なり」と述べられている。（136頁）一と。 13/106

次に、戸田城聖全集の発迹顕本についての講義3つをご紹介します。

(赤字、下線は図斉によります。)

由比ヶ浜辺の首の座より無作三身自受用報身を証得して、その御内証は寿量品の文底下種・事行の一念三千の南無妙法蓮華經である。されば大聖人は脱益寿量文底の本因妙の教主であらせられるから、一切經を読まずとも、一切經の仏菩薩が大聖人に随従し、かつ一切經の功德が大聖人に雲集しているのである。

(戸田城聖全集第6巻開目抄講義 356 頁)

丑の刻はすなわち陰の終わり、寅の刻はすなわち陽の初めであり、死の終わりと生の初めで、すなわち生死の間である。ゆえに御書には「三世諸仏の成道はねうしのをわり・とらのきざみの成道なり」(全集 1558 頁 上野殿御返事)と。ゆえに子丑の刻は大聖人の凡身が死にいたる終わりであり、頸を刎ねらるる寅の刻は久遠元初自受用身の生の始めである。房州日我の本尊抄見聞には「開目抄に魂魄佐渡に到るとは凡夫の魂魄に非ず、久遠名字本仏の魂魄なり」といっている。釈迦は二月八日、明星の出る時大悟し、大聖人はまた九月十二日、明星の輝く寅の刻に久遠元初の御本仏と顕れ給うたのである。(同第6巻 371 頁)

「このとき(竜の口の法難を乗り越えられた時)に、初めて上行菩薩の垂迹の姿を捨てて久遠元初自受用身如来の姿を顕わされるのです。これ以降は、すべての御振る舞いが仏なのです。その前は上行菩薩の再誕です。今後は久遠元初自受用身如来の御境地を顕わされるのです」(同第7巻 種種御振舞御書講義 561 頁)

上記、牧口先生、戸田先生の「発迹顕本」のご教示を継承されたのが、池田先生なのです。池田先生は昭和35年5月3日の会長就任式の挨拶の最後に、下記述べられました。(「会長講演集」第1巻6頁より)

全邪宗教を打ち破っていく日蓮大聖人様の大生命哲学を、そのまま御解明下された日寛上人様の絶対なる教学の深遠なる精神、その精神を精神として、広宣流布をめざして、そのまた一目標である七回忌をめざして進んでいきたいと思えます。一と。

そして、**池田先生**はその通り、日寛上人の御解明に基づいて、「**発迹顕本**」の真義を、以下、「**百六箇抄**」講義において明確にご指導されました。

「百六箇抄」講義 **序文 発迹顕本**

内証深秘に肉薄する信心が大事

日蓮大聖人は本地自受用身の再誕として、本未有善の一切衆生を救済しうる久遠の大仏法を掲げて、末法に出現されました。これ内証神秘の「辺」であります。故に「**本地自受用報身の垂迹上行菩薩の再誕・本門の大師日蓮**」の文は「再誕」の文字を「本地自受用報身」と「垂迹上行菩薩」の両方にかけて拝していかなければなりません。

すなわち「垂迹上行菩薩の再誕・本門の大師日蓮」と読めば、外用浅近の辺になります。「本地自受用身の再誕・本門の大師日蓮」と読んで初めて、内証深秘の領域に達するのです。

事実大聖人は、上行菩薩としての外用の姿をあらわされながらも、竜の口の頸の座において**発迹顕本**されております。開目抄に「日蓮といひし者は去年九月十二日子丑の時に頸はねられぬ、此れは魂魄・佐土の国にいたりて」とあるように、大聖人は頸の座において、上行菩薩の再誕としての迹の姿をはらわれ、**久遠元初の自受用報身の再誕**としての本地の生命を開顕されたのであります。

この**発迹顕本**を指し「**文底秘沈抄**」には「顕本は日蓮なり」と述べられています。したがって「**百六箇抄**」は、**文底の意**からすれば、本地自受用報身が靈山においては垂迹上行菩薩とあらわれ、末法には独一本門の大師として再誕された**日蓮大聖人の詮要した相伝書**であるということになるのであります。

以上のべてきたように、大聖人は久遠元初の本仏の生命をあらわしているのです。また、そして、**この久遠元初の仏としての生命をそのまま御本尊として顕わされ、万年の未来のために残されているのであります。一と。**

以上、**三代会長**の「**発迹顕本**」のご指導を、**新刊「池田先生の『仏法哲理の泉』は、完全に無視しているのです！**

また、本年の聖教新聞にもすでに2回、同じように「**発迹顕本**」の真義を示さない記事がありました。一つは1月28日の教学部教授講座の「**開目抄**」です。

日蓮といひし者は、去年九月十二日子丑時に頸はなれぬ。これは魂魄、佐土国にいたりて、返る年の二月、雪中に生じて有縁の弟子へおくれれば、おそろしくておそろしからず。みんないかにおじぬらん。これは釈迦・多宝・十方の諸仏の未来日本国当世をうつし給う明鏡なり。かたみともみるべし。

(新102・全223)

池田先生の指導から

いふなれば、不惜身命の如説修行によつて、末法の凡夫の生命に、内なる本来の仏の境地を顕してくださいました。まさしく、「開目抄」には主師親を具備した末法の御本仏としての民衆救済の大境涯が厳然と示されています。これが日蓮大聖人の発迹顕本です。

◇

発迹顕本といつても、凡夫の身を離れて、何か特別な姿になるということではありません。

どこまでも現実社会の中にあつて、菩薩としての行動を貫くということです。

それが法華経で示された十界互具の法理の眼目でもあります。

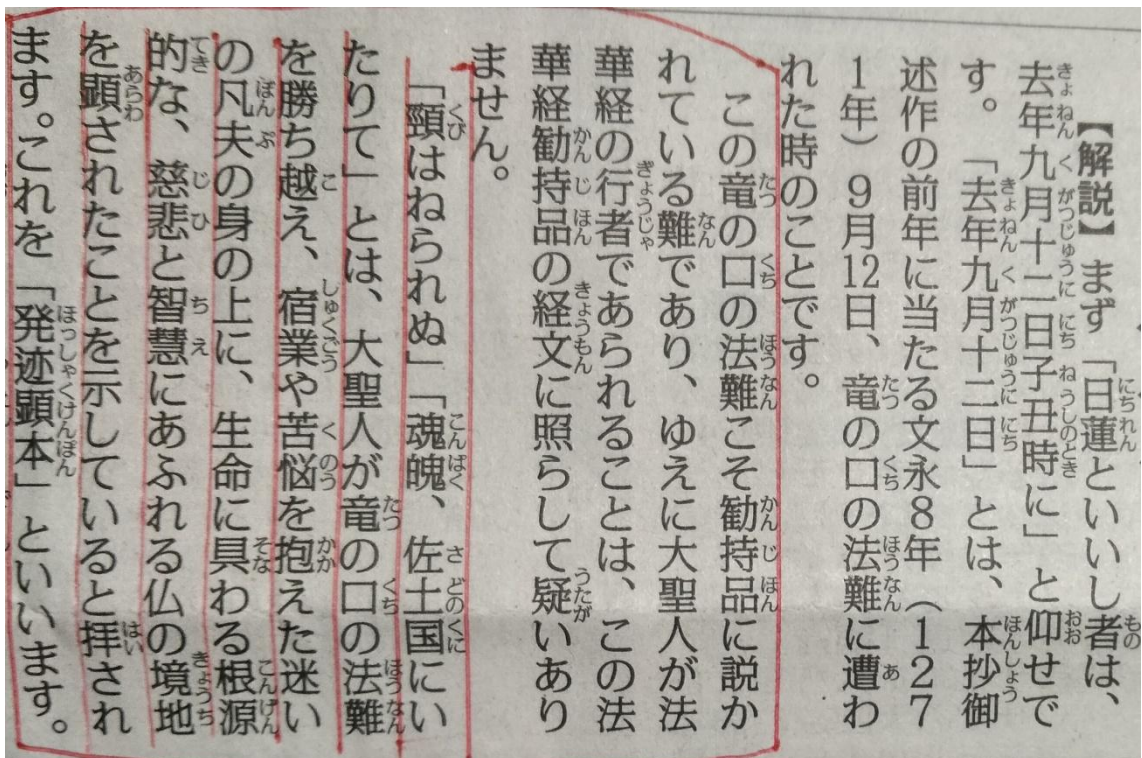
すなわち、大聖人の内面の境地は、元初の仏、永遠の仏の御境涯そのものですが、現実社会における外に現れた働きにおいては、教主釈尊から末法弘通を付嘱された「地涌の菩薩」の棟梁である「上行菩薩」として振る舞われるのです。（「大白蓮華」2021年9月号、「世界を照らす太陽の仏法」）

この記事では、**発迹顕本の根本義である久遠元初自受用身**も完全無視、大聖人の内面の境地は元初の仏、永遠の仏の御境涯そのものと記しながら、

— 日蓮大聖人は、教主釈尊から末法弘通を付嘱された「地涌の菩薩」の棟梁である「上行菩薩」の立場として振る舞われるのです。 —と書かれています。

これは、完全なる誤りです！これは、「**教学要綱**」において、何か所も記された記述であり、まさに、**釈迦を本仏とし、その使いが日蓮とする、釈迦本仏論**です。

また、4月20日、なんと、**聖教新聞創刊記念日**に、以下の記事がありました。



慈悲と智慧にあふれる仏の境地を顕わされた！ 何じゃこれ？です。

「**発迹顕本**」を、こんな薄っぺらな解釈、**まるで、小中学校の道德の教科書のような、抽象論**で記してよいのでしょうか！ こんな美辞麗句で繕い、日蓮仏法が一番大事な「**発迹顕本**」を記してよいのでしょうか！ 未来の学会の宝である女子学生部に日蓮仏法の本当の偉大さを伝えないでよいのでしょうか？

こんな記述では、若い方々が**日蓮仏法の真義**も知らずに終わり、池田先生のご指導からの本当の感動、感応妙など起こるわけがないのです。

続く、7月13日の開目抄⑥も文上からの解説に終始し、『池田大作全集』第34巻「開目抄」には「**開目抄は人本尊開頭の書**」の記述が6回、また、「**日蓮大聖人の本地は久遠元初の自受用身**」の記述が5回あるにも拘わらず、**「池田先生の『仏法哲理の泉』と、聖教新聞には全く記されていないのです！**



池田先生の講義から

「疑う心なくば自然に仏界にいたるべし」(全234・新117)と仰せのように、「信」の一念のみが、疑いや嘆きなどの無明の生命を打ち破って、妙法蓮華經の力用を生命に現す力を持っています。

しかし、「無明」の力もまことに執拗であり、根深い。本当に無明と戦っていかなければならない時に、私たちの心に忍び寄り、生命を侵していくのが無明です。

す。その愚かさを「つたなき者のならひは約束せし事を・まことの時はわするなるべし」(全234・新117)と戒められています。(中略)「今が「成仏への時」ではないか！ この大難を突破すれば、永遠の幸福を成就することができる！」との大聖人の魂の叫びが伝わってきます。

何があっても疑わない。何が起ころうとも嘆かない。その強靱な魂を持った人は、何も恐れるものはない。(『池田大作全集』第34巻所収「開目抄」講義)

以下、**池田先生の本当の「開目抄」講義**を示します。そして、**主・師・親の三徳の本義**を示します。上記との違いに愕然、**完全に池田先生を無視です！**

『池田大作全集』第34巻「開目抄」講義、以下4つの重要な記述です。

1. 23 頁には — 「日蓮といふし者は去年九月十二日子丑の時に頸はねられぬ、此れは魂魄・佐土の国にいたりて返年の二月・雪中にしるして有縁の弟子へ贈れば、をそろしくて・をそろしからず・見ん人いかに・をぢぬらむ」(新 102、全 223)まさに、「大聖人の魂魄に目を開け」と仰せの御文である。ここで大聖人は、「竜の口の頸の座において凡夫・日蓮は頸をはねられた。今、佐渡で『開目抄』を書いているのは日蓮の魂魄そのものである」と言われている。この「魂魄」とは発迹顕本された御内証である「久遠元初自受用身」にほかならない —

2. 54~57 頁には — 「一念三千の法門は但法華經の本門・寿量品の文の底にしづめたり」(新 54、全 189)の講義で一この御文において日蓮大聖人は、「凡夫成仏」の鍵となる根源の法を「一念三千の法門」と呼ばれ、それが「但法華經の本門・寿量品の文の底」に秘沈されていると述べられています。(中略) — 大聖人は、十界互具が事実として実現する道を、「信」「祈り」「唱題」という、身・口・意の三業にわたる事行の南無妙法蓮華經として確立してくださったのです。そして、いわば見えない自他の仏性への信を開くために、御自身の南無妙法蓮華經の生命を御本尊として顕され、私たちの信心の明鏡としてくださったのです。 —

3. 74 頁には — 日寛上人は「三重秘伝抄」で、文底の義として「本因初住の文底」に「久遠名字の妙法、事の一念三千」が秘沈されていると示されています。「初住」とは、仏と成って万人の救済を実現しようと自身の生き方の根本目的が定まった境地であり、どのような困難があろうとも永遠に菩薩道を前進し続け、決して退かないと心が決まった境地です。

釈尊が久遠において、永遠の菩薩道を実践し続けることを真に決意したときが、釈尊の久遠実成の「本因」です。しかし、その初住位に登った修行の原動力として、成仏の根源の法である「久遠名字の妙法、事の一念三千」があると言われているのです。「名字」とは「名字即」のことで、妙法を初めて聞いて信ずる凡夫の位です。「久遠名字の妙法」とは、凡夫が実践し成仏を実現する根源の法です。その法とは南無妙法蓮華經であると、直ちに説き示されたのが大聖人であられるのです。

4. 290 頁には — 「日蓮は日本国の諸人にしうし父母(主師親)なり」(新 121、全 237)、日蓮大聖人こそが末法の主師親の三徳を具備されていると宣言されている一節であり、本抄が「人本尊開顕の書」と言われる根拠もここにあります。 — と。

上記、池田先生の「開目抄」講義でのご教示が、日蓮仏法の真義の中心なのです！これまで、学会創立以来 95 年間、学会員は、三代会長がご教示された日蓮大聖人の御生涯の最大事「発迹顕本」の真義を拝して来たのです！

それを 1 年 9 か月前に、突如、「**教学要綱**」は理由なく捨て去ったのです！こんな暴挙は許されないのです！私が、今、敢えて申し上げるまでもなく日蓮大聖人は竜の口の法難で「**発迹顕本**」され、**久遠元初の自受用身如来の本地**を顕わされ佐渡に流罪後、そのご本仏のお立場から**人本尊開顕の書「開目抄」**を記され、その 8 か月後、**法本尊開顕の書「観心本尊抄」**を記されたのです。そして、大聖人はご本仏のお立場を宣言され、その久遠元初の自受用身如来の本地を「**人法一箇の御本尊**」として顕わされていかれたのです。

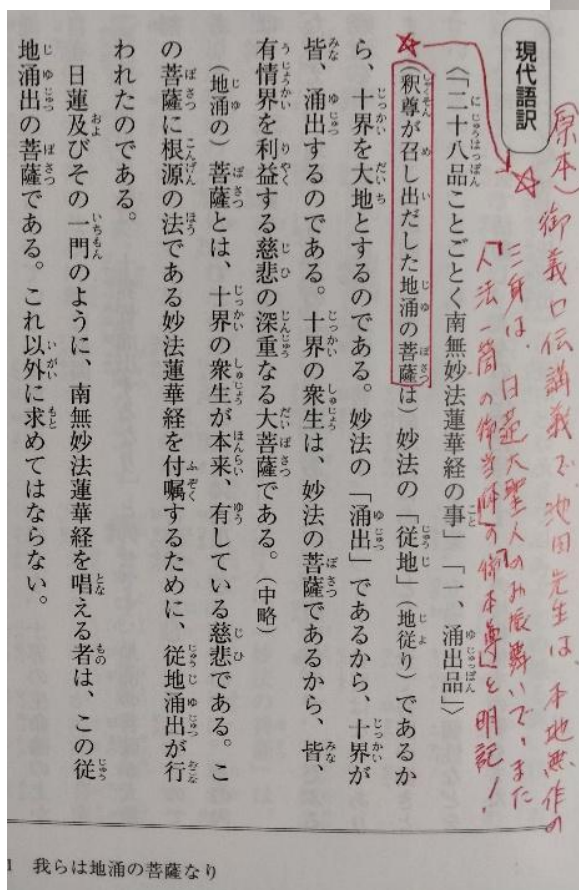
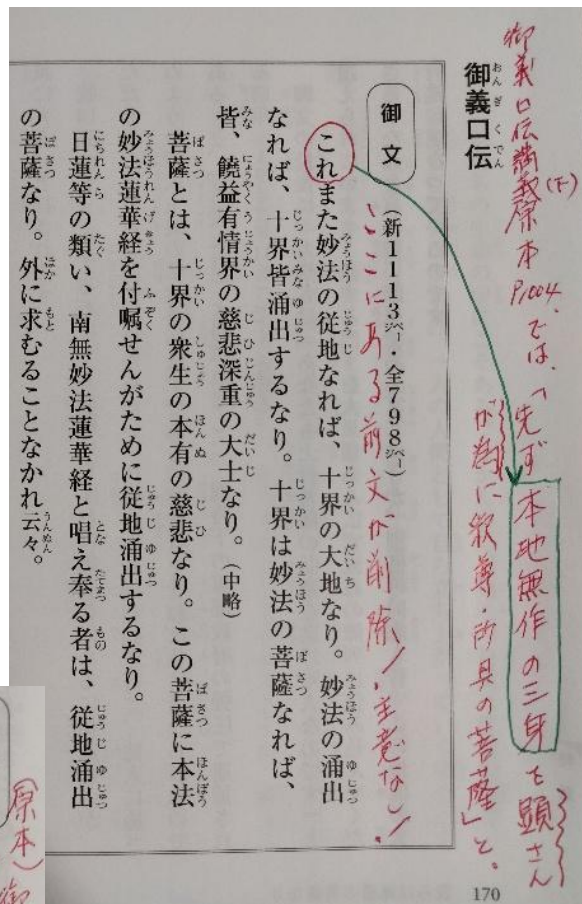
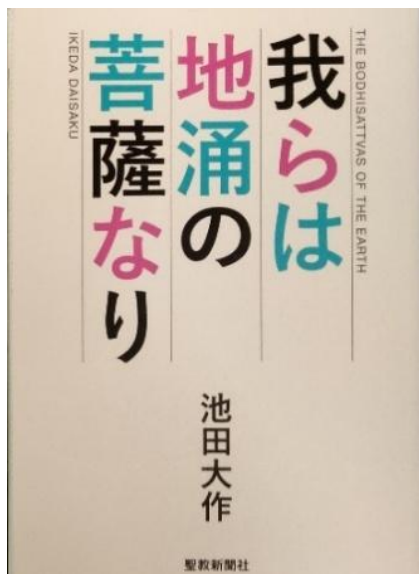
この日蓮仏法の真義を破壊、捨て去ってしまった「**教学要綱**」は、それ自体が創価学会における破和合僧そのものなのです。三代会長に違背したその邪義は全学会員を惑わし、混乱させているのです。

私は、この 2 年 8 か月の間、一日 3 時間の唱題をして参りました。そして、毎日、御本尊様、日蓮大聖人から**一日蓮の御本尊の人法一箇を否定、日蓮仏法を破壊する「教学要綱」とは断固戦いなさいーとのご下命を頂いております。**私は、そのご下命を拝受、使命を確信し、皆様にお伝えしております。

そして、御本尊を否定することは、結論、私たち人間のみならず、あらゆる有情・無情の生命、究極的には大宇宙を破壊することであると確信し、全生命を守るため、破邪顕正の戦いをしており、それこそが池田門下生として、師匠池田先生への最大、最高の報恩感謝の行いであると確信しております。

次に、最も近刊の教学書「**我らは地涌の菩薩なり**」(2025 年 5 月 3 日刊) の文上解釈を破邪顕正します。

この書についての結論を先に述べます。私は、これほど酷く、池田先生の「**御義口伝講義**」の真意「人法一箇」を隠蔽した作文はないと断言します。なぜ、先生の原本を削除するのか！と、怒りでいっぱいです。



上記、赤字で書いた通りですが、

池田先生の「御義口伝講義」**原本**冒頭の記述が**完全に削除**なのです！

「**涌出品**」の削除された文こそが、最重要の意義を表しているのです！それを、敢えて削除です！

「御義口伝講義」の冒頭を削除してしまつては、日蓮大聖人の本意が伝わるわけがないのです！

特に「**本門頭開の序分なり、故に先ず、本地無作の三身を顕わさんが為に、釈尊・所具の菩薩**」を削除したら、この御義口伝は**意味が無い**のです！

以下、「御義口伝講義」原本で、池田先生がご教示された本地無作の三身の本義「人法一箇」を心肝に染めなければいけません。

P/006

本法の妙法蓮華經 無作の三身、すなわち久遠元初の御本仏の所持されている、仏法の根本の法が、三大秘法の南無妙法蓮華經である。御義口伝上（七五一頁）に次のごとく仰せである。「されば地涌の菩薩を本化と云えり本とは過去久遠五百塵点よりの利益として無始無終の利益なり、此の菩薩は本法所持の人なり本法とは南無妙法蓮華經なり、此の題目は必ず地涌の所持の物にして迹化の菩薩の所持に非ず、此の本法の体より用を出して止観と弘め一念三千と云う、惣じて大師人師の所釈も此の妙法の用を弘め給うなり、此の本法を受持するは信の一字なり」と。

P/005

本地無作の三身 寿量品第十六において、仏は久遠より三身常住の仏であることが明かされる。これは、あくまで文上の教相であり、文底より拝するならば、その本地たる無作の三身を説きあらわしているのである。御義口伝上（七五二頁）に「されば無作の三身とは末法の法華經の行者なり無作の三身の宝号を南無妙法蓮華經と云うなり」とある。すなわち、別しては末法御本仏日蓮大聖人のお振舞い、また人法一箇の御当体である三大秘法の御本尊のお姿を説きあらわすのである。

本文 御義口伝講義 (下) P/004

一涌出品

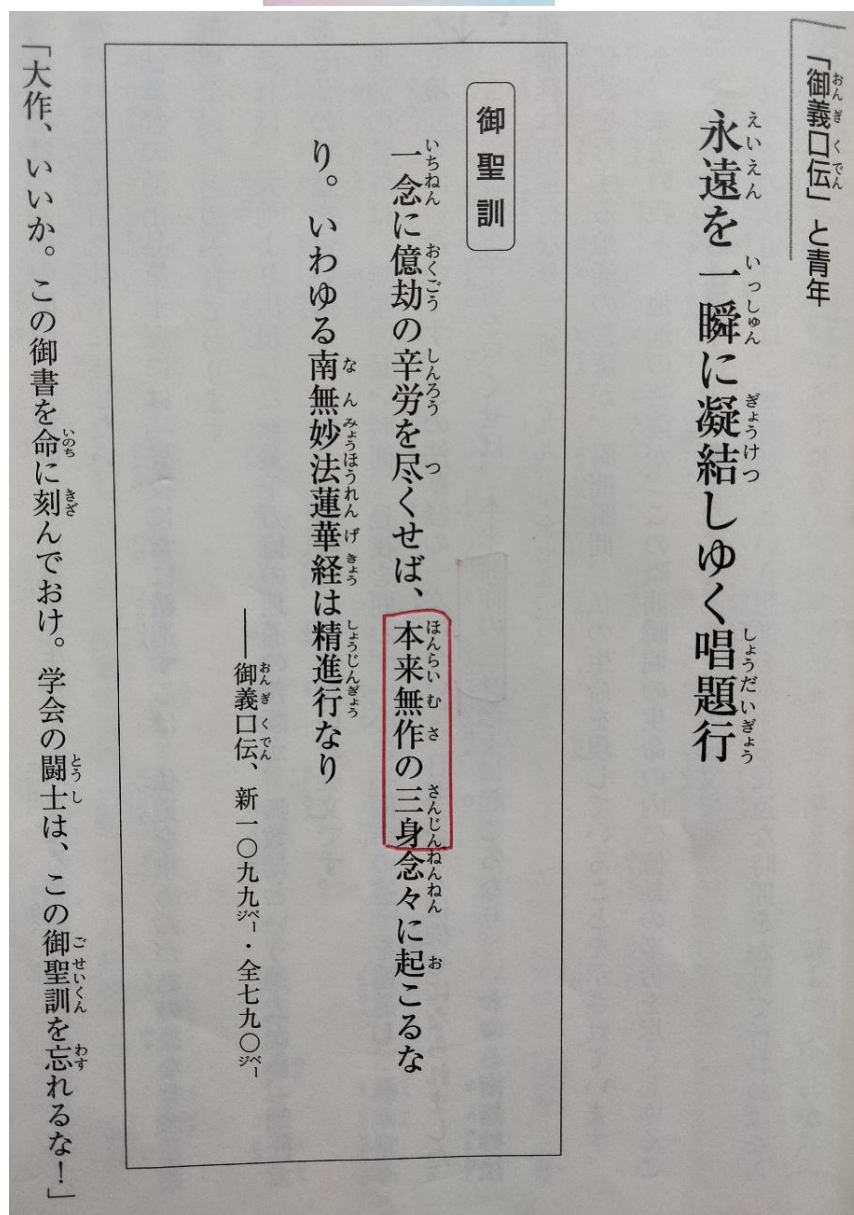
御義口伝に云く此の品は迹門流通の後・本門開顯の序分なり、故に先ず本地無作の三身を顯さんが為に釈尊・所具の菩薩なるが故本地本化の弟子を召すなり、是れ又妙法の從地なれば十界の大地なり、妙法の涌出なれば十界皆涌出なり、十界妙法の菩薩なれば皆饒益有情界の慈悲深重の大地なり、蓮華の大地なれば十界の大地も十界涌出の菩薩も本来清淨なり、所詮悟道に約する時は從地とは十界の衆生の大種の所生なり、涌出とは十界の衆生の出胎の相なり菩薩とは十界の衆生の本有の慈悲なり、此の菩薩に本法の妙法蓮華經を付属せんが為に從地涌出するなり、日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は從地涌出の菩薩なり外に求むること莫かれ云云。

(中略)

無作の三身、すなわち久遠元初の御本仏の所持されている、仏法の根本の法が、三大秘法の南無妙法蓮華經である。御義口伝上（七五二頁）に「されば無作の三身とは末法の法華經の行者なり無作の三身の宝号を南無妙法蓮華經と云うなり」とある。すなわち、別しては末法御本仏日蓮大聖人のお振舞い、また人法一箇の御当体である三大秘法の御本尊のお姿を説きあらわすのである。

人法一箇の御当体の

次に「御書と師弟」に掲載の、文上講義を3つ紹介します。



ここでも、御文中の「無作の三身」が一（本来）自分自身に具わっている
ありのまま（無作）の仏の生命 一と、あまりにも浅薄な文上解釈です。

そして、以下の最後に、一古今東西、権威の聖職者が民衆を見下し、抑圧して
きたのが多くの宗教の悲劇の歴史です。「御義口伝」は、こうした人間蔑
視、民衆蔑視の宗教に対する挑戦であり、高らかな勝利宣言とも拝察されま
す。一と記していますが、私は、池田先生の本当のご教示を無視、削除してお
きながら、よくもまあ、こんな高尚なことを記すものだ！と、呆れています。

「二念に億劫の辛勞を尽くせば、本来無作の三身念々に起こるなり。いわゆる南無妙法蓮華経は精進行なり」（新一〇九九頁・全七九〇頁）

仏法を行ずる地涌の菩薩が、瞬間瞬間、仏の生命を現していることを示されています。今、末法の我々、地涌の菩薩が、この瞬間瞬間の生命の内に億劫の辛勞を尽くしゆくこと。それが南無妙法蓮華経の唱題行なのである、との御文です。

それまでの仏道修行は、「無量劫」という想像を絶する長遠な時間をかけて行わねばならないとされてきました。そうではなく、南無妙法蓮華経と唱えることによって、わが「一念」に「本来無作の三身」、すなわち、もともと（本来）自分自身に具わっている、ありのまま（無作）の仏の生命を湧き上がらせることができる。

いわば、永遠を一瞬に凝結して行ずる修行が、私たちの唱題行なのです。

胸中の仏の大生命

「三身」とは、仏の生命の三つの側面であり、端的に言えば「法身」（真理）、「報身」（智慧）、「応身」（慈悲）です。この三身がそろった完全な大生命が、他のどこでもない、わが胸中から湧き起こってくるのです。

どれほど素晴らしい妙法の功力であり、どれほど深遠な法理であり、どれほど荘厳な私たちの仏道修行でありましょうか。

凡夫である私たち自身の内に尊極の仏の生命が厳然と具わっている——この仰せは、仏法の人間主義の精髓です。

古今東西、権威の聖職者らが民衆を見下し、抑圧してきたのが、多くの宗教の悲劇の歴史です。「御義口伝」は、こうした人間蔑視、民衆蔑視の宗教に対する挑戦であり、高らかな勝利宣言とも拝察されます。

次頁に、「御義口伝講義」原本、池田先生の真意を掲載します。

文句の九の文を文底より読めば、如来とは積尊のことである。すなわち総じては十方三世のあらゆる仏に通ずるのである。だが別しては、本地無作の三身、すなわち久遠元初の、凡夫即極の本仏である。いま日蓮大聖人およびその門下の意で如来を論ずるならば、総じては、一切衆生はことごとく如来である。だがこれはあくまで理の上で論じたものであり、別して、事の上で論ずるならば、日蓮大聖人およびその弟子檀那のことである。されば、無作の三身とは、末法の法華經の行者、すなわち末法に全民衆救済のために出現された御本仏日蓮大聖人の御事である。

この無作の三身、即日蓮大聖人の宝号を、南無妙法蓮華經というのである。これ人法一箇の本尊であり、寿量品の事の三大事、すなわち内証の寿量品に顕わされた事の一念三千の当体たる本門の本尊、本門の題目、本門の戒壇の三大秘法とはこのことなのである。

「御義口伝講義」原本は、

無作の三身即日蓮大聖人、

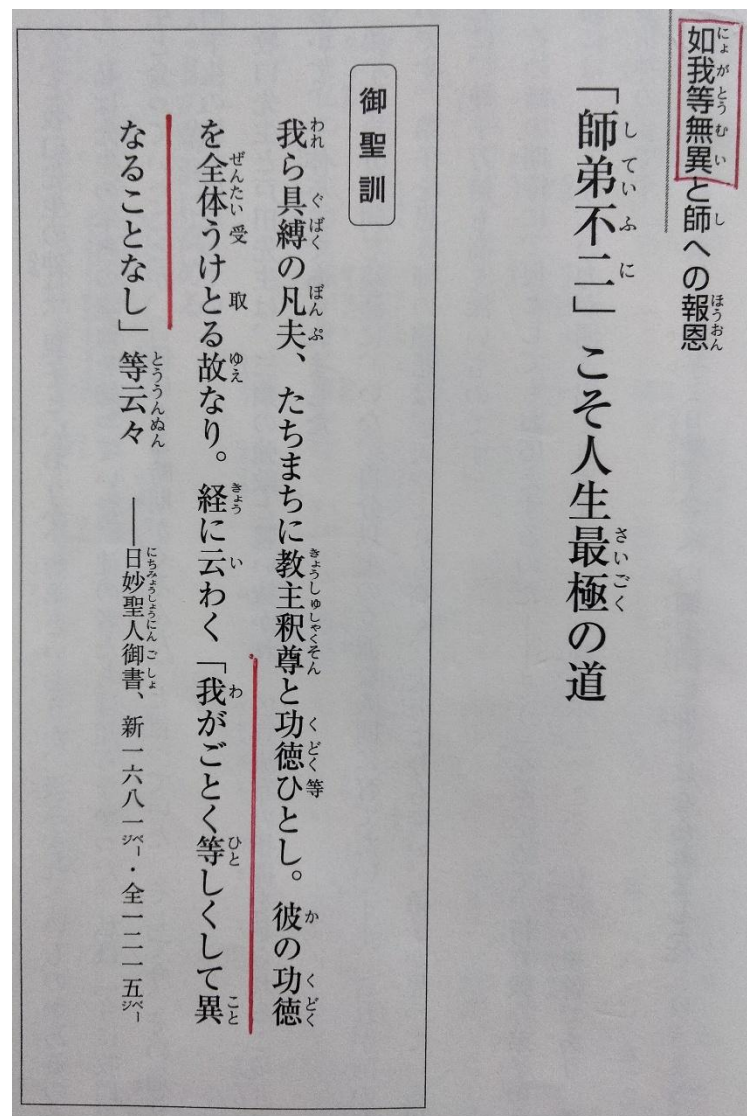
南無妙法蓮華經であり、

「人法一箇の本尊」と、

池田先生のご指導なので

す！

二つ目に、「日妙聖人御書」の引用です。ここに「**如我等無異**」の重要義の解説と講義がごさいます。



次頁に法華經方便品第二の「**如我等無異**」の引用された御書の解説がされています。しかし、これも、全くの文上からの解釈、講義です！

日蓮大聖人は、女性の弟子（日妙聖人）への御聖訓に仰せにられました。

「我ら具縛の凡夫、たちまちに教主釈尊と功德ひとし。彼の功德を全体うけとる故なり。經に云わく『我がごとく等しくして異なることなし』等云々」（新一六八一頁・全二二五頁）

——煩惱に縛られた我ら凡夫は、たちまちのうちに教主釈尊と等しい功德を受けることができるのです。それは、釈尊の功德の全体を受け取るからです。經文に「我がごとく等しくして異なることなし（如我等無異）」とある通りです——。

あまりにも深遠な御聖訓です。苦惱多き凡夫である私たちが、妙法の功力によって、そのまま仏の大生命を我が身に輝かせていける。最高にありがたい、御本仏の大慈悲の法門です。

仏の境涯に高める

ここに仰せの「如我等無異」とは、法華經方便品第二の經文です。

釈尊が、弟子たちを自身と全く等しい仏の境涯に高めるといふ誓願を果たされた、という金言であります。

大聖人は、この經文にある通り、教主釈尊と同じ功德を受けられるのですよ、だから安心しき、信心に励んでいきなさいと日妙聖人を励ましておられる。

115 如我等無異と師への報恩 「師弟不二」こそ人生最極の道

—教主釈尊と同じ功德を受けられるのですよ—だけでは、文底の本義が無視なのです！このままでは釈迦仏法です！

続く、以下も酷いです。

人類の希望の法理

「如我等無異」の根本には、「師弟不二」の精神があります。この師弟の精神が忘れ去られてしまえば、仏は民衆と隔絶した特別な存在へと權威化されてしまう。インドから中国、日本へ流伝するうちに、真の仏教が隠没していった一因もここににあります。

法華經の真髓を行ずる日蓮仏法は、こうした仏教史の宿命を打破する希望の法理であります。

金くろの表面的ことば！

「彼の功德を全体うけとる故なり」。すなわち、仏が長遠の時間を経ながら、無量の修行によって得た大功德、その大境涯の全体を、妙法を持つ私たちはわが生命に「たちまちに」受け取ることができるのです。

7117

への報恩 「師弟不二」こそ人生最極の道

一法華經の真髓を行ずる日蓮仏法—とは何ですか！

これでは、法華經の真髓は、日蓮大聖人とは別にあり、それを大聖人様が修行しているみたいだ！そして、釈尊の法華經を大聖人が行じているような記述、つまり、釈迦本仏論だ！

一仏が長遠の時間を経ながら、無量の修行によって得た大功德、その大境涯の全体を、妙法を持つ私たちはわが生命に「たちまちに」受け取ることができるのです—とは、何ですか？酷い、抽象論だ！

これでは、釈尊は修業しただけで大功德、大境涯の功德を得たことになってしまいます。釈尊が成仏し得た本因、南無妙法蓮華經が示されていない！読者は何も理解できない、感動しない！

以下、「御義口伝講義」の「如我等無異」について、池田先生の本当のご指導を拝します。

「御義口伝講義」(原本)で、先生は次のようにご教示されています。

相、性、体の三如是が生命の実体であり、その生命がどのような働きをするかが、力、作、因、縁等の七如是なのである。すなわち、生命それ自体の活動の基調となるのが、七如是である。

幸福な生活を営むのも、不幸な生活に甘んじていなければならないのも、結局は、生命それ自体が、無作三身の覚体とあらわれるか、あらわれないかによるわけである。もしも、大御本尊を信じ、唱題するならば、大御本尊と境智冥合し、わが身も無作三身如来とあらわれ、現実の生活のうえに仏智を湧現し、ゆうゆうたる人生を楽しみつつ送ることができるのである。

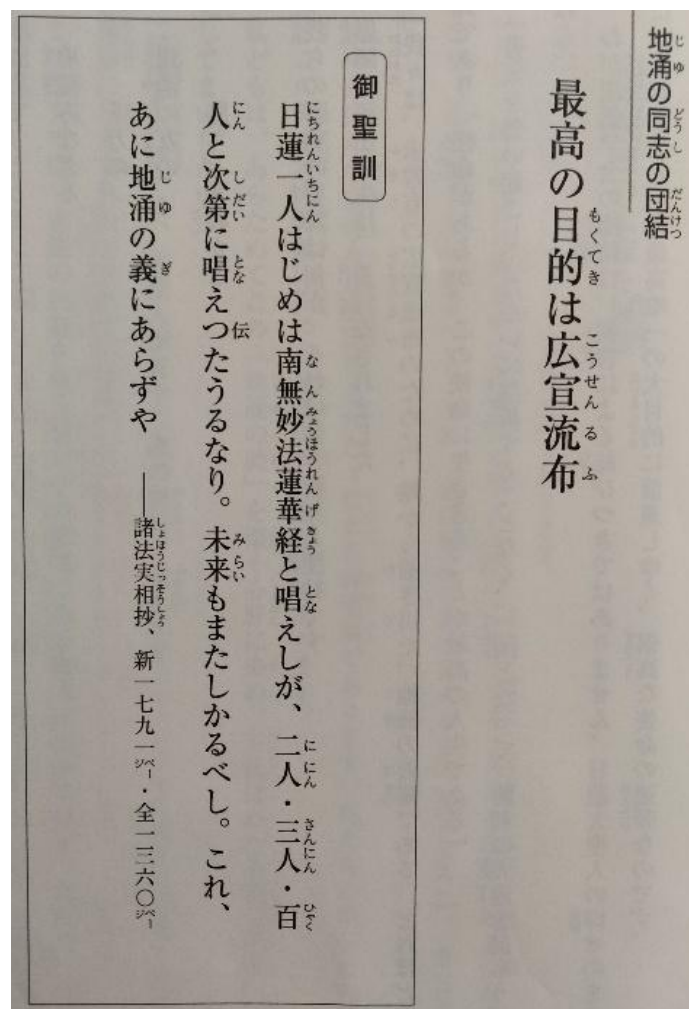
すなわち、われら衆生の相、性、体の三如是が、日蓮大聖人の御生命に冥合し、即無作三身とあらわれるならば、そこに仏の力用があらわれ、自然と、仏のふるまい、活動となり、無量の福運を積み、いかなる環境もことごとく変毒為樂し、自分の幸福への源泉とし、たえず未来をめざし発展し、内外に人間革命の姿を示しきつていく結果となるのである。これが如我等無異ということである。ゆえに御文には「如我の我は十如是の末の七如是なり九界の衆生は始の三如是なり我等衆生は親なり仏は子なり父子一体にして本末究竟等なり、此の我等を寿量品の無作の三身と説きたるなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱うる者はなり」

同じく「御義口伝講義」(原本)の続きには「人法一箇」がご教示です！

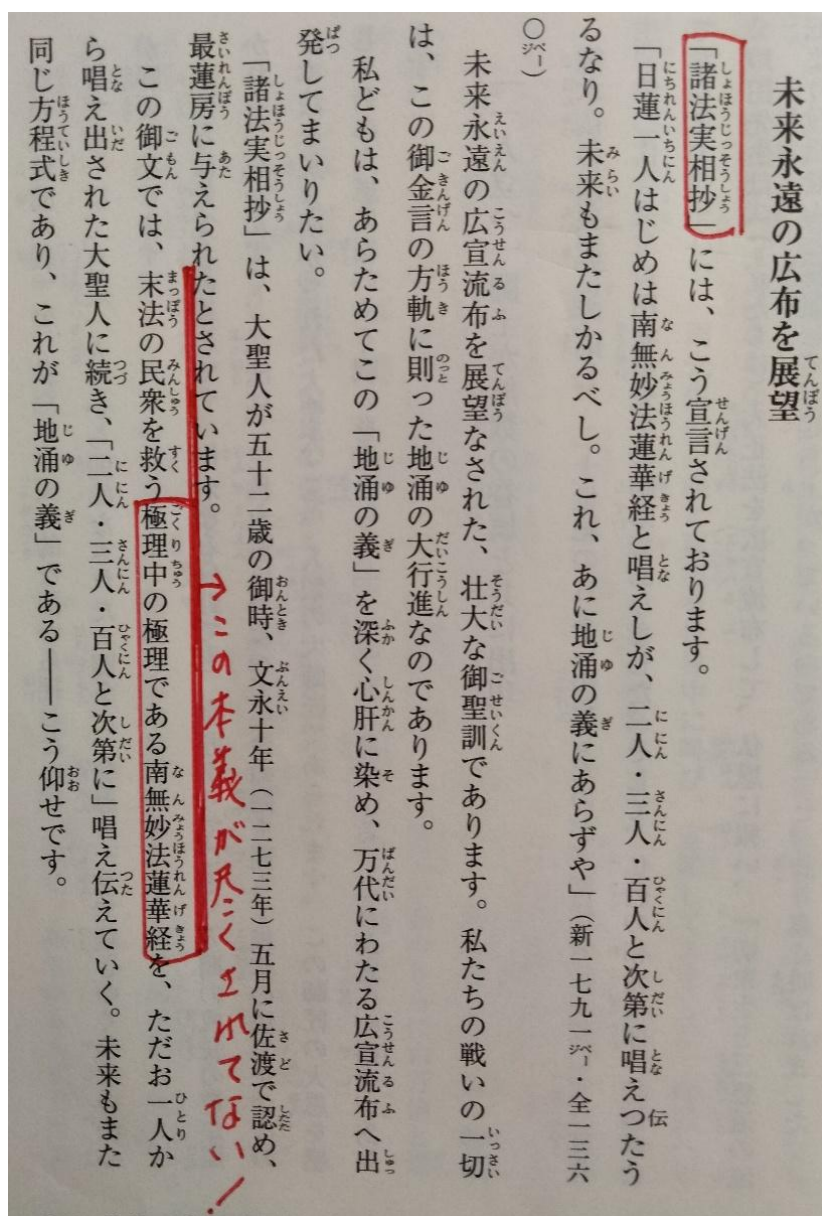
仏といっても、それは妙法の力用、働きである。ゆえに、釈迦、多宝も用の仏にすぎないし、また、迹仏にすぎないと諸法実相抄(一三五八頁)に示されている通りである。妙法とは無作三身である。ゆえに御義下(七五二頁)には「無作三身の宝号を南無妙法蓮華經と云うなり」と仰せられているのである。無作三身とは、別して日蓮大聖人なのである。妙法は法であり、日蓮大聖人は人であり、人法一箇なのである。ゆえに、もったいなくも、大御本尊の中央には、「南無妙法蓮華經 日蓮」としたためられている。その左右には釈迦多宝、あるいは上行等の四菩薩、さらには、声聞、緣覚、ずっと地獄界の衆生までいることがわかる。これは、釈迦多宝といえども、大聖人の己心の釈迦多宝であり、大聖人の生命の働きであることを示すものである。

したがって、釈迦多宝の二仏も、大聖人の御生命から出発するのであり、大聖人が親であり、釈迦多宝はそこから誕生する子なのである。さらにいえば、十方三世の一切の諸仏もまた子であり、大聖人は親であられることは、次の日寛上人の仰せで明瞭となろう。すなわち、当流行事抄では、玄文第七の「百千枝葉同じく一根に趣くが如し」の文を釈されて「横に十方に徧じ豎に三世に亘り微塵の衆生を利益したもう垂迹化他の功、皆同じく久遠元初の一仏一法の本地に帰趣するなり」(富要集第三卷二〇二頁)と仰せられているのである。文中「一仏」とは久遠元初の自受用無作三身如来即日蓮大聖人であり、「一法」とは、文底下種事行の一念三千の南無妙法蓮華經である。

三つ目に「**諸法実相抄**」の御文が引用され、その意義について解説されています。



末法の民衆を救う極理中の極理である南無妙法蓮華經と記されていますが、こんな説明だけでよいのですか！原本は**諸法実相とは即御本尊の異名！**です！
日蓮仏法の本義の記述が全くないです！



末法の民衆を救う
極理中の極理である南無妙法蓮華經
一と記されていますが、こんな説明
だけでよいのです
か！

原本には—

諸法実相とは即
御本尊の異名！

と明記です。

日蓮仏法の本義の
記述が全くないで
す！

「諸法実相抄講義」**原本** には、以下、日蓮仏法の本義が記されています。

人法両面から、末法一切衆生の尊敬すべき根本を明かされたことは、**人本尊**
開頭の書たる「開目抄」、法本尊開願の書たる「観心本尊抄」の結論が、ともに一書の中に包含されていると、私には拝せられるのであります。(中略) 初代
会長牧口常三郎先生も、常に本抄をとおして指導されたと伺っております。第
二代会長戸田城聖先生が、法華經は別にして、まず、私達数人に講義された御
書は「諸法実相抄」でありました。私もまた、講義を受講した一人でありま
す。(14頁) 一と。

諸法は実相であるとの法理を、日蓮大聖人の魂魄をとどめて御本尊という当体のうえに具現化されたのであります。それは、もはや諸法実相という法理ではなく、日蓮大聖人の御本仏の生命それ自体の諸法実相であります。御本尊を「事の一念三千」と申し上げるゆえんは、ここにあるのであります。ゆえに、諸法実相とは、文底観心のうえから言えば、御本尊と諸法実相という大宇宙の縮図であり、大聖人の仏法においては、諸法実相とは即御本尊の異名なのであります。(19～20頁)

「地涌の菩薩の中の上首唱導・上行・無辺行等の菩薩」とは、日蓮大聖人御自身のことであり、人本尊をあらわします。また「本門寿量品の事の一念三千」とは、法本尊のことであり、人法一箇をあらわしております。(39頁)

地涌の菩薩が、本地・久遠元初の自受用報身如来であるということは、久遠元初の仏が、法華經の儀式というスクリーンのうえに映した一つの影ということになるのであります。地涌の菩薩ばかりでなく、釈迦、多宝の二仏も、久遠元初の自受用報身即南無妙法蓮華經という本地の仏が、虚空会の儀式のうえに映し、あらわした影である(42頁)

大聖人は、法華經との関連でいえば、本化地涌の菩薩の上首上行の再誕であり、いま末法という時に出現して、この大法を建立されているのであります。(中略) 釈迦、多宝、更に、久遠元初の無作三身如来である南無妙法蓮華經という仏の生命をあらわすためには、御自身の内に、その仏の生命がなくてはならない。事実、日蓮大聖人御自身「日蓮がたましひをすみにそめながして・かきて候ぞ信じさせ給へ」(御書 1124)と仰せられているのであります。人法一箇の御本仏であるがゆえに、人法体一の御本尊を御図顕されたのであります。そこに、大聖人の「内証―内なる覚り」がある(59, 60頁)

「釈尊久遠の弟子」の「釈尊」とは、一往は法華經本門の教主釈尊であります。再往の辺を拝すれば、久遠元初の自受用報身如来であり、末法御本仏日蓮大聖人です。日蓮大聖人は、久遠よりこのかた、地涌の菩薩を教化してこられたという意味です。(77頁)

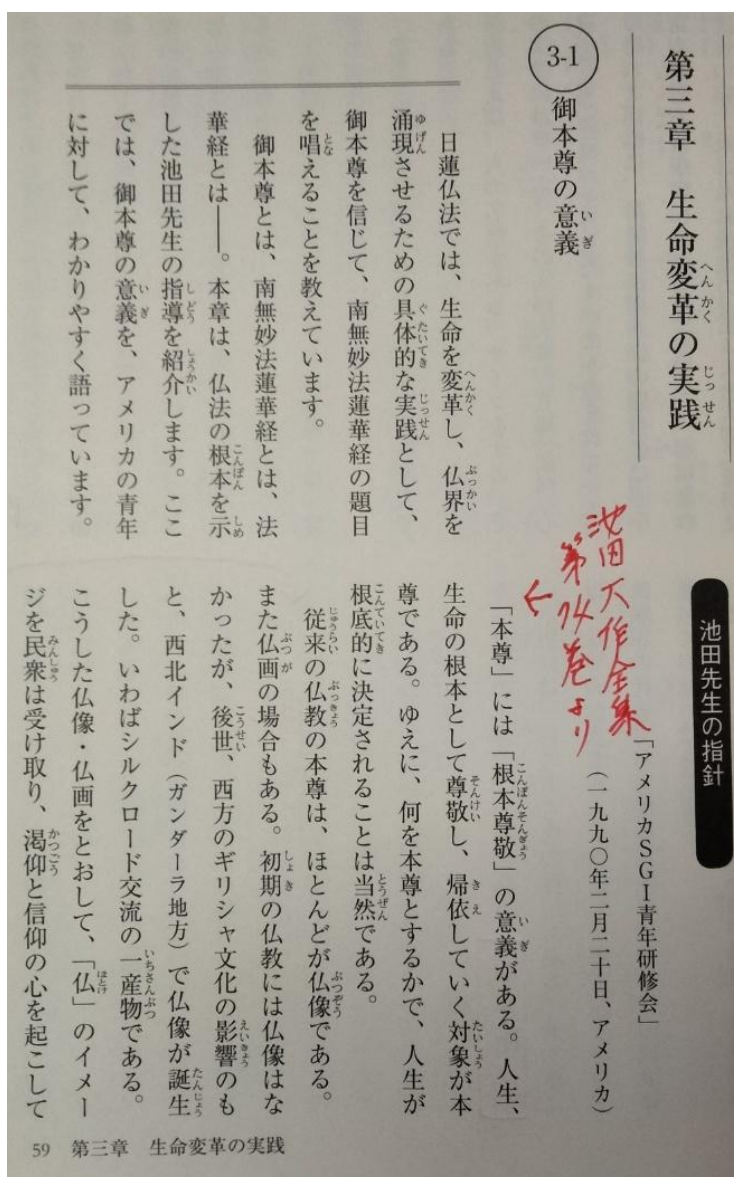
あの莊嚴な虚空会の儀式、釈迦、多宝の二仏並座、十方分身の諸仏の来集等々、すべて「末法の令法久住の故」であり、「我等衆生を仏になさんとの御談合」であった。すなわち、一往は上行再誕、再往は本地久遠元初の自受用報身としての日蓮大聖人御自身のために行われた儀式であり、諸仏の来集であった。(96頁)



近刊教学書の文上解釈を発見し、私は、5年前に発刊の「**池田大作先生の指導選集**」まで**改竄**があるのではとの思いになり、再読しました。

結果、**改竄**でした！

第一巻「**御本尊の意義**」で、やはり、「**人法一箇**」が削除でした。



5年前から、もう既に池田先生の、過日のスピーチが**改竄**なのです。

また、スピーチにある以下の引用も、**完全削除**です！

一また文字で御本尊をお認めの理由の一つについて、日淳上人は、法華経の仏菩薩の絵像では、しよせん文上教相にとらわれた色相莊嚴の仏であつて、末法の正しき本尊とはならない。

十界互具また事の一念三千即自受用身という御本仏の御境界はどうてい表せないからと拝される、と教えられた。
(『日淳上人全集』下巻) —

池田大作全集 74 巻の原文には

—御本尊には、変転する大宇宙（諸法）の実相、ありのままの姿が完璧に示されている。この宇宙の実相とは、私ども小宇宙の場合もまったく同じである。これらは御書に仰せのとおりである。

また、御本尊は「人法一箇」であられ、御本仏の御境界を示されたものであることは言うまでもない。この意味で、大聖人の御本尊こそ、文字どおり全人類が「尊敬」すべき宇宙の「根本」であり、真実の「本尊」であられる。

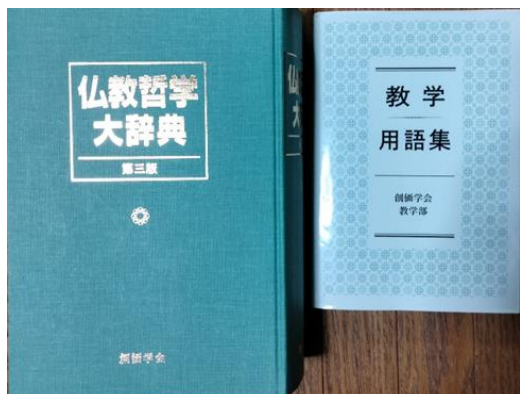
また文字で御本尊をお認めの理由の一つについて、日淳上人は、法華經の仏菩薩の絵像では、しょせん文上教相にとらわれた色相莊嚴の仏であって、末法の正しき本尊とはならない。十界互具また事の一念三千即自受用身という御本仏の御境界はどうてい表せないからと拝される、と教えられた。（『日淳上人全集』下巻）

宇宙には、善の力も悪の作用もある。御本尊には、仏界の代表である釈迦如来、多宝如来から、地獄界の代表である提婆達多まで、十界の代表がすべてお認めである。—とご指導です。

しかし、「指導選集」では、上記の赤の文章が完全削除です！「人法一箇」を削除！これでは「池田大作先生の指導選集」とはいえない！

さらに、次に、「仏教哲学大辞典第三版」（2000 年発刊）と「教学用語集」（2017 年発刊）を比較しました。

仏教哲学大辞典第三版には、池田先生が「序」を記されています。



創価学会創立七十周年の佳節にあたり『仏教哲学大辞典』（第三版）が発刊されることは、私の大きな喜びである。日蓮大聖人の仏法を根本に、広く世界の哲学・思想・宗教をも視野に納めた辞典を編纂することは、恩師・戸田城聖先生が示された遺訓の一つであった。この戸田先生の構想の根底には、仏法は全人類の境涯変革のためにあるという信念があった。

戸田先生は、いわゆる＝獄中の悟達＝において、この仏法観を確立された。人類が経験した最大の悲慘と言える第二次世界大戦下、戸田先生は、戦争を遂行する時の権力者たちの手で、師の牧口常三郎先生と共に投獄された。『戦争の狂気』が人間主義の思想と実践を貫く師弟に対して牙を剥いたのであった。師の牧口先生は不退転を貫き、獄中で逝去された。その殉教の姿は、最極の哲理に到達した精神の証明であった。

弟子の戸田先生は同じ獄中において徹底的に法華経を思索された結果、「仏とは生命なり」との悟達を得られ、生命論、境涯論としての仏法観を確立された。更に「われ地涌の菩薩なり」との大確信に立ち、全人類の幸福と平和という仏の大願を我が使命として覚知されたのである。この深き師弟不二、そして生死不二のドラマこそ、法華経を現代に蘇らせた偉大なる精神闘争の真髄であったと確信する。そして、これが戦後の創価学会の発展の原点になり、現代の世界広宣流布の源流になったのである。

戸田先生は戦後、法華経の意義を論じて次のように言われている。「人性の真に志求すべき境涯は『思議すべからざる、また、不可説の境涯にして、その人智慧の上下によらず、身分の上下によらず、智慧の深浅によらず、一意、仏を信ずることによってのみ涌出してくる安心立命の力ある障りなき境涯』であります。この境涯こそ、人類最高の志求すべき価値であるとお説きになっているのであります。この境涯を志求するこそ人類の目的であり、人類の使命であり、本然の性であると、仏は説かれた」と。

この**全人類の目的と使命を開く本源的な仏法観から、世界の宗教・哲学を視野に納めた仏教哲学辞典という戸田先生の構想が生まれた**のである。あらゆる宗教の源泉は「人間の祈り」である。宗教があつて祈りが生まれたのではなく、祈りがあつて宗教が生まれたのである。同様に、あらゆる哲学は「人間の思考」から生まれた。行動しては考え、考えては行動するという人間の営みがあつて、知を愛する学としての哲学が生まれたのである。どちらも、生命を萎縮させ、閉ざしていく恐怖、苦悩、不安から解放されるために、人間が獲得した巧まざる秘術であつたと言えよう。のみならず、人間は祈りと思考を通して、自分の生命空間を大きく広げ、豊かにしていくことができる。この可能性を人間生命の奥底から開き、人類に向かって提示したのが法華経なのである。

御書に「**心の不思議を以て経論の詮要と為すなり、此の心を悟り知るを名けて如来と云う**」（五六四ページ）と仰せである。生命の不可思議を究め、境涯の拡大と豊饒化への道を示したのが仏法、特に法華経の智慧にほかならない。二十一世紀の開幕を目前にし、人類は今、「新しい百年」「新しい千年」という未来を照らす光を切実に求めている。二十世紀は、情報革命やバイオ・テクノロジーに象徴されるように、科学技術が急速の進歩を遂げたが、他方で、「戦争の世紀」と言われるごとく、人間生命の尊厳を蹂躪してきた世紀でもあつた。

御聖訓に「**日蓮が慈悲曠大ならば南無妙法蓮華経は万年の外・未来までもながるべし、日本国は一切衆生の盲目をひらける功德あり、無間地獄の道をふさぎぬ**」（三二九ページ）と。万人に対し根底的な生命変革の道を開いた日蓮仏法の叡智の光は、宗教・哲学をはじめとするあらゆる文化遺産を活性化せしめる光源となり、憎悪の連鎖から平和の連帯へと人類社会のベクトルを転換せしめる原動力となると確信する。

人類全体の精神的前進のため、そして境涯革命のために、大きな役割を果たしていくことこそ本辞典の理想である。**この第三版を第一歩として、今後、版を重ねることにより、ますます本辞典の理想が実現していくことを念願するものである。最後に本辞典が、日蓮大聖人の仏法を学び、実践する人々に広く活用され、行学前進の大いなる糧となることを願ってやまない。**

二〇〇〇年十一月十八日 創価学会名誉会長 池田 大作

「**教学用語集**」(2017 年)の最初に掲示の梵例には以下記されています。

本書は、日常的に日蓮大聖人の仏法を学ぶための教学用語集です。一人一人の教学研鑽をはじめ各種学習会、講義で活用できるよう、解説には平易な表現を用い、御書や法華経を参照できるよう努めました。

編集方針は、以下の通りです。収録語句の選定

一、SGI(創価学会インタナショナル)会長・**池田大作先生の講義**をはじめとする創価学会の教学著作、また座談会拝読御書や研修会の解説をもとに、日常的な**教学研鑽に資する重要語句**を中心に収録した。

一、仏教の法理および関連する用語、宗教一般、思想、哲学、歴史に関する主要項目を収めた。具体的には以下の通り。

『新編日蓮大聖人御書全集 J(創価学会版)』に記載されている語句のうちの**主要なもの**。

『妙法蓮華経並開結 j(創価学会版)』に記載されている語句のうちの**主要なもの**。日蓮大聖人が御書の中で引用された天台大師、妙楽大師、伝教大師などの論書における**主要な語句**。

仏教一般の教義・用語・歴史などの**主要なもの**。他宗教、哲学、歴史などの語句・人物のうち**特に御書と関係する重要なもの**。日蓮仏法の教義をもとにした創価学会の用語の一部。

須田晴夫氏の「『**創価学会教学要綱**』と**日蓮本仏論の考察**」p130 には—「池田名誉会長が公の場に姿を見せなくなった二〇一〇年以降、創価学会の教学に変調が生ずる(中略) 二〇一七年発刊の『教学用語集』にも『**人法一箇**』『**人本尊**』『**法本尊**』の概念は全く無視されている」—とあります。創価学会員の大半は、この恐るべき事実を知らないと思います。

「**仏教哲学大辞典第三版**」の(序)に記された池田先生の記述と「**教学用語集**」の冒頭部を引用致しました。その結果、「**教学用語集**」の記述—**池田大作先生の講義**と、**教学研鑽に資する重要語句**を中心に収録した。—は、次頁の語句の内容から、虚偽であることが判明しました。なぜ、池田先生の本当のご指導、**最重要の「人法一箇」**を学会員さんに教えないのか！ **池田先生への背信である！** 以下、ご確認下さい。

にんぽういつか【人法一箇】 日蓮大聖人の仏法に

において、人本尊と法本尊は、その名は異なるが、その体は一つであること。人法体一ともいう。人法勝劣に対する語。絶対・究極の法（南無妙法蓮華經）と、その法を體現して衆生を教化する大慈大悲の仏は同じ本体であり、法はそのまま仏（人）であり、仏はそのまま法であることをいう。すなわち法本尊は、人本尊である日蓮大聖人の生命をそのまま図顕された曼荼羅御本尊である。この体の法理を法華經法師品第十に「若しは經卷所住の処には……此の中には、已に如来の全身有す」（法三九一）と説き、同見宝塔品第十一に「此の經第一なり 若し能く持つこと有らば

則ち仏身を持つなり」（同四一八）とある。また觀普賢菩薩行法經に「此の經を持つ者は、即ち仏身を持ち」（同六八八）とあり、法華文句卷十下に「法を持つするは即ち仏身を持つするなり」（大正三十四卷一四二）とある。觀心本尊抄には人即法の本尊について「其の本尊の爲体本師の娑婆の上に宝塔空に居し塔中の妙法蓮華經の左右に釈迦牟尼仏・多宝仏・釈尊の脇士上行等の四菩薩……末法に來入して始めて此の佛像出現せしむ可きか」（二四七）と述べられている。

文底秘沈抄には「前に明かす所の人法の本尊は、其の名殊なりと雖も、其の体是れ一なり。所謂、人即ち是れ法、自受用身即一念三千なり。法即ち是れ人、一念三千即自受用身なり」（六卷抄九二）とある。自受用身とは、応仏昇進の自受用身ではなく、久遠元初の自受用報身であり、御本仏、日蓮大聖人である。一念三千とは、事の一念三千であり、南無妙法蓮華經の御本尊である。人即法とは、自受用身すなわち大聖人に事の一念三千の法が具わっていることをいい、法即人とは、事の一念三千の法に大聖人の生命が具わっていることをいう。この人即法、法即人と互具一体のところを人法一箇といい、三大秘法の御本尊をいう。更に、御本尊の首題「南無妙法蓮華經 日蓮在御判」は、南無妙法蓮華經が法、日蓮在御判が人を表し、御本尊が人法一箇の当体であられることを意味している。故に文底秘沈抄の人法体一の次下に「是れ則ち正中の正、妙中の妙なり。即ち是れ行人所修の明鏡なり」（同）と人法一箇の御本尊を讃歎し、御本尊を受持し修行に励むべきことを述べている。【文段集】如説修行抄筆記（七六七）

にんほんぞん【人本尊】

三世常住で究極の真理である南無妙法蓮華經を悟り究め、一切衆生を同じ境地に至らせようとする人格のこと。末法の御本仏、日蓮大聖人をいう。妙法を法本尊というのに対する語。三大秘法の御本尊には人法があり、法本尊とは文底下種事行の一念三千の南無妙法蓮華經であり、人本尊とは久遠元初の自受用報身の再誕・末法下種の主師親・本因妙の教主・大慈大悲の日蓮大聖人である。人本尊開頭の書であり、日蓮大聖人が末法御本仏であることの宣言書である開目抄に「日蓮は日本国の諸人にしうし父母なり」(二三七)と述べられ、また百六箇抄に「自受用身は本・上行日蓮は迹なり、我等が内証の寿量品とは脱益寿量の文底の本因妙の事なり、其の教主は某なり」(八六三)と述べられ、これらの文によつて、日蓮大聖人が末法の人本尊であることが明らかとなる。また文底秘抄に「人法の本尊は、其の名殊なりと雖も、其の体は一なり。所謂、人即ち是れ法、自受用身即一念三千なり。法即ち是れ人、一念三千即自受用身なり。是れ則ち正中の正、妙中の妙なり。即ち是れ行人所修の明鏡なり。豈鏡に臨んで容を正すに異なるべけんや」(六巻抄九二)とある。

【文段集】 撰時抄愚記(二九三)

・「開目抄」^{かいもくしょう} 日蓮大聖人が佐渡流罪の当初に塚原で著され、文永9年(1272年)2月、四条金吾に託して門下一同に送られた書(186頁)。「立正安国論」「観心本尊抄」と並ぶ主要な著作。五大部の一つ。前半では五重の相對を説いて一念三千の仏種が法華經の本門寿量品の文底にあり、この一念三千の仏種が南無妙法蓮華經にそなわっていることが明かされる。後半では、法華經を忍難弘通される日蓮大聖人こそが、法華經に予言された通りに仏法を實踐する末法の「法華經の行者」であり、末法の衆生を救う主師親の三徳をそなえられた末法の御本仏であることが明かされている。☞主師親/法華經の行者/末法の御本仏/五重の相對

上と左は
仏教哲学大辞典
人本尊を明記
人本尊開頭の書も
明記
右は**教学用語集**
人本尊について
一切なし

かいもくしょう【開目抄】 上下二巻。文永九年(一二七二年)二月、日蓮大聖人が五十一歳の時、佐渡御配流中に塚原で御述作になり、門下一同に与えられた書。五大部、十大部の一つ。観心本尊抄が法本尊開頭の書であるのに対して、開目抄は人本尊開頭の書である。また、教行証に配すると、開目抄は一代の諸

ほうほんぞん【法本尊】 根本として尊敬すべき法のこと。本尊とは根本として尊敬する義。本尊に人法の二意あるうちの一つ。観心本尊抄には五重三段を明かして末法の法本尊が示されている。文底秘沈抄に「法の法本尊とは、即ち是れ事の一念三千・無作本有・南無妙法蓮華經の御本尊是れなり。具には観心本尊抄の如し」(六卷抄八一ページ)とある。〔六卷抄〕 末法相應抄(二七三ページ)

によらいめつごごひやくさいにはじむかんじんのほんぞんしょう【如来滅後五五百歳始観心本尊抄】 一卷。観心本尊抄、本尊抄ともいう。文永十年(一二七三年)四月二十五日、日蓮大聖人が五十二歳の時、佐渡流罪中に、一谷(新潟県佐渡市市野沢)で御述作になり、下総国葛飾郡八幡荘の富木常忍に与えられた書(千葉県)。五大部、十大部の一つ。開目抄が人本尊開頭の書であるのに対して、観心本尊抄は法本尊開頭の書である。

上の仏教哲学大辞典は法本尊を明記。

観心本尊抄にも、法本尊が明記です。

しかし、左の教学用語集には、法本尊については、一切記されていません。

また、観心本尊抄を載せてますが、ここにも法本尊の意義が、全くなしです！

*「観心本尊抄」| かんじんのほんぞんしょう 「如来滅後五五百歳始観心本尊抄」の略。文永10年(1273年)4月25日、日蓮大聖人が52歳の時、佐渡流罪中に一谷(新潟県佐渡市市野沢)で御述作になり、下総国葛飾郡八幡荘若宮(千葉県市川市若宮)の富木常忍に与えられた書(238頁)。御真筆は中山法華経寺に現存する。五大部の一つ。前半では観心について明かされている。具体的には観心とは凡夫が己心を観じて十界を見ること、また一念三千の仏種は南無妙法蓮華経に納まっていることを示され、末法では本門の本尊を信じて南無妙法蓮華経と唱えることが成仏のための観心の修行であるという受持即観心の法門が示される。後半では本尊について明かされ、五重三段を説いて曼荼羅本尊のすがたとその本尊を建立し弘通する人が明かされる。〔参照〕観心/五重三段/受持即観心/本尊

2000年発刊「**仏教哲学大辞典第三版**」と2017年発刊「**教学用語集**」を比較検証した結論として、「**仏教哲学大辞典第三版**」には、「**教学要綱**」に記されない日蓮仏法の下記5つの根本義(正論)の全てが明確に記述されています。(頁を付記)

1. 釈尊の”成仏した本因” は日蓮大聖人の生命＝南無妙法蓮華經(1248頁)
2. 日蓮大聖人は「久遠元初の自受用報身如来」(343頁)
3. 御本尊は「人法一箇」の当体(1320頁)
4. 日蓮大聖人の竜の口法難での「発迹顕本」の真義(1527頁)
5. 三宝の法宝は「南無妙法蓮華經の御本尊」、僧宝は「日興上人、広げれば創価学会も僧宝」、そして、一大秘法は「本門の本尊」(三宝は611頁、一大秘法は78頁)

しかし、「**用語集**」の記述では、上記の内、1, 2, 3については、「教学要綱」と同様に、全く記述がない。また、4の日蓮大聖人の「発迹顕本」の解説では、一応は日蓮大聖人をカッコ書きで(久遠元初の自受用報身如来)と記しているが、「久遠元初の自受用報身如来」の用語解説それ自体(70頁)が、日蓮大聖人であると明記をせず、これでは、完全に整合性に欠けます。

5については、僧法の解説が一僧法は日興上人であり、現代の僧法は創価学会となる。一とのごまかし、詭弁の極みです。さらに、一大秘法については「用語集」には解説はないですが、「**教学要綱**」は突如、理由も記さずに、一大秘法は「南無妙法蓮華經」と明記！こんな急変では、学会員は混乱します！

「**教学要綱**」の6年前、2017年発刊の「**用語集**」に解説の「**久遠元初**」(70頁)では、日蓮大聖人を記さずに釈尊を取り上げて、以下の論述です。

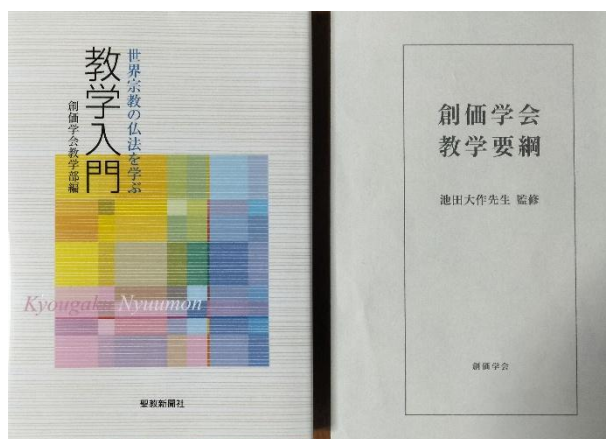
— ある特定の遠い過去ではなく、宇宙と生命の永遠の根源の次元。久遠元初とは寿量品に即して表現すれば久遠五百塵点劫の当初の意で、時間的な表現で釈尊の久遠の成仏の根底を指示している。しかし本質的には、無始無終の妙法を凡夫の信の一念に開覚し、凡夫のままで無作三身を成就する根源的な成仏の時は全て久遠元初である。— と。

私見、上記から言えることは、「用語集」は久遠元初について、一つの時点として時間論でとらえていることが基本的な誤りです。

そこで、「用語集」70頁にある3つの記述について、次のように考えます。—「**久遠**」の項目に記された「また、釈尊の根源的な成仏の時を久遠元初とし」から、「久遠元初とすることから」までは削除すべきです。なぜなら、釈尊の成仏は久遠元初ではないからです！また「**久遠元初**」の項目でも「寿量品に即して表現すれば」から「根底を指し示している」までも不適切で削除すべきです。また「**久遠元初の自受用報身如来**」の項目についても日蓮大聖人、また妙法を受持した万人がそれに当たると言うべきです。—と。

上記の事実から強く推定されることは、2017年発刊の「用語集」は、久遠元初を完全に無視した「**教学要綱**」に比べればまだましとも言えますが、「**教学要綱**」の方向に傾斜している面が強く、不適切です。結果、私としては、「用語集」は、「教学要綱」と共に、絶版にすべきであり、「仏教哲学大辞典第三版」の実質的な復活を目指すべきと考えています。

「仏教哲学大辞典第三版」は2000年の発刊であり、池田先生がちょうど同時期に、『**法華經の智慧**』全6巻を完結されたのです。つまり、池田先生が監修された最高峰の仏教哲学であり、日蓮仏法の真義、正義が完璧に解説された大辞典なのであります。それに対し、「**用語集**」は日蓮仏法の重要義を解説していません！これでは、「剣豪の修行」である日蓮仏法の研鑽は、不可能です！



続いて、2015年発刊「**教学入門**」（以下「**入門**」と略）には、2023年発刊「**教学要綱**」において削除、改竄された上記5つの、日蓮仏法の本義についての**正論**がありますので、それを記します。

1、釈尊の”成仏した本因”については「**入門**」175頁、小題「本因妙の教主」のところに

日蓮大聖人が自身の生命に覚知された法は、法華經で釈尊が久遠の昔に菩薩として実践し仏となった根本原因の素晴らしい法であることが示されているので**本因妙の法**です。日蓮大聖人は、この本因妙の法を凡夫の自身の生命に護持し、それを**南無妙法蓮華經であると顕わして**、人々にも教えられたので、**本因妙の教主**とも言われます。
(中略)

これに対して法華經本門の文上に説き示される釈尊は、久遠の昔に成仏した永遠の仏としての果報を身に表して、三十二相八十種好など、中には人間離れた特殊な種々の特徴を具えた莊嚴な姿を実現しています。このように超人的な果報を示しているのは、人々に憧憬を抱かせ、慕わせ、教え導くための方便です。この教えは、本果妙を表とした教えです。それゆえ、本門文上の釈尊は本果妙の教主と言われます。

2. 日蓮大聖人は「久遠元初の自受用報身如来」については、「入門」174頁の、小題「久遠元初の自受用身」のところに―

日蓮大聖人は、凡夫の身のままで、内面に仏の覺りの境地を確立されましたが、それは生命に本来的に具わる仏の境地、すなわち、本有の仏界を開き顕わしたものです。仏としての本性、すなわち仏性でもあります。本有の仏界を開き顕わした仏の境地は、そこに具わる智慧・慈悲などの功德を発揮し、自ら享受し、自在に用いていけるものです。この境地は、久遠元初の自受用身の境地です。

久遠元初とは、法華經寿量品では、五百塵点劫という久遠の昔に、釈尊が実は成仏していたこと(久遠実成)が明かされますが、その成仏を成し遂げるために菩薩道を行っていた(我本行菩薩道)凡夫の時を言います。これは法華經の文に引き寄せての理解であり、より本質的には、ある特定の遠い過去というのではなく、生命の本源の時をいいます。

すなわち、久遠元初とは、”久遠の過去から永遠の未来まで常に“ということであり、本来的に具わっていることを意味します。凡夫の生命に本来的に具わる仏の境地が、久遠元初の自受用身です。 ―とあり、また、次頁4「発迹顕本」の解説においても、久遠元初自受用身如来が説明されています。

3. 御本尊は「人法一箇」の当体については、「入門」208頁に―

自ら覺った妙法をそのまま説く自受用身の仏は、境地冥合の姿そのものと言えます。人と法が一体不二であるので、人法一箇・人法体一ともいいます。(中略)日蓮大聖人は、法華經の寿量品の文の底にひめられていた久遠の仏の本意である万人成仏の妙法を覺知して、それは南無妙法蓮華經であると説き広めて、久遠元初の自受用身の再誕として振る舞われました。その境地冥合の御自身の生命をそのまま曼荼羅に顕わされ、私たちが信受すべき御本尊とされたのです。

4. 日蓮大聖人の竜の口法難での「発迹顕本」の真義については、「入門」12頁の小題「竜の口の法難と発迹顕本」のところに―

この法難は、大聖人御自身にとって極めて重要な意義をもつ出来事でした。すなわち、大聖人は竜の口の法難を勝ち超えた時に、宿業や苦悩を抱えた凡夫という迹(仮の姿)を開いて、凡夫の身に、生命に具わる本源的な、慈悲と智慧にあふれる仏(久遠元初の自受用報身如来)という本来の境地(本地)を顕わされたのです。これを「発迹顕本(迹を開いて本を顕わす)」といいます。この発迹顕本以後、大聖人は末法の御本仏としての御振る舞いを示されていきます。そして、万人が根本として、尊敬し、帰依していくべき御本尊を図顕されていきました。

5. 「三宝」については、「入門」272頁の小題「三宝」のところに―

日蓮大聖人の下種仏法において尊崇する三宝とは、生命の根源の次元である久遠元初の三宝です。「久遠元初」とは”久遠の過去から永遠の未来まで常に“という意味です。実践に即していえば、凡夫が妙法を自身の生命に開き顕わす根源の成仏の時を意味します。「久遠元初の三宝」とは私たちの成仏のために永遠に尊崇する三宝です。久遠元初の仏宝は凡夫の身に成仏の根源の法を開き顕された久遠元初の自受用報身如来であられる日蓮大聖人です。久遠元初の法宝とは、大聖人が万人成仏の法として説き示された南無妙法蓮華經の御本尊です。久遠元初の僧宝とは、この仏宝と法宝を護持し正しく伝えた日興上人です。以上が下種仏法で尊崇の対象となる三宝です。尊崇の対象となる三宝を正しく護持して伝え広める人々の集いも、広い意味での僧宝です。今日では、日蓮大聖人の御心とお振る舞いを継承し、世界広宣流布を推進している創価学会が僧宝に当たります。 一と。

*** 上記、5つの正論が、8年後、2023年発刊の「教学要綱」で、**

説明もなく、削除、変更なのです。 池田先生が、私達に、真実の仏法である

「久遠元初の日蓮仏法、南無妙法蓮華經」をご教示下さったのです！これこそ、学会永遠の原理です！それを削除、変更してしまえば、これまで、池田先生のご指導を心肝に染めてきた多くの学会員さんは混乱してしまいます。また、新会員の方々も、必ずその矛盾に気づかれ、見抜かれると思います。

*** 追記** 本日、8月24日、学生部教学試験です。その教材が、正論の「教学入門」です。 これでは、邪義である「教学要綱」と整合性がないです！ 自語相違の教学！です。 後日、私は、試験内容を検証します。

最後に、**人法一箇**の有無につき「**勤行要典**」の比較をしました。結果は以下です。左が2015年以前の御本尊への御観念文、右はそれ以降です。

の文を観念し題目三唱。

二座 本尊供養

御本尊に向かい奉り鈴を打ち（以下「鈴」という）、方便品終わって鈴、
壽量品長行・自我偈・引き題目の終わりにて鈴、題目三唱の後

南無本門壽量品の肝心・文底秘沈の大法・本地難思境智冥合・久
遠元初・自受用報身如來の御當體・十界本有常住・事の一念三
千・人法一箇・獨一本門戒壇の大御本尊、御威光倍增御利益廣大
御報恩謝徳の御爲に
の文を観念し題目三唱。

一、御本尊への報恩感謝

法華經の肝心・南無妙法蓮華經の御本尊に南無し、報恩感謝
申し上げます。

末法の御本仏・日蓮大聖人に南無し、報恩感謝申し上げます。

日興上人に南無し、報恩感謝申し上げます。

と祈念の後、題目三唱します。

以前は「**人法一箇**」とありました。この件につき、親友O氏から以下の論考を頂きました。

—(2015年1月29.30日付聖教紙 創価学会教学部 解説)では、「学会会則第1章第2条」の教義条項の改定を發表しました。それによると。改定前の文「この会は、日蓮大聖人を、末法の御本仏と仰ぎ、一閻浮提總与三大秘法の大御本尊を信受し…」が、改定後の文では「この会は、日蓮大聖人を、末法の御本仏と仰ぎ、根本の法である南無妙法蓮華經を具現された三大秘法の大御本尊を信じ…」になりました。

この改定された文章の中に、既に、重大な仏法改竄が、含まれています。この時点で、既に、「日興門流からの離脱」を企てていたことが見てとれます。この時点では、私たち一般の学会員には、何のことかさっぱりわかりませんでした。

そこには、大聖人は宇宙と生命に内在する根本の法を南無妙法蓮華經であると明かされた。そして、それを三大秘法、すなわち、本門の本尊、本門の題目、本門の戒壇として、具体的に顕された日蓮大聖人御自身が御図顕された十界の文字曼荼羅とそれを書写した本尊は、全て根本の法である「南無妙法蓮華經を具現化」されたものであり…と記されていますが、これは、大問題、否、大謗法です。これらの説明は「**一大秘法**」は「**本門の本尊**」ではなく「**題目**」であるとの宣言です。そして、それは「**脱 日興門流**」を意味しています。

そして、大聖人の仏法における「信仰の本義」は、「根本の法である南無妙法蓮華經」を具現化した三大秘法を信じることにあります。つまり、**根本である一大秘法が「南無妙法蓮華經」**、それを開いて本門の本尊、本門の題目、本門の戒壇…。これは、そっくりそのまま**身延派の教義のコピー**ではありませんか。

さらに、三大秘法について「根本の法である南無妙法蓮華經を具現化されたものが三大秘法である」と。これでは、この宇宙のどこかしらに、「**南無妙法蓮華經**」という「**法のみ**」があつて「**人**」である「**仏(久遠元初自受用身)**」は、いないという、単なる「**空想**」、「**観念**」になってしまいます。

須田晴夫氏は「**創価学会教学要綱の考察**」で明確に述べています。(p.117～p.118)「**一大秘法**」についても日寛が「**本門の本尊**」としたのに対し「**教学要綱**」では、「**南無妙法蓮華經**」としている。(同書 p.158、p.161)これまで創価学会では、**一大秘法**を「**本門の本尊**」としてきたが(『**教学の基礎**」p.55) **教学要綱**は、**三大秘法**の根本である**一大秘法**を本尊から題目に変えているのである。これは、重大な教義の変更である。実は、**一大秘法**を南無妙法蓮華經とするのは身延派の教義そのものである。身延派の「**日蓮宗宗義大綱**」は、「**三大秘法**は本門の教主釈尊が末法の衆生のために本化の菩薩に付属された南無妙法蓮華經の**一大秘法**に基づいて開出されたものである。」(『**宗義大綱読本**」p.76)としている。「**教学要綱**」は**一大秘法**の内容を明確に日興門流から身延派に切り替えていることが分かる。…と。つまり、2014年の「**創価学会会則 教義条項の改正**」を発表した時点で、既に「**日興門流からの離脱**」を企てていたことがわかります。

日蓮大聖人は、「**曾谷入道殿許御書**」(全 p.1030～p.1032)で**一大秘法**について述べておられます。末法に入ると、「**不孝謗法の者 大地微塵の如し**」(大般涅槃經)、「**法滅尽の時は狗犬の僧尼 恒河沙の如し**」(法滅尽經)と、謗法の者が充満すると述べられて、「**大覺世尊 仏眼を以て 末法を 鑑知し 此の逆謗の二罪を対治せしめんが為に 一大秘法を留め置きたもう**」と述べておられます。そして、虚空会の儀式的描写に続きます。地涌の菩薩が出現し、釈尊の寿量品の説法に移り、神力品で四大菩薩に付属されます。(本果妙の教主から本因妙の教主へ交代) そして、次のように述べられます。 48/106

「其の所属の法は何物ぞや、法華經の中にも広を捨て略を取り、略を捨てて要を取る 所謂妙法蓮華經の五字 名 体 宗 用 教の五重玄なり」…と。 謗法が充満する末法において「所属の法」つまり、神力品で地涌の菩薩に付属された法とは、妙法蓮華經の五字であると仰せになっておられます。けれども、「妙法蓮華經」は、単なる「名前」、「タイトル」ではないと仰せです。「五重玄」を具えていると。つまり、必ず実体を伴い、特質や働きが具わり現実に影響を与えるのである、と仰せになっておられます。 その**実体こそが、末法ご出現の久遠元初の自受用身、日蓮大聖人のご生命そのものである「人法一箇の御本尊」**であり、それを根本とした三大秘法であると拝察します。

五重玄の名、体、宗、用、教の「宗」とは「要」という意味だと理解します。そうしますと、日蓮大聖人の五重玄は、名は南無妙法蓮華經 体は**人法一箇の御本尊**、そして、宗は、因果俱時に証得できる、用は、万人を幸福の軌道に確実に導く働きがある、そして、教は、現実に、世界中に、多くの SGI メンバーがいて、多くの幸福の実証を示しており、影響を与えている。これが日蓮大聖人の五重玄である。このように解釈しました。結論、**「人法一箇の御本尊」**に真剣に祈る、その一念の中に「大勝利」、「幸福」の「果」が既にあるのだと。

「南無妙法蓮華經」という「名」のみあって、実体がないと主張する教義は、あたかも「幽霊」のような存在だと断じます。身延派では、「名」は南無妙法蓮華經ですが、その「体」、実体は釈迦の仏像であったり、ヘビやキツネであったり、あるいは、鬼子母神、大黒天であったりします。身延派は、完全に本尊に迷っています。そして、身延派の特質や働きは、万人を不幸のどん底に突き落とし、必ず地獄に堕ちてしまうということです。この身延派の姿は、「**教学要綱**」を発刊した学会の近い将来の姿そのものです。2014 年の「創価学会会則 教義条項の改正」は、まさに、「脱 日興門流」宣言であり、大謗法です。

日蓮大聖人は、「曾谷殿御返事」で『涅槃經に云く「若し善比丘あって法を壊る者を見て置いて呵責し駈遣し挙処せずんば当に知るべし是の人は仏法中の怨なり若し能く駈遣し呵責し挙処せんは是れ我が弟子真の声聞なり」云々、此の文の中に見壊法者の「見」と置不呵責の「置」とを能く能く心腑に染む可きなり、法華經の敵を「見」ながら「置」いてせめずんば師檀ともに無間地獄は疑いなかるべし、南岳大師の云く「諸の悪人と俱に地獄に堕ちん」云云、謗法を責めずして成仏を願はば火の中に水を求め水の中に火を尋ぬるが如くなるべし、はかなしはかなし何に法華經を信じ給うとも謗法あらば地獄にをつべし、うるし千ばいに蟹の足一つ入れたらんが如し毒氣深入失本心故は是れなり』と仰せになっておられます。私は、今、再び戸田先生の大音声を思い出します。「**追撃の手をゆるめるな**」—と。

正論と拝します。



以上で、近刊の教学書、教学用語集等の文上解釈、日蓮仏法の根本義の有無の指摘を終えようとしていた時、今月号の大白蓮華が届き、一読、またまた、驚愕してしまいました。

最重要御書である「生死一大事血脈抄」が、これまた文上解釈だけ！池田先生の講義原本とは、全く違う作文です！こんな作文では、信心の歓喜、感動、確信が湧くわけがないのです！

大白蓮華 8月号 94

御本尊に向かつて唱題するとき、慈悲と智慧と勇気の「仏の生命」が涌現

す。
ここでは、この原理を展開された「生死一大事血脈抄」を共に拝読します。

「生死一大事血脈」とは成仏の「法」

本抄を頂いた最蓮房は、日蓮大聖人が佐渡に流罪されていたさなかに、縁あって、この逆境の地で

弟子となり、共に苦難を受けていくのです（注）。この最蓮房が質問した「生死一大事の血脈」（新1774・全1336）という重要な法門について、明快に論じられた御返事が本抄です。

「生死一大事」とは、生死を繰り返す私たちの生命にとって根本となる大事を指します。「血脈」とは、親から子へ血筋が流れるように、仏法の根幹が、仏から人々へ受け継がれ、伝えられていくことです。

したがって、「生死一大事血脈」とは、仏から一切衆生（あらゆる人々）に、いかなる人も必ず仏になれる万人成仏の大法が伝わることを意味します。

大聖人は冒頭で、「生死一大事の血脈」、すなわち生死の苦悩を解決する究極の法とは「南無妙法蓮華経」のことである、と結論さ

2025-8 大白蓮華

法のみ強調！
 大宇宙の仏界 = 宇宙の根源

南無妙法蓮華經の御本尊様は、日蓮大聖人の生命そのもの！

れます。そして、「妙法蓮華經」の五字こそ、虚空会（注3）という法華經の莊嚴なる説法の場合、釈尊から地涌の菩薩に託された万人成仏の法であり、永遠にわたる根本の法であることを述べられます。私たちが日々、唱えている南無妙法蓮華經は、まぎれもなく生命の究極の大事であり、宇宙の根源の法なのです。そして、私たちが拝する、この南無妙法蓮華經の御本尊は、日蓮大聖人の仏の大生命にはかならない。

私たちが御本尊に向かって唱題するとき、妙法の音声は大宇宙の仏界（注4）に届くとともに、自分の中に秘められていた仏界に届き、

「人の」所せい、「人法一箇」そと「き」のごまかし、

講義 P30

池田先生の「文底」からのご教示！

なぜ妙法蓮華經をもって「生死一大事血脈」の体とされるか。その理由の第一は、法華經の儀式において末法に流布すべき法体として説かれたのが妙法蓮華經である。そして、この付嘱を受けて末法に弘通する上行菩薩にとって、久遠本地の生命が妙法蓮華經であると仰せです。

したがって、この御文は「釈迦多宝の二仏宝塔の中にして上行菩薩に譲り給いて」が一往の教相の立場であり、「過去遠劫より已来寸時も離れざる血脈なり」が再往の観心の立場という、二重の構造になっているわけがあります。

上行菩薩は、一往文の上の辺では、法華經の虚空会で釈迦、多宝の二仏から妙法蓮華經を譲り受けるといふ儀式を踏みます。しかし、再往文底からみれば、上行菩薩の本地は久遠元初の自受用報身如来です。本来、妙法の大地に住し、人法体である、最も根本の仏なのであります。ゆえに「過去遠劫より已来寸時も離れざる血脈」なのです。

無作三身如来の内に脈打っているその生命こそ、妙法蓮華經——南無妙法蓮華經にはかならないのであります。

上記、大白蓮華に記述の、「日蓮大聖人の仏の大生命」とは、何という詭弁でしょうか！なぜ、「日蓮大聖人の大生命そのものです！」と記さないのでしょうか？

この大白蓮華の表現では、先に記した「宇宙の根源の法」が究極として別にあり、それが、大聖人の生命にもあると言っているのと同じです！

こんなごまかしは許せません！ 池田大作全集24巻の「生死一大事血脈抄講義」の、文底からの本義、ご指導を、きちんと学会員さんに伝えず、どうするのですか！皆を騙すな！

池田先生の本当の講義こそ、私たちの胸を打つ、大獅子吼なのです！

それを、大白蓮華のような文上の作文にしたら、南無妙法蓮華經の感応妙はなくなってしまうのです！

そして、池田先生の講義には、明確に「人法一箇」とあるではないですか、それを、何故に改竄して、大白蓮華で平然と作文するのですか！

入信70年の私は、こんな大白蓮華を毎月、読むのは耐えられません！

池田先生の本当のご教示に、今すぐに戻すべきです！

講義
P.170

先に生死一大事の血脈について、妙法蓮華經であるとその体を明かされ、また妙法蓮華經と唱えることであるとその実践を示されましたが、ここではその持続の中にこそ、血脈が連綿と受け継がれていくことを教えられているのであります。

いわゆる「血脈」には、唯授一人の別しての法体の血脈と、総じての信心の血脈とがあります。ここで仰せられているのは、総じての血脈であることは言うまでもありません。

この総じての血脈、すなわち久遠元初自受用報身如来たる日蓮大聖人の御一身に流れる生死一大事の血脈は、親から子へ血のつながるごとく、三世にわたって御本尊を持ち、題目を唱える私達の生命に受け継がれていくのであるとの御文であります。

これは一往、大聖人の教えを受けるようになってから日の浅い最蓮房に、また、ともすれば理に走りがちなその傾向も感じられて、信仰の持続こそ最も大切であることを教えられているのであります。

私達の立場においては、仏の生命と感応道交できる生命の開発、すなわち信心の中に血脈相承がある

☆

のであり、それには生涯、いな三世にわたる持続がなければならない。一生において、一つの信念を貫くことさえ容易ではない。しかるに三世にわたる信心を教えられているのは、簡単なことであるようにみえながら、これほど困難な、またこれほど大切なこともないと教えられていると拝したい。

大聖人の生命にある生死一大事の血脈を、私達はどうすれば相承できるか。大聖人御自身はすでにおられません。だが、大聖人は人法一箇の当体たる御本尊を残してくださいとさっております。ゆえに純一な信仰による唱題という実践によって、大御本尊の生命を我が生命に移すのです。というよりも、我が生命の中にある、大聖人の御生命、仏界の生命を涌现させる以外にないのです。

すなわち、大聖人の命を受けるとは、我が己心の大聖人を涌现させる以外の何ものでもない。例えば空の鳥が御本尊であり、その鳥に呼応して鳴く籠の中の鳥が、我が生命の仏界であります。その意味では、信心の血脈相承といっても、一切、我が生命にあるのであり、それを決定させるのは、したがって自らの信仰以外にないといえるのであります。

ここまで、近刊の教学本3冊、大白蓮華、聖教新聞、そして、5年前まで遡って、池田先生の指導選集、さらには教学用語集にある人法一箇の無視を10箇所以上、摘出、開示し、池田先生のお名前を利用した文上、改竄の作文を指摘、破邪顕正しました。結果、上述の通り、それらはあまりにも浅薄であり、池田先生のご教示された日蓮仏法の本義、真義とは全く乖離した作文でした。よって、結論、それは池田先生への背信行為以外の何ものでもありません。

これで、本拙文の冒頭で記しました以下の主旨と要望が正論であることが、証明されたと考えます。

一 日寛教学（日蓮仏法の文底解釈）を継承された、牧口・戸田・池田三代会長のご教示—発迹顕本、久遠元初自受用報身如来、人法一箇の御本尊—の根本義を、創立93年目に於いて、突如、理由なく削除した「教学要綱」と、不明瞭な文上だけの記述に終始する近刊の教学書は、即刻、絶版にすべきである！

そこで、これより以降、以下の点で論述致します。

1. 日蓮仏法の根本である日蓮本仏論、また、人法一箇の淵源を「法華經の智慧」の鼎談者である須田晴夫氏の著作「日興門流と創価学会」から辿り、日寛上人の六卷抄等、また、日寛教学を継承された日亨上人の遺文のご教示をご紹介します。

2. 同じく、日寛教学を継承された牧口、戸田、池田、三代会長の人法一箇のご指導を三代会長の全集、また、「法華經の智慧」からご紹介致します。

3. 「御義口伝講義」で池田先生が30箇所もご教示の人法一箇を無視、削除した宮田幸一氏と、氏が書いた「教学要綱」への破折。また、人法一箇について、親友のO氏、中村誠氏の新たな論考の紹介。

4. 「新人間革命」に記されたご相伝「御本尊七箇相承」の人法一箇の本義、と、上記「日興門流と創価学会」の論述より、結論として、「教学要綱」と、それを底意にした近刊教学本他の邪義を明白にします。

私は、日蓮仏法を破壊し純粋な学会員を愚弄、騙し続ける「教学要綱」が、今の世界の混乱の元凶であると思っています。何故なら、御書に一日蓮を用いぬるともあしくうやまはば国亡ぶべし—と御断言だからです。よって、私は、日蓮仏法を厳護するべく、さらなる破邪顕正を続けます！



1. 須田晴夫氏の著作「日興門流と創価学会」219頁には、次のように記されています。

—（日寛の六卷抄には）本門の本尊に**法本尊**と**人本尊**の二義があることを示し、さらに**人法体一**の義に論究する。—として、以下、**法本尊**についての記述があります。

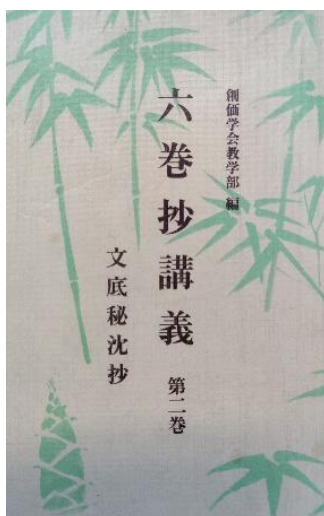
法本尊について日寛は「法の本尊とは、すなわちこれ事の一念三千、無作本有、南無妙法蓮華經の御本尊これなり」（同八一頁）として南無妙法蓮華經を図顯した文字曼荼羅であるとして規定する（「末法相應抄」では「一幅の大曼荼羅すなわち法本尊なり」〈同一七三頁〉とさらに端的な規定がある）。南無妙法蓮華經を中央に大書した文字曼荼羅を本尊とすることは、「五人所破抄」で「図する所の本尊は、また正像二千の間一閻浮提の内未曾有の大漫荼羅なり」（二六一四頁）と断じた日興の主張と合致している。日蓮が図顯した文字曼荼羅は、後の大石寺法主が書写した曼荼羅を含めて、南無妙法蓮華經という根源の法を示している故に法本尊と規定されるのである。

続いて、**人本尊**について、以下の記述があります。

人本尊については「人の本尊とは、すなわちこれ久遠元初の自受用報身の再誕、末法下種の主師親、本因妙の教主、大慈大悲の南無日蓮大聖人これなり」（『六卷抄』八六頁）と**日蓮を人本尊**と規定し、**日蓮本仏論**を明示している。他門流が日蓮を上行菩薩の再誕とのみ捉えているのに対し、日寛は上行の再誕というのは外用に過ぎず、内証によるならば自受用身の再誕であるとし、「故に知りぬ、本地は自受用身、垂迹は上行菩薩、顕本は日蓮なり」（同八七頁）と述べている。

ここで**日寛**が論拠として提示するのは「本因妙抄」の「釈尊久遠名字即の位の御身の修行を末法今時、日蓮が名字即の身に移せり」（八七七頁）の文であり、三位日順が著した「本因妙口決」の「久遠元初自受用報身とは本行菩薩道の本因妙の日蓮大聖人を久遠元初の自受用身と取り定め申すべきなり」（『富士宗学要集』第二巻八三頁）の文である。日蓮の本地を久遠元初自受用身とすることは富士門流上古以来の伝統教義であることが理解できよう。

P219



次の頁、日寛上人の六卷抄の一つ「**文底秘沈抄**」で、日寛上人は**宗祖**（日蓮大聖人）を久遠元初の自受用身であり、また、一念三千即自受用身であるとして、「**人法体一の明文赫々たり**」と記されています。（左に掲示の「六卷抄講義」18，19頁より引用）

今此れ等に准ずれば法は是れ諸仏の主師親なり那ぞ人法体一と云わんや、若し明文無くんば誰人か之を信ぜんや。

○答う所引の文・皆迹中化他の虚仏・色相莊嚴の身に約す故に勝劣あり、若し本地自行の真仏は久遠元初の自受用身、本是れ人法体一にして更に優劣有ること無し、今明文を出して以て実義を示さん。

法師品に云く「若しは経卷所住の処・此の中已に如来の全身有り」云云、天台釈して云く「此の経は是れ法身の舍利」等云云、宝塔品に云く「若し能く持つ有らば則仏身を持つ」云云、普賢觀經に云く「此の経を持つ者は則仏身を持つ」云云、文句第十に云く「法を持つは即仏身を持つ」云云。又涅槃經に如来行と云い今經に安樂行と云う、天台文の八^{六十}に之を会して云く「如来は是れ人・安樂は是れ法・如来は是れ安樂の人・安樂は是れ如来の法・総じて之を言わば其の義異ならず」云云、記の八の末に云く「如来涅槃・人法名殊なれども大理別ならず人即法の故に」云云、会疏十三^{二十}に云く「如来は即ち是れ人の醍醐、一実諦は是れ法の醍醐、醍醐の人・醍醐の法を説く、醍醐

の法・醍醐の人を成ず、人と法と一にして二無し」云云。略法華經に云く「六万九千三八四・一々文々は是れ真仏」云云、諸抄の中「文字は是れ仏」と云云、御義口伝に云く「自受用身即一念三千」伝教大師、秘密莊嚴論に云く「一念三千即自受用身」等云云、報恩抄に云く「自受用身即一念三千」本尊抄に云く「一念三千即自受用身」云云、宗祖示して云く「文は睫毛の如し」云云、斯の言良に由有る哉、人法体一の明文赫々たり、誰か之を信ぜざらんや。

そして、**日蓮大聖人**を「**人法体一**」のご当体と拝された日寛上人の教えを継承されたのが、日亨（にちこう）上人です。（ウィキペディアより引用）

日亨（にちこう、慶応3年2月14日（1867年3月19日） - 昭和32年（1957年）11月23日）は、大石寺第59世法主。

堀姓。道号は慈琳(じりん)。水鑑阿闍梨。僧侶、宗教学者。「にちこう」と読むので、発音から日興と間違えやすいため苗字をとって「堀上人」、「堀猊下」と呼ばれることも多い。また、伊豆の畠毛で隠居していたため、「畠毛の猊下」とも呼ばれる。

1929年（昭和4年）から富士宗学全集の編纂にあたり、原本の書写をはじめとして「日寛上人全伝」「南条時光全伝」などを著す。1937年（昭和12年）に「身延離山史」を刊行し、翌1933年（昭和8年）頃から宗学全集の校訂に取り組み5年後の1938年（昭和13年）には富士宗学全集134巻を完成させた。

終戦直後に、創価教育学会の初代会長・牧口常三郎の法要が戸田城聖らによって執り行われた際には、導師を務めた。また、戸田城聖氏が願主となっ

て創価学会が日蓮大聖人御書全集を発刊した際には同書の編纂を引き受けた。

* * * * *

池田先生は、日亨上人について下記ご指導されています。

一学会は、昭和二十七年（1952年）、戸田先生の発願（ほつがん）により、日亨上人の編纂を仰ぎ、総力をあげて『**御書全集**』の発刊を成し遂げた。まさしく、それは立宗七百年（昭和二十七年）を飾る未曾有みぞうの壮挙であった。当時、草創の同志は資金の調達にも、涙ぐましい誠意を尽くしてくださった。この大事業を、大聖人も必ずやお喜びであられたであろうと私は確信している。この『**御書全集**』発刊という大事業を終えられて、戸田先生は、しみじみと次のように述懐されていた。「二十年有余の出版業の経験が、この御書一冊を作るために、過去になされたのであったということを痛感したときに、ただただ自分の生きてきた道を不思議に思うのである」と。 57/106

妙法の世界にあつては、いかなる労苦も辛苦の経験も、やがて何百倍、何千倍もの大きな人生の果実をもたらしてくれる。信心には決して無駄はないし”あの時の苦勞は、このことのためだったのだ”と、心の底から実感し、納得できる時が必ずくることを確信されたい。ともあれ、この御書の発刊によって、学会はいかなる思想戦にも堂々と勝利しゆく因を築くことができた。一と。

(第八回本部幹部会 日亨上人 1988.8.19 スピーチ(池田大作全集第 71 卷)

*

昭和二年の秋、日亨上人はこう書かれた。「吾人の衷心の願求は其等本仏論者よりも本仏行者の出現である。平凡の行者は随時随所に溢れておるから、望ましくもない。非凡な画時代的の行者を歓迎する」「(＝もしも、そうした行者が出れば)速に猊座を下りて本仏行者の足下に拝して履はきものを採らん事を念願する。蓋し(＝現今の)本仏論の高潮は本仏行の前駆ではあるまいか」

これは「**日蓮本仏論**」を論じたある本に寄せられた序文である。この書は日亨上人が校閲をしておられる。——”本仏論”を論じるのもよい。しかし、私が待つのは”本仏行”であり、”本仏行者”である。その人の足元に礼拝したいほど、私は”日蓮大聖人の仏法の偉大な実践者”を渴仰している、と。

日亨上人の深いお心は、凡人のわれわれには、とうていわからない。しかし、重大なご指摘であると拝される。

”時代を画する大実践者いでよ！” ”今、その前兆はあらわれている”

日亨上人の至情の叫びは昭和二年秋。牧口先生、戸田先生の入信の前年であり、創価学会創立の三年前であつた。その後、日亨上人は戦時中の学会弾圧、戦後の大発展をご覧になって、こう書かれた。「宗祖開山の聖代に還れる信行両全(＝両方、完全に備わった)の現状を念へば広布の大願成就に近づくが如き念ひが涌く」「法滅の末法忽ちに変じて正法広布の浄界と成り広宣流布の大願成就近きに在り、悦ぶべし喜ぶべし」(富要九卷)ここにお示しのごとく、昭和二年に待望された”画時代的な本仏行”を、学会は真剣に実践してきたのである。(拍手)「広宣流布」を熱願された日亨上人の、慈悲と御境界の一端を拝する意味で、紹介させていただいた。一と。(第二十七回本部幹部会 日亨上人 1990.3.27)(池田大作全集第 74 卷)

そして、日亨上人は、その著「**日蓮正宗綱要**」で、日蓮大聖人の曼荼羅についての論述で「**人法一箇**」を、以下のように明確に記されています。

る。法の本尊というのは、誰の智慧ででも、やや考えがつく、真如とか真理とかの、一層精撰せられた、事の一念三千の不思議の境界で、これが妙法の曼荼羅である。その姿を文字にあらわしてある。真中に「南無妙法蓮華經 日蓮」と書いて、これが曼荼羅の中心となる。その左右周囲に、十界の代表者の仏菩薩から、世界を守る神、妙法を伝えてきた人人までも並べてあるのは、中心となる仏の靈格を示したもので、中心の光明に照らされて、みなみな仏になるべきことを示したものである。

宗旨三秘
宗教五綱
本迹二門
折伏正規
誘法嚴誡
受持正行
下種正益

次に人の本尊というのは、法報の三身が、たがいに融通する上での自受用報身如来である。久遠の智徳を表面として、内面では、法身仏とも、応身仏とも交渉するのである。それが末法には、人格

者としての日蓮大聖人と信じ奉って、木像にも絵像にも作りて、なお生きておわするところとく敬まい奉るのである。

この自受用身の人格に、妙事の三千の法がそなわっているところが、

人即法の本尊であり、三千の法の自受用身そなわっているところが法即人の本尊である。この互具一体のところを、人法一箇とも一体ともいって、われらの帰依し奉るべき仏さまと仰ぐのである。

あるいは、密かに考うれば、御曼荼羅の中心の南無妙法蓮華經は法で、日蓮判は人であるから、これが人法一体である。こういえば一重の一体ですむのに、曼荼羅の前に御影をおくときは、二重の一体となる勘定であるけれども、人法を即離するのは、理の当然で、また、これには一般の仏像を安置せし余情を引くことにもなり、常識の上から追慕の意にもなる。人間名字の本宗では、それがよいのではなからうか。しかし、人情を超越した理智の非常に進んだ非人間には、この信仰の必要はないということにもなるかと思うのである。

2. 同じく、**日寛教学**を継承された牧口、戸田、池田、三代会長の**人法一箇**のご指導をご紹介します。

牧口常三郎先生は、日寛上人、日亨上人の御教示を継承され、牧口常三郎全集8巻で、以下のように記されています。

御本尊の中央に「**南無妙法蓮華經 日蓮**」とおしたためになっているのは、御本尊が御本仏・日蓮大聖人の御生命と南無妙法蓮華經が一体であるという、**人法一箇**の極理の当体であることをあらわしている。(125頁)

竜の口の法難の時、大聖人は**久遠元初の自受用報身如来**としての本地をあらわされた。**(発迹顕本)**。(127頁)

上行菩薩は、法華經從地涌出品第十五に「大地の底の虚空界に住んでいた地涌の菩薩が釈尊の呼びかけに応じて涌出し、虚空の中であって、釈尊から『法華經』を末法にひろめるべきを託された」と説かれる地涌の四菩薩の上首。

さらに、法華經神力品第二十一で釈尊は滅後末法弘通のため法華經の肝要である四句要法(南無妙法蓮華經)を上行等の四菩薩に付嘱する。この結要付嘱の儀式を受けて、末法に南無妙法蓮華經を立て弘通されたのが**上行菩薩の再誕である日蓮大聖人である**。しかし、これは外用浅近の姿であり、内証深秘の辺は、**久遠元初・自受用報身如来の再誕となる**。

日寛上人は「**文底秘沈抄**」に「**若し外用の浅近に望めば上行の再誕日蓮なり** 若し、内証の深秘に望まば、**本地自受用の再誕日蓮なり**」と述べられている。(136頁)

また、牧口常三郎全集10巻、訊問調書 p. 197 にも以下、記されています。

「真中に『**南無妙法蓮華經日蓮**』と書いて之が中心となり(略)此の自受用身の人格に妙事の三千の法が具つて居る処が**法即人の本尊**であり此の互具一体の処を**人法一個(箇)**とも一体とも申して私達の帰依する仏様であります」

そして、戸田先生は「信心は大聖人の時代に還れ、**教学は日寛上人の時代に還れ**」と叫ばれ、池田先生も日寛教学を継承、「**人法一箇**」をご教示されました。戸田・池田両先生の、結論の論述が以下です。

人法一箇の御本尊 如来寿量品「法華經の智慧」(池田大作全集第 29-31 卷)
釈尊の師は南無妙法蓮華經如来

池田 法と人(仏)は本来、不可分なのです。「如来」というのも「如(真如・真実の世界)からやって来たもの」ということです。すなわち「如来」とは、真実の「法」が現実の上に表れたのです。宇宙生命に”人”の側面と”法”の側面があり、それが一体なのです。(中略)釈尊が悟った「永遠の法」即「**永遠の仏**」は、あらゆる仏が悟った「永遠の大生命」であった。過去・現在・未来のあらゆる仏は、ことごとく釈尊と同じく「久遠元初の仏」を師として悟ったのです。それが**久遠元初の自受用身であり南無妙法蓮華經如来**です。

戸田先生は言われた。「日蓮大聖人の生命というもの、われわれの生命というものは、無始無終ということなのです。これを久遠元初といいます。始めもなければ、終わりもないのです。大宇宙それ自体が、大生命体なのです」と。無始無終で慈悲の活動を続けるその大生命体を「師」として「人間・釈尊」は人間のまま仏となったのです。そして、悟ったとたん、三世十方の諸仏は皆、この**人法一箇の「永遠の仏」**を師として仏になったのだとわかったのです。

寿量品は小乗と大乘を統合

遠藤 実際、一般の仏教学でも、寿量品の釈尊は、ほとんど神格化して扱われています。

池田 だからこそ、大聖人は御本尊を顕されたのです。これ以上の現実はない。具体はないのです。大聖人は、私たち末法の凡夫が、御本尊に妙法を唱えることで、「常住此説法の仏」と一体になれるようにしてくださったのです。

人法一箇の御本尊です。”人”の側面は、久遠元初の自受用報身如来。”法”の側面は、事の一念三千です。

だから、**戸田先生**は、久遠元初の仏のことを「一念三千様」とも言われていた。御本尊を受持し、広宣流布に戦うことによって、私どもの生命に「常住此説法の永遠の仏」が涌現してくるのです。戸田先生は寿量品の「是れより来、我常に此の娑婆世界に在って説法教化す」(法華經四七九ページ)の經文について、「**大宇宙即御本尊**ということであり、南無妙法蓮華經の生命は、久遠以来、大宇宙とともにあるということです」と言われていた。

3. 池田先生は「御義口伝講義」で人法一箇を 30 か所にもわたり、ご教示されています。それを引用します。その後、宮田幸一氏が「御義口伝講義」の人法一箇を無視、削除していることへの破折をします。

「御義口伝講義」(上)

御義口伝の内容は法華經の文や天台、妙楽の解釈の文を引きながらも、必ず日蓮大聖人の觀心の上から一々の文々句々を種脱相對、久遠元初、三大秘法、人法一箇の大御本尊等々の仏教哲学の極致をお述べになっている。(8p)

本尊は人法に分かれるとはいえ、実は人法一体であらせられ、釈迦仏法のように人法の勝劣がないのである。ゆえに 寿量品(七五二p)「無作の三身の宝号を南無妙法蓮華經」同・寿量品(七六〇p)「本尊とは法華經の行者の一身の当体なり」同・寿量品(七五九p)「自受用身とは一念三千なり、伝教云く『一念三千即自受用身・自受用身とは尊形を出でたる仏と・出尊形仏とは無作の三身と云う事なり』云々」(17p)

南無妙法蓮華經 御義口伝に云く南無とは梵語なり此には帰命と云う、人法之れ有り人とは釈尊に帰命し奉るなり 法とは法華經に帰命し奉るなり 又帰と云うは遮門不變真如の理に帰するなり 命とは本門隨緣真如の智に命くなり 帰命とは南無妙法蓮華經なり 釈に云く 隨緣不變・一念寂照と、又帰とは我等が色法なり命とは我等が心法なり色心不二なるを一極とは云うなり(49p)

(語訳) 釈尊とは、通途の仏法では、釈迦牟尼仏を指す。しかし、実には、六種類の釈尊があることを知らなければならない。すなわち、一に藏教の釈尊。二に通教の釈尊。三に別教の釈尊。四に法華經述門の釈尊。五に法華經本門の釈尊。六に法華經本門文底の釈尊である。この場合の釈尊は、当然、第六の文底の釈尊、すなわち久遠元初の自受用報身如来であられる日蓮大聖人の御事である。(50p)

(語訳) 法華經とは正像末に三種の法華經がある。正法においては釈尊の二十八品。像法においては天台の摩訶止觀。末法においては、三大秘法の五字七字の南無妙法蓮華經である。この場合の法華經は当然、末法の「法本尊」たる三大秘法の南無妙法蓮華經のことである。(50p)

帰命する対境、対象に「人」と「法」とがある。「人」とは文底の釈尊即人本尊たる日蓮大聖人である。「法」とは末法の法華經であり、法本尊であるところの南無妙法蓮華經である。すなわち、人法一箇の大御本尊に帰命することが、真実の中の真実の帰命なのである。(52p)

方便品に「仏は自ら大乘に住したまえり」とあるのは、このことをいっている。**仏とは日蓮大聖人であり人**である。**大乘とは南無妙法蓮華經であり法**である。ゆえに**人法一箇**なのであり、人法ともに護念されるのである。また、別の角度からいえば、仏が衆生を護念するということは、護とは譬喩品の「唯我れ一人のみ、能く救護を為す」とあるごとく、**日蓮大聖人**が一切衆生を救護されることが護念の護である。また念とは寿量品に「毎に自ら是の念を作さく、何を以ってか衆生をして、無上道に入り、速かに仏身を成就することを得せしめん」とあるように、**大聖人**が一切衆生を救おうという大慈大悲の一念が護念の念なのである。(126p)

釈迦仏法においても、じつはことごとく文底秘沈の南無妙法蓮華經を悟って成仏するのである。文底の限を開いてみれば、寿量品の文底に南無妙法蓮華經を秘沈されたことが、釈尊の所願満足となるのである。また、末法において、御本仏日蓮大聖人が寿量文底秘沈の南無妙法蓮華經をとりいだして、**人法一箇**、事の一念三千の大御本尊とおあらしになったことは、日蓮大聖人の立ち場に約して、所願満足となるのである。(287p)

仏といっても、それは妙法の力用、働きである。ゆえに、釈迦、多宝も用の仏にすぎないし、また、遮仏にすぎないと諸法実相抄(一三五八p)に示されている通りである。妙法とは無作三身である。ゆえに御義下(七五二p)には「無作三身の宝号を南無妙法蓮華經と云うなり」と仰せられているのである。無作三身とは別して日蓮大聖人なのである。**妙法は法であり、日蓮大聖人は人であり、人法一箇**なのである。ゆえに、もったいなくも、大御本尊の中央には、「**南無妙法蓮華經 日蓮**」としたためられている。その左右には釈迦多宝、あるいは上行等の四菩薩、さらには、声聞、縁覚、ずっと地獄界の衆生までいることがわかる。これは、**釈迦多宝といえども、大聖人の己心の釈迦多宝であり、大聖人の生命の働きである**ことを示すものである。(297p)

今、日蓮大聖人およびその門下として、南無妙法蓮華經と唱え奉る者は、ことごとく舍利弗であり、舍利弗が仏に向かい奉ったごとく、大御本尊に向かい奉っている姿である。舍利弗は即釈迦如来であり、**釈迦如来は即法華經である。法華經は即われらの色心の二法(生命)**である。文底に約すれば、**舍利弗とは末法のわれわれであり、われわれと日蓮大聖人は師弟不二**である。**日蓮大聖人と大御本尊は人法一箇**である。大御本尊を信ずることによって、われわれの色心の二法、われわれの生命が、したがって、即仏の命とあらわれるということである。(334p)

人法一箇の大御本尊を信ずることによって、大聖人とわれわれは、師弟不二となり、わが身も妙法の当体とあらわれるのである。(340p)

神力品(五八四p)に「日月の光明の、能く諸の幽冥を除くが如く、斯の人世間に行じて、能く衆生の闇を滅し」とある。真実の光明は南無妙法蓮華經である。「**斯の人**」とは、**久遠元初の自受用報身如来、即日蓮大聖人**であられる。法に約して妙法、人に約して大聖人。**人法一箇の大御本尊**のみが、一切衆生に根本的幸福を与えける光明なのである。(501p)

いま、南無妙法蓮華經と唱え奉る日蓮大聖人およびその門下は、法師の中の大法師、つまり、指導者の中の大指導者である。また、あらゆる現象は妙法蓮華經の当体であるという諸法実相の理が顕われてみれば、地獄の燈燃猛火から仏界にいたるまで、ことごとく、一念三千の法師ということができるのである。また、法師の「**法**」とは**南無妙法蓮華經**、「**師**」とは**日蓮大聖人**のことであり**人法一箇**を表わしているのである。(584p)

(続いて) **人法一箇**の文であられる。**釈迦仏法は、人法勝劣**一法が勝り、人が劣る。**日蓮大聖人の仏法は人法一箇**である。すなわち、**法は南無妙法蓮華經であり、人は日蓮大聖人**となる。(585p)

「是師」とは日蓮大聖人のことである。「学」とは南無妙法蓮華經を学ぶのである。「随順」するとは「信受」ということである。つまり、日蓮大聖人を師匠と仰ぎ、その御金言を信受し、**人法一箇の御本尊**に向かって南無妙法蓮華經と唱えるということである。(627p)

法師品の法師とは、文底より拝せば日蓮大聖人の御事であり、見宝塔品の宝塔とは南無妙法蓮華經の御本尊のことである。ともに、**人法一箇の御本尊**を顕わされているのである。(635p)

勸持品に「時に諸の菩薩 仏意に敬順し・・・」とあるところについて、仏の意とは南無妙法蓮華經である。今、日蓮大聖人および門下が、南無妙法蓮華經と唱えることは、仏意に敬順していることを意味する。仏意の仏とは、日蓮大聖人、意とは南無妙法蓮華經であり、仏意で**人法一箇の大御本尊**をあらわす。經王殿御返事 に「日蓮がたましひをすみにそめながして・かきて候ぞ信じさせ給へ、仏の御意は法華經なり日蓮が・たましひは南無妙法蓮華經に・すぎたるはなし」と。(781p)

「説法とは法華別しては南無妙法蓮華經なり」とは、種脱相對をあらわしている。すなわち、説法とは法華經であるが、別しては法華經寿命量品文底の南無妙法蓮華經をさすのであるとの意味なのである。次に「師とは・・・」以下の文は、師弟不二を示されたものである。「師とは師匠」とは 日蓮大聖人である。「授くる所の妙法」とは、大御本尊のことである。**人法一箇**を示す。(784p) 64/106

「御義口伝講義」（下）＊ここから如来寿量品第十六の、最重要部になります。

南無妙法蓮華經如来寿量品 南無妙法蓮華經如来、すなわち文底の仏の寿量品である。釈尊の文上の寿量品と区別して、大聖人の立ち場、すなわち文底より読むがゆえである。文底の仏とは日蓮大聖人であらせられる。日蓮大聖人が「予が読むところの寿量品」と仰せられる、内証の寿量品である。**南無妙法蓮華經如来は人、寿量品は法で、人法一箇**をあらわす。これは文中「されば無作の三身とは末法の法華經の行者なり無作の三身の宝号を南無妙法蓮華經と云うなり」とあることによっても、明白である。（１６p）

無作の三身とは、末法の法華經の行者、すなわち末法に全民衆救済のために出現された御本仏日蓮大聖人の御事である。この無作の三身、即日蓮大聖人の宝号を南無妙法蓮華經というのである。これ**人法一箇の本尊**であり、寿量品の事の三大事、すなわち内証の寿量品に顕わされた事の一念三千の当体たる本門の本尊、本門の題目、本門の戒壇の三大秘法とはこのことなのである。南無妙法蓮華經如来寿量品第十六の立ち場から如来を六即に配立するならば、この品の如来は、決して色相莊嚴の仏をいうのではなく、理即の凡夫をいうのである。われわれ凡夫の身を離れて如来はないのである。（２３p）

「南無妙法蓮華經如来寿量品」とは、南無妙法蓮華經如来即末法の御本仏日蓮大聖人の寿量品ということである。これ、文上の寿量品にあらずして、**文底の仏**の寿量品、すなわち内証の寿量品であり、その所詮の実体は、一大秘法の南無妙法蓮華經なのである。能説の仏も南無妙法蓮華經如来であり、所説の法体も南無妙法蓮華經である。**人に即して法、法に即して人**、すなわち**人法一箇**であることは明白である。この 転配が要約されているといっても過言ではない。（２４，２５p）

「我実成仏已来無量無辺」の文を、大聖人の仏法の立ち場から読めば「我実と成けたる仏にして已も来も無量なり無辺なり」となるのである。すなわち、凡夫の当体本有のままで無作三身の仏であると覚知し、それが無始無終、永遠に続いていくと読むのである。またこの文には百界千如、一念三千を説かれている。「無量無辺百千万億那由佑劫なり」の百千の二字は、百は百界を意味し、千は千如を意味し、これは事の一念三千、即大御本尊を意味するのである。無作三身の仏は人、事の一念三千が法で、**人法一箇**をあらわすのである。このように寿量品の奥底は、まさしく日蓮大聖人の仏法に帰着していくのである。されば日蓮大聖人こそ寿量品の本主、すなわち寿量**文底の仏**なのである。また総じて南無妙法蓮華經と唱える大聖人の門下もまた寿量品の本主とあらわすのである。（６５p）

是好良薬とは、本門の本尊であるが、また**人法一箇の御本尊**であることもあらわすのである。是好良薬とは、色香美味皆悉具足の良薬である。（中略）無作三身とは、**末法の法華經の行者であり、人の本尊たる日蓮大聖人**であらせられる。したがって末法の是好良薬、**法本尊たる南無妙法蓮華經は、まったく日蓮大聖人**であり、また日蓮大聖人の宝号を南無妙法蓮華經と申し上げるのである。このゆえに、この是好良薬の文は、まったく**人法一箇の大御本尊**をあらわすのであると**日寛上人は説かれている**わけである。（153p）

大御本尊こそ、十方三世の諸仏の能生の根源にして、久遠元初の三徳の法体であることを明かされているのである。ゆえに、人法共に、三徳具備の当体であることは明瞭である。すなわち、**日蓮大聖人こそ人の本尊**であらせられ、**御図顕の大御本尊こそ法の本尊**であらせられる。しかして、**人法一箇**であり、**法に即して人、人に即して法**であり、末法のわれら衆生の一同に尊崇すべき三徳具備の当体なのである。（211p）

自受用身とは久遠元初の自受用身であり、日蓮大聖人の御内証であり、即**人本尊**を示されている。また一念三千とは、開目抄に一念三千**文底秘沈**とあるごとく、**文底下種事行の一念三千の南無妙法蓮華經、即 法本尊**である。しかして「**自受用身とは一念三千なり**」とは、**人法一箇**を示され、日蓮大聖人の御生命は、まったくこれ一念三千の大御本尊であり、一念三千の大御本尊は、まったくこれ日蓮大聖人の御生命である。釈尊は**法勝人劣**であり、日蓮大聖人の場合は、**人法一箇**である。本尊とは勝れたるを用うべきであり、したがって**釈尊を本尊としてはならない**。末法のわれら衆生の信奉すべき御本尊は、日蓮大聖人である。（238p）

伝教大師の「秘密莊嚴論」の文は、きわめて有名であり、かつ重要である。すなわち、**人法一箇**の証文だからである。「一念三千即自受用身」とは、**法即人**を示すものであり、先の「自受用身とは一念三千なり」の御文は**人即法**であり、合わせて**法即人、人即法**を示すのである。一念三千、すなわち、文底下種事行の**一念三千の大御本尊は、まったく日蓮大聖人の当体**であるとの元意である。（239p）

「本尊とは法華經の行者の一身の当体なり」の御文は非常に重要である。**大聖人の一身の当体が即御本尊**なのである。大聖人が末法の**人本尊**であるとの嚴然たる証文でなくして何であろう。これほどまでに、日蓮大聖人は、末法の衆生の信仰すべき御本尊を説き明かされているのに、身延派日蓮宗等では、いまなお釈尊を本尊としている。まさに仏の金言を踏みにじる姿であり、不知恩の畜生というべきである。（258p）

色心の二法、妙法蓮華經の体 色心の二法とは、日蓮大聖人の御生命であり、**人本尊**をあらわす。妙法蓮華經の体とは南無妙法蓮華經の当体たる御本尊であり、**法本尊**である。（321p）

「所詮浄明鏡とは色心の二法、妙法蓮華經の体なり浄明鏡とは信心なり」と結論されているように、浄明鏡とは、根本は「色心の二法」すなわち御本仏日蓮大聖人の御生命であり「妙法蓮華經の体」すなわち南無妙法蓮華經の御本尊である。究極するところは、この**人法体一の御本尊**である。これを人と法に開いた場合、**法本尊すなわち南無妙法蓮華經**は万法の極理であり、無量義經說法品第二(八四p)に「一無量義とは一法より生ず」とあるごとく、一切法の能生の根源である。(323p)

大聖人は、総じて仏および法華經を慧日に譬えることを述べられているのであるが、別しては、インド応誕の釈尊および法華經二十八品は月であり、末法の大白法たる三大秘法の南無妙法蓮華經、そして日蓮大聖人こそ、真実の慧日であることを知らなければならぬ。「慧日とは末法当今・日蓮所弘の南無妙法蓮華經なり」は法であり「末法の導師を如日月光明等と説かれたり」は人である。**人法一箇**を明示されているのである。この人と法について一言するならば、開いて論ずれば事の**一念三千の大御本尊は人即法**であり、**日蓮大聖人は法即人**であられる。合して論ずれば、三大秘法の御本尊それ自体、**人法一箇の御当体**なのである。すなわち、御本尊の中央におしたための、**南無妙法蓮華經とは法**であり、その下の**日蓮とは人**である。ゆえに、**御本尊は、生身の日蓮大聖人御自身**であられる。(766p)

法師とは妙法の法師であるから、十界の衆生は、皆、妙法を受持し、妙法の一句一偈を説く法師である。蓮華の法師であるから、十界三千の一切衆生は清浄の法師である。すなわち、森羅三千の諸法はことごとく妙法を証明し、妙法を教える法師なのである。また、**人法**に分かってみると、十界の衆生の色法、すなわち肉体は、妙法を持つ“人”である。その心性すなわち心は、所持の”法“すなわち妙法である。したがって、色心共に妙法を弘める法師であり、自行化他をあらわすのである。色心不二、**人法一箇の南無妙法蓮華經**の法師なるがゆえに、かくのごとく**色心共に法師**であり、自行化他をあらわすのである。(966p)

寿量品第十六において、仏は久遠より三身常住の仏であることが明かされる。これは、あくまで文上の教相であり、**文底**より拝するならば、その本地たる無作の三身を説きあらわしているのである。御義口伝上(七五二p)に「されば無作の三身とは末法の法華經の行者なり無作の三身の宝号を南無妙法蓮華經と云うなり」とある。すなわち、別しては末法御本仏日蓮大聖人のお振舞い、また**人法一箇の御当体である三大秘法の御本尊**のお姿を説きあらわすのである。(1005p)

本地無作の三身とは、久遠元初の仏であり、その宝号を南無妙法蓮華經という。これすなわち、**人法一箇の日蓮大聖人**であられる。(1009p)

昭和40年発刊の「御義口伝講義」(上)(4-5頁)で、池田先生は「この講義は文底からの講義である」との以下、ご宣言があります。

一三大秘法を知らずして法華經の文に執着するのは、天の月を知らずして、ただ池の月を見て、その池の月を取ろうとして、水に溺れるようなものである。このような関係は、御義口伝においてもっとも明らかなである。御義口伝を拝読することは日蓮大聖人の仏法の真髄を拝することになるとともに、また釈尊の一代仏教を知ることにもなるのである。

次に、「御義口伝講義」(以下「**原本**」と略)と『御義口伝』**要文講義**」(以下「**要文**」と略)、の「序文」「方便品」「寿量品」から、最重要と拝する5つの御文を引用(本文の解釈だけではなく、関連文を含む)、「**人法一箇**」が、完全に削除の実態を明らかにします。結論、「要文」は、「教学要綱」と同じく、「人法一箇」を否定、「釈迦本仏論」になっているのです！



昭和40年発刊の(原本)



(要文)

これより、以下、5か所についての比較です。

「御義口伝講義」(上巻)

① 南無妙法蓮華經(「要文」12頁)

御義口伝に云わく、「南無」とは梵語なり。ここには「帰命」と云う。人法これ有り。人とは釈尊に帰命し奉るなり。法とは法華經に帰命し奉るなり。また云わく、「帰」と云うは迹門不變真如の理に帰するなり。「命」とは本門隨緣真如の智に命づくなり。「帰命」とは南無妙法蓮華經これなり。(新984、全708)

「**原本**」52頁には一南無妙法蓮華經について、日蓮大聖人の御義口伝には、次のように仰せである。「南無」とは梵語であって、これを漢語に訳せば「帰命」という。その帰命する対境、対象に「人」と「法」とがある。「人」とは、文底の釈尊即人本尊たる日蓮大聖人である。「法」とは末法の法華經であり、法本尊であるところの南無妙法蓮華經である。すなわち、人法一箇の大御本尊に帰命することが、真実の中の真実の帰命なのである。

＊

「**要文**」14, 15頁では一不変の真理を探究し、その世界に参入していく方向が「帰命」であり、その真理の大地を踏みしめた上で、今度は現実の世界に立ち戻り、隨縁の智慧に「命(もと)づき」活動していくのです。それが、南無妙法蓮華經への帰命です。

② 方便品の一節（「**要文**」79頁）

「我」とは釈尊、「我実成仏久遠（我実に成仏してより久遠なり）」の仏なり。この本門の釈尊は、我ら衆生のことなり、「如我」の「我」は、十如是の末の七如是なり。九界の衆生は、始めの三如是なり。我ら衆生は親なり、仏は子なり。父子一体にして、本末究竟等なり。この我らを寿量品に無作の三身と説きたるなり。今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華經と唱うる者これなり。（新1003、全720）

「**原本**」297頁には一無作三身とは、別して日蓮大聖人なのである。妙法は法であり、日蓮大聖人は人であり、人法一箇なのである。ゆえに、もったいなくも、大御本尊の中央には、「南無妙法蓮華經 日蓮」としたためられている。その左右に釈迦多宝、あるいは上行等の四菩薩、さらには、声聞、縁覚、ずっと地獄の衆生までいることがわかる。これは、釈迦多宝といえども、大聖人の己心の釈迦多宝であり、大聖人の生命の働きであることを示すものである。したがって、釈迦多宝の二仏も、大聖人の御生命から出発するのであり、大聖人が親であり、釈迦多宝はそこから誕生する子なのである。さらにいえば、十方三世の一切の諸仏もまた子であり、大聖人は親であられる。

＊

「**要文**」81頁では一この經文について、大聖人はまず、方便品で説かれている「**我**」とは、本門の久遠実成の釈尊であることを示されています。（中略）十如是の前の三つと後ろの七つを、それぞれ九界の衆生と仏に分け、本と末が究竟して等しい、即ち衆生と仏が等しいとされています。衆生が親、仏が子に当たり、父子一体になるとの甚深の法門を示されているのです。（中略）82頁では一そこには、教え導く側も、教わり導かれる側も、「皆が等しく仏」という法華經の智慧の根本が示されています。

③ 法師品十六箇の大事 第一法師の事（「要文」133頁）

御義口伝に云わく(中略)今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華經と唱え奉る者は、法師の中の大法師なり、(新1026、全736)

「**原本**」584 頁には一いま、南無妙法蓮華經と唱える日蓮大聖人およびその門下は、法師の中の大法師、つまり、指導者の中の大指導者である。(中略)また、法師の「法」とは南無妙法蓮華經、「師」とは日蓮大聖人のことであり、人法一箇を表わしているのである。585 頁には、人法一箇の文であられる。釈迦仏法は、人法勝劣一法が勝り、人が劣る。日蓮大聖人の仏法は、人法一箇である。

＊

「要文」133 では一まず、「法師」について、妙法の題目を唱え抜いている大聖人とその一門こそが「法師の中の大法師」であると仰せです。(中略)134頁では一法華經では、「法師」に出家、在家、男女の差別など全くありません。まさに真の菩薩の姿を象徴しています。(中略)今日、この御文の通りに、法華經の真髓である題目を唱えに唱え、智慧と慈悲と勇気を湧き出だしながら社会に貢献する創価学会員こそ、直系の「大法師」でありましょう。

「御義口伝講義」(下巻)

④ 寿量品の一節 寿量品二十七箇の大事

第一「南無妙法蓮華經如来寿量品第十六」の事（「要文」212頁）

「如来」とは釈尊、総じては十方三世の諸仏なり、別しては本地無作の三身なり。今、日蓮等の類いの意は、総じては「如来」とは一切衆生なり、別しては日蓮の弟子檀那なり。されば、無作の三身とは、末法の法華經の行者なり。無作の三身の宝号を、「南無妙法蓮華經」と云うなり。(新版1048、全集752)

「**原本**」16頁には一 南無妙法蓮華經如来、すなわち文底の仏の寿量品である。釈尊の文上の寿量品と区別して、大聖人の立場、すなわち文底より読むがゆえである。文底の仏とは日蓮大聖人であらせられる。日蓮大聖人が「予が読むところの寿量品」と仰せられる、内証の寿量品である。 南無妙法蓮華經如来は人、寿量品は法で、

人法一箇をあらわす。

＊

「要文」213頁では一如来とは、三世十方の仏たちに共通の名であり、本地の三仏（注6「本地」とは、本来の境地のこと。ここでは、久遠実成の釈尊が本地の仏であり、しかも、その一身に法身・報身・応身の三身を具えていることを、「本地の三仏」という。）の別名とされています。それを受けて大聖人は、如来とは、総じては一切衆生、別しては大聖人の弟子檀那であると述べられています。

⑤ 寿量品の一節 第十六「我亦為世父」の事（「要文」258頁）

御義口伝に云わく、「我」とは釈尊、一切衆生の父なり。主・師・親において、仏に約し、經に約す。仏に約すとは、迹門の仏の三徳は、「今此三界」の文これなり。本門の仏の主・師・親の三徳は、主の徳は「我此土安穩」の文なり。師の徳は、「常說法教化」の文なり。親の徳とは、この「我亦為世父」の文これなり。（新1056、全757）

「**原本**」210頁には一日蓮大聖人こそ人の本尊であらせられ、御図頭の大御本尊こそ法の本尊であらせられる。しかして、人法一箇であり、法に則して人、人に即して法であり、末法のわれら衆生の一同に尊崇すべき三徳具備の当体なのである。

（中略）されば、我亦為世父の文は日蓮大聖人の御事であり、一切衆生を、ことごとく我が子と御覧になり、救わんとされる、その慈悲の大なるを痛感しないわけにはゆかぬ。日蓮大聖人は、さらに「今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は一切衆生の父なり無間地獄の苦を救う故なり」と仰せられ、別して、日蓮大聖人こそ一切衆生の父であり、総じて、われわれもまた、一切衆生の父と仰せ下さっている。

＊

「要文」259頁では一この御文では、久遠の仏「自身」の姿が主師親の三徳として説かれ、それを末法において実践されているのが、御本仏・日蓮大聖人にほかならないことがしめされていきます。經文の「我亦為世父」は、「良医病子の譬え」の箇所、良医である父と同じく、釈尊もまた、現実の三界の「一切衆生の父」であり、良医が、とりわけ本心を失った迷いの子どもたちを救ったように、「顛倒」（法華經493頁）の人々をも全力で救済している、とあります。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

上記の通り、「**人法一箇**」は、完全削除！です。

以上、「御義口伝講義」での、30か所にわたる池田先生の**人法一箇**のご教示です。それを宮田幸一氏は無視、そして、宮田氏が書いた「**教学要綱**」もそれを踏襲しています。その邪義につき、親友中村誠氏の著作「『**教学要綱**』と**牧口・戸田・池田三代会長の書物 50 冊との比較検証**」の論述から下記を引用致します。

— 宮田教授の「日有の教学思想の諸問題」という論文に次のような主張がみられる。

<http://hw001.spaaqs.ne.jp/miya33x/paper4-1.html> 『1-1 曼陀羅本尊論より、「この段階(日興～日道)では大石寺派に人本尊の思想や、ましてや**人法一箇論**の本尊思想は見られない。』』

彼は、人本尊とは日蓮御影像、即ち大石寺の神話であるとする事で**人本尊**を否定し、南無妙法蓮華經と日蓮を切り離そうと企んでいることは明白である。なぜこの二つを切り離す必要があるかという、**南無妙法蓮華經即大聖人**であるならば、この大聖人を師匠とすることで釈尊は成仏できたということになってしまい、これまで通りの、日蓮勝・釈尊劣の世界観になってしまうからである。

池田先生が死去された時、彼は facebook で次のような投稿(次ページに掲載。現在は削除済み)をした。この教授の特徴としては、本当に口の軽い方だと思う。この方のおかげで、全てがバレバレになっているのだ。

なぜ池田先生や戸田先生の教えに叛いて、御義口伝、本因妙抄、百六箇抄を用いなかったのか？学術的な価値を高めるためなどでは決してない。「邪宗身延派日蓮宗等が、**自らの宗派の非をかくすため、三大秘法抄を偽書扱いにしたり、あるいは、御義口伝、本因妙抄、百六箇抄を偽書扱いにしたり**」(御義口伝講義上. p. 800)池田先生は誠に鋭い。

仮に百六箇抄を用いると、「**下種の法華經教主の本迹 自受用身は本・上行日蓮は迹なり、我等が内証の寿量品とは脱益寿量の文底の本因妙の事なり、其の教主は某なり**」百六箇抄とあり、観心本尊抄の「寿量の仏」＝日蓮大聖人になってしまうからである。又、御義口伝にも「南無妙法蓮華經如来寿量品第十六」とあり、同様の解釈になってしまうし、この御書には日蓮勝・釈尊劣の世界観がちゃんと説かれており、マイナーな日蓮中心の世界観では、世界へ流布、特にインドやタイのような国へ布教する宗教ビジネスの邪魔でしかないからである。



Koichi Miyata

たまたま5年前の投稿が「過去の思い出」で出てきた。その時に心配していた池田先生の逝去ということが現実には生じてしまった。来年からは「世界青年学会

開幕の年」ということで、世界中で青年部による広宣流布の活動が展開されると思われる。多分その中で最も多くの成果を上げるのは、インドであろうと推測されている。人口動向や経済変動等の予測から見ても、少子高齢化の日本の創価学会がリーダーシップを取れる時代は終わったと思われる。そのための準備に『創価学会教学要綱』が出版されたが、これはあくまでも従来の日蓮正宗の影響下にあった教学を徹底的に検討し、学問的に日蓮の御書として認められる文献、特に『観心本尊抄』『本尊問答抄』を使用して、日蓮大聖人の思想を明示するという作業をしているだけである。「発刊にあたって」において、「この要綱は、創価学会の教義を広く社会に対して客観的に説明することに力点が置かれています」とある通りである。日蓮本仏論を主張するために従来使用されてきた『本因妙抄』『百六箇抄』は使用せず、人法一箇論を主張するための『御義口伝』を使用することもしないという禁欲的な叙述に徹している。従来の教学に慣れ親しんだ人々にとっては、物足りないと思われるだろうが、世界に日蓮大聖人の仏法を理解してもらうためには、一度は経なければならない過程であると納得していただくしかないと思われる。創価学会が日本の没落と運命を共にするのか、しないのかが、今後の数年間で明らかになるかもしれない。

👉 人法一箇
と、御義口伝の
無視

我見、邪見



返信する...



宮田氏は「最も成功を納めるのは、インド」としているが、釈迦を中心の世界観にして池田先生の教えを歪め、インドの人々を欺けば、日蓮仏法は拡大すると考えているようだ。又、宮田氏は、「世界に日蓮大聖人の仏法を理解してもらうためには、一度は経なければならぬ過程であると納得していただくしかないと思われる。創価学会が日本の没落と命運を共にするのか、しないのかが、今後の数年間で明らかになるかもしれない」としている。

これほどの池田先生や戸田先生に対する反逆行為はないだろう。某会長とその取り巻きによる宗教組織の私物化である。全く教学を学ばず、この取り巻きを天上人の如く崇拜する創価学会員のなんと情けない姿か……。しかもこのような連中に限って、私に対して、『愚か者が！なぜ池田先生の壮大な御構想が理解できないのか！もっと教学を勉強しろ！大聖人は釈尊の御弟子だ！』、などと言ってくるであろうから、なんとかにつける薬はないのである。

池田先生の言葉はまさに名言であろう。

「南無妙法蓮華経は法であるが、同時に仏身なのです。人法一箇です。ここが大切な所です」（『法華経の智慧』第4巻 p. 80）

「上行菩薩は、一往文上の辺では、法華経の虚空会で 釈迦、多宝の二仏から妙法蓮華経を譲り受けるという儀式を踏みます。しかし、再往文底からみれば、上行菩薩の本地は久遠元初の自受用報身如来です。本来、妙法の大地に住し、人法一体である、最も根本の仏なのであります。」（『池田大作全集』第24巻 p. 130）。

『教学要綱』の執筆者たちは、この「寿量の仏」を文字通りインドの釈尊と解釈しているのだ。しかし日興門流では当然のことながら「『人』とは、文底の釈尊であり、人本尊である日蓮大聖人です」（『新・人間革命』第6巻 p. 339）

「御義口伝講義」にある「人法一箇」のご教示

宮田教授の facebook の投稿における「人法一箇論を主張するための『御義口伝』も使用しない」とか、男子部教室の「釈尊も大聖人も、根本の法である南無妙法蓮華経によって仏になった」という主張は、『教学要綱』の本尊観が人格を伴わない法本尊であることを暴露している。

人法一箇を認めず人と法を切り離す『教学要綱』の方向で進めば、題目と本尊はあっても戸田・池田両先生の正しい教えは残らず、日顕宗と同様の、人を悪道に落とす邪教となりかねない。前者は法主絶対主義、後者は組織絶対主義、会長絶対主義であり、共に人を絶対としてその権威で人々を理屈抜きの盲信に導くからである。

日顕宗と『教学要綱』の共通点

1. 人と法を分離させ、日興上人の遺誠置文に背いて文上の法華経を説く。これはともに戸田先生の次の教示によって潰れる。「人法一箇とは、仏法の大眼目であり、正邪の判別はこれにある。南無妙法蓮華経即日蓮大聖人であるにもかかわらず、邪宗では、南無妙法蓮華経の法を立て、久遠実成の釈迦を人に立てている。人法のそろわぬことは大問題である」（『戸田城聖全集』第4巻 p. 67）

2. 前者は法主絶対主義、後者は組織絶対主義、会長絶対主義。そして、両者とも絶対のものに対する盲信を強要し、これを批判する者を反逆者扱いして悪口罵詈し、抑圧する。

3. 共に南無妙法蓮華経と大聖人の生命が分離しており、結果として人を悪道へ落とす邪教となる。そして「人法のそろわぬこと」が人々の成仏を妨げる第六天の魔王の所業となる理由となる。

まとめ 『教学要綱』は最後まで、日蓮を釈迦の使いであるとするが、これは釈迦が南無妙法蓮華経という法を修行して仏になった（始めのある仏）こと、大聖人が人法一箇の無始の仏であることと矛盾する。その理由は『教学要綱』が文上にとらわれた「天台家の読み方」（『戸田城聖全集』第5巻 p. 388）になっているからである。

これは、日蓮仏法の理解が十分になるまでは天台の教えを学んではいけないという日興遺誠置文に違背するし、「夫れ仏法を学せん法は必ず先づ時をならうべし」（撰時抄）という大聖人の教えに違背する。そして、天台流の読み方で法華経を講義したことで罰を受けたとする戸田先生の教訓（『人間革命』第4巻）に背き、戸田先生の教えを忠実に守られた池田先生の教えに違背する。文上に囚われた在り方を捨て、今まで通り根本仏としての日蓮大聖人、日蓮即南無妙法蓮華経の本尊論に戻すのが唯一の師弟不二を貫く道であろう。

宮田教授が破壊しようとしている**人法一箇**の教義についても日興上人の「法花聖人の御宝前に申上まえらせ候了」（『歴代法主全書』第1巻p.122）、「法華聖人へ御酒御さかな種々に恐入で給候了」（同p.157）、「法主聖人の御宝前に奉準進候了」（同p.197）、「ほとけしやう人の御けさんに申上まえらせ候ぬ」（同p.199）等の言葉が残っており、これらは、「**南無妙法蓮華經 日蓮**」を指すのは明白である。

宮田教授は日興に人法一箇の思想は見られないとするが（これを認めてしまうと釈迦＞日蓮が成り立たなくなるため）、それは暴論でしかない。そして同教授は、「有供養者 福過十号」「若悩乱者頭破七分」と書かれた大聖人の曼荼羅を否定し、「**私は日蓮の主張は誤っていると思っているから、曼荼羅からはその記述（「有供養者福過十号」「若悩乱者頭破七分」の文）を除外すべきだと思っている**」と主張し、日蓮大聖人その人を否定する暴論を吐いて須田氏に批判されている（「『**創価学会教学要綱**』と**日蓮本仏論の考察**」p.158）。

特筆すべきは男子部教室の次の余りにも酷い一文だろう。彼らの正体丸出しであり、日蓮同様に永久にその邪義を後世に残すべき内容となっている。
<https://www.sokayouth-media.jp/answer/2825023.html> 「須田氏は『釈迦と日蓮に上下・勝劣はないというのであれば釈迦を拝んでも何ら問題ないことになってしまふ』と主張しているが、創価学会においては、釈尊も日蓮大聖人も『拝む対象』ではない。氏は『本仏』と『本尊』の概念を混同しているといえる」（創価男子部教室）

戸田・池田先生のスピーチを引用してみよう。実は（我々学会員は）久遠元始以来、日蓮大聖人に向かって、唱題を唱えてきているのです」（戸田城聖全集二巻, p39）「御本尊に祈るということは、日蓮大聖人に祈ることである」（『広布と人生を語る』第2巻 p.73）牧口・戸田・池田先生は皆、**人法一箇**の本尊観であったことは明らかである。「法と人（仏）は本来、不可分なのです。（略）宇宙生命に“人”の側面と“法”の側面があり、それが一体なのです」（『法華經の智慧』第4巻 p.56-57）。いつから祈る対象は法本尊のみになったのか。すでに述べたが、この本尊観は開目抄や御義口伝に矛盾する。三代会長が一回でもそのような指導をしたか、説明せよ。—と。

上記、中村誠氏の論考— 宮田幸一氏の「**御義口伝**」「**人法一箇**」無視 —への破折は、正論です。

さらに、この度、中村誠氏から「人法一箇」を無視、削除した「教学要綱」への新たな破折論文を寄稿頂きました。玉稿と拝し、ご紹介します。

(太字、青、赤字は図齊によります)

一御衣並単衣御書(全集971, 新版1310)の一説、「**応化非真仏と申して三十二相八十種好の仏よりも法華經の文字こそ真の仏にてはわたらせ給いて仏在世に仏を信ぜし人は仏にならざる人もあり、仏の滅後に法華經を信ずる人は無一不成仏如来の金言なり**」だが、他の真筆御書と比較した場合に矛盾が非常に多い。仮に中山の法華經寺に真筆がなければ身延の学者たちによって偽書扱いされていたのではないかと思わせる。しかしながら、これらの矛盾点を全て細かく検証し、ひも解くことで、隠されていた大聖人の意図、特に「**真の仏**」とは一体どなたであるのかという最重要事項が判明するのである。それではこれから細かくみていこう。

まず初めに、「**応化非真仏と申して三十二相八十種好の仏よりも法華經の文字こそ真の仏にてはわたらせ給いて**」という個所だが、「**法華經をよませ給はむ人は文字と思食事なかれすなはち仏の御意なり**」木絵二像開眼之事 或いは法華經を釈迦の生命そのものであると説いた衣食御書の一説「**法華經は釈迦仏の御いろ、世尊の御ちから、如来の御いのちなり**」と完全に矛盾してしまう。法華經即釈迦の生命であるならば、法華經の文字こそ三十二相八十種好を備えた真の仏なり、とならなければならない。その意味で次の開目抄の御文とも同様に矛盾してしまう。「**此の經一部八卷・二十八品・六万九千三百八十四字・一一に皆妙の一字を備えて三十二相・八十種好の仏陀なり**」これが第一の矛盾である。

第二の矛盾は、御衣並単衣御書では「**法華經の文字こそ真の仏**」とされているが、「**仏は所生・法華經は能生・仏は身なり法華經は神なり**」と説いた本尊問答抄或いは「**經は師なり仏は弟子なり**」と説いた乗明聖人御返事、或いは「**仏はいみじしといへども法華經にたいしまいらせ候へば・螢火と日月との勝劣・天と地との高下なり**」上野殿御返事 等と完全に矛盾してしまう。法華經の文字が仏であるならば、法と仏は全く同様の存在であり、法が勝り仏が劣るという教義とは相容れないのである。

第三の矛盾は、御衣並単衣御書では「**仏の滅後に法華經を信ずる人は無一不成仏如来の金言なり**」と説かれているが、「**今末法に入りぬれば余經も法華經もせんなし、但南無妙法蓮華經なるべし**」上野殿御返事、

或いは「末法に入りなば迦葉・阿難等・文殊・弥勒菩薩等・薬王・観音等の
ゆづられしところの小乗經・大乘經・並びに法華經は文字はありとも衆生の病
の薬とはなるべからず、所謂病は重し薬はあさし、其の時上行菩薩出現して妙
法蓮華經の五字を一閻浮提の一切衆生にさづくべし」高橋入道殿、或いは「彼
（正法）は一品二半此れ（末法）は但題目の五字なり」観心本尊抄 等と説か
れ、末法においては法華經は役に立たないのはこれらの御書から明らかであ
る。法華經を読經する目的はあくまでも助行のためでしかない。五人所破抄に
は次のように説かれている。「一には所破の爲二には文証を借るなり」。末法に
おいて役立たずの法華經を修行したところで仏になれないのは明らかである。

これら三つの矛盾の内、第一と第三の矛盾の解決する方法はただ一つ。初穂
御書や千日尼御返事で説かれる「法華經の御宝前」に説かれる「法華經」とい
う意味を、文字曼荼羅として解釈することである。即ち、「法華經の文字こそ
眞の仏」とは南無妙法蓮華經の御本尊であることがわかる。「仏在世に仏を信
ぜし人は仏にならざる人もあり、仏の滅後に法華經を信ずる人は無一不成仏如
來の金言なり」。即ち、正法時代に釈迦という仏を信じるよりも、末法に南無
妙法蓮華經の御本尊という仏を信じる方が優れているというのが、この御衣並
単衣御書の主旨であることがわかる。そしてここから判明することは、南無妙
法蓮華經の御本尊と体を同一とする仏とは、三十二相八十種好の仏ではないと
いうことである。

全く同様の内容が、上野殿御返事からも確認できる。「仏の在世に徳勝童
子・無勝童子とて二人のをさなき人あり、土の餅を仏に供養し給いて一百年の
内に大王と生れたり、仏はいみじしといへども法華經にたいしまいらせ候へ
ば・螢火と日月との勝劣・天と地との高下なり、仏を供養して・かかる功德あ
り・いわうや法華經をや、土のもちるを・まいらせて・かかる不思議あり・い
わうやすずのくだ物をや。」ここで重要なのは、仏（釈尊）を螢火に、法華經
を日月に譬え、法勝人劣を説いていることである。しかしながら、この法華經
は御本尊と捉えなければならない。その理由は、すずのくだものを法華經に供
養したとあり、法華經が祈りの対象になっているため。もう一つの理由は、法
華經即釈迦の生命そのものであり、そこに功德の優劣を持ち込むと矛盾が生じ
るためである。

それでは釈迦の仏像と文字曼荼羅ではどちらが優れているのか。答えは木絵
二像開眼之事にある。

「涅槃の後分には生身の仏と滅後の木画の二像と功德齊等なり」とあり、31相を備えた仏像に、梵音声（心法）である法華經を印することで、仏像（又は釈迦の画像）が、生身の釈迦と変わらなくなるというのがこの御書の主旨であるが、文字曼荼羅に供養する功德と、釈迦に供養する功德では天地の差があると上野殿御返事は説いており、又、御衣並単衣御書には、仏在世には釈尊を信じて仏になれない人々もいたが、末法において文字曼荼羅を供養すれば例外なく皆仏になることが説かれているため、この御書も同様に、文字曼荼羅＞釈迦の仏像、となるのである。「本尊とは勝れたるを用うべし」本尊問答抄 又、異なる形態の本尊を用いることは、「四天下の中に全く二の日無し四海の内豈両主有らんや」顕仏未来記 と説く大聖人の御精神に反する。従って末法においては釈迦の仏像を用いないのは当然のことである。釈迦の仏像に四菩薩を加えて本尊とする行為も同様である。「法華經の題目を以て本尊とすべし」本尊問答抄 とあるように、あくまでも本尊は、釈迦仏よりもはるかに功德の勝る文字曼荼羅でなければならない。

しかしここで大きな問題が起こる。報恩抄には、「本門の教主釈尊を本尊とすべし」と釈迦を本尊として祈りの対象とすることが説かれているからである。しかしながら、二年後に同じ浄土房に与えられた重要御書、本尊問答抄には、「法華經の教主を本尊とす法華經の正意にはあらず」とあり、完全に矛盾してしまう。この矛盾は、報恩抄の続きを読めば明らかである。「所謂宝塔内の釈迦多宝・外の諸仏・並に上行等の四菩薩脇士となるべし」。即ち、本尊である本門の教主釈尊の脇士として、釈迦・多宝及び四菩薩が並ぶということである。これを文字曼荼羅の相貌に照らし合わせてみるならば、中央に大書された南無妙法蓮華經の脇士として、釈迦・多宝、そして四菩薩が並んでいるのが明らかとなる。又、「此の時地涌千界出現して本門の釈尊を脇士と為す一閻浮提第一の本尊此の国に立つ可し」観心本尊抄 の御文とも完全に一致することから、中央に大書された南無妙法蓮華經こそが、報恩抄に説かれている本門の教主釈尊であることが判明する。なお余談だが、日興がこの御文を「本門の教主釈尊の脇士となりて」と解釈したという話がまことしやかに説かれているが、これはそもそも法勝人劣の原理に矛盾するし、報恩抄の記述にも、文字曼荼羅の相貌にも矛盾するので、釈迦をなんとか本仏としたい邪師による明らかな偽装である。

しかしながらまだ問題は残る。「法華經の文字こそ真の仏」と説いた御衣並単衣御書の御文である。

中央に大書された南無妙法蓮華經が本門の教主釈尊なのは前の考察であきらかとなったが、南無妙法蓮華經なる「**本門の教主釈尊**」とは仏（人）ではなく法である。「**人輕しと申すは仏を人と申す法重しと申すは法華經なり**」宝輕法重事という御書の御文から明らかなように、仏は法よりも劣る存在でしかない。なぜ法華經の文字（文字曼荼羅）が法本尊ではなく、仏とされているのか。又、同御書には法に劣る仏が、「**一閻浮提の内に法華經の寿量品の釈迦仏の形像を・かきつくれる堂塔いまだ候はず**」と、祈りの対象となっており、これは、「**本尊とは勝れたるを用うべし**」と説かれた**本尊問答抄**と矛盾するし又、「**四天下の中に全く二の日無し四海の内豈両主有らんや**」と説かれた**顯仏未來記**とも矛盾する。**二つの形式の異なる本尊を認めるのは大聖人の真意ではないのは明らか**で、大聖人は仏像は所持しておられたが、図顯されたのはことごとく文字曼荼羅であり、仏像ではない。**劣る本尊は信徒の理解が進むにつれて廃していく必要があるのである。**

これらの矛盾点を解決するカギは、実はすでに前に引用した御書にある。「**法華經は釈迦仏の御いろ、世尊の御ちから、如来の御いのちなり**」衣食御書がそれである。即ち、**法とは即仏であり、仏とは即法でなければならない。**この法即仏、仏即法という**人法一箇**を示した重要な御書が次の**木絵二像開眼之事**の御文である。「**仏に三十二相有す皆色法なり、最下の千輻輪より終り無見頂相に至るまでの三十一相は可見有対色なれば書きつべし作りつべし梵音声の一相は不可見無対色なれば書く可らず作る可らず**」即ち、仏の持つ特徴である三十二相の内、梵音声のみが仏像や画像では表現できないので、これらでは生身の仏と功德が等しくならないということである。それでは仏の三十二相とは一体何か、具体的にみていこう。以下にその特徴を示す。

仏の三十二相

1. 足下安平立相（そっかあんぺいりっそう）足の裏が平らで、均整が取れている。2. 足下千輻輪相（そっかせんぷくりんそう）足の裏に千輻（中心から放射状の線）のある輪の紋がある。3. 手足指縵網相（しゅそくしまんもうそう）手足の指の間に網のような膜がある。4. 手足柔軟相（しゅそくにゅうなんそう）手足が非常に柔らかい。5. 手足指長相（しゅそくしちょうそう）指が長く美しい。6. 足跟満相（そくこんまんそう）かかとがふくらみ、まるい。7. 足脛如鹿王相（そくけいによろくおうそう）足の脛（すね）が鹿王のように美しい。

8. 身長丈広正直相（しんちょうじょうこうしょうじきそう）体が高く、正しく整っている。9. 両手下垂過膝相（りょうしゅかすいかしつそう）両腕を下ろすと膝を越えるほど長い。10. 陰蔵相（いんぞうそう）男性器が体内に収納されて見えない。11. 身色金色相（しんしょくこんじきそう）体が金色に輝いている。12. 一一毛孔生一毛相（いちいちもうこうしょういちもうそう）毛穴ごとに一本ずつ毛が生えている。13. 毛右旋相（もううせんそう）体毛が右巻きにカールしている。14. 身毛上向相（しんもうじょうこうそう）体毛がすべて上向きに生えている。15. 身円満相（しんえんまんそう）体が丸く整っている。16. 身如尼拘類樹相（しんにょにくるいじゅそう）身長がニール樹（高木）のように高い（丈六）。17. 胸広平正相（むねこうへいしょうそう）胸が広く、平らで整っている。18. 竜象臂相（りゅうぞうひそう）腕が象のように太く力強い。19. 手指細長相（しゅしさいちょうそう）指が細く長い。20. 身円相（しんえんそう）体が完全に円く、均整が取れている。21. 胸有卍字相（むねにまんじそう）胸に卍（まんじ）の形が現れている。22. 身光一尋相（しんこういちじんそう）体から一尋（両手を広げた長さ：約180cm）ほどの光を放っている。23. 眼色浄相（がんしょくじょうそう）目が澄んで清らかである。24. 眼睫長相（がんしょうちょうそう）まつ毛が長い。25. 白毫相（びやくごうそう）眉間に白く巻き毛のようなものがある（白毫）。26. 眼青白分明相（がんせいびやくぶんみょうそう）黒目と白目の境がくっきり分かれている。27. 顔如満月相（がんにょまんげつそう）顔が満月のように美しい。28. 鼻高直相（びこうちよくそう）鼻が高くまっすぐである。29. 唇赤好相（しんせきこうそう）唇が赤く整っている。30. 齒白齊密相（しはくせいみつそう）歯が白く、隙間なく並んでいる。31. 舌広長相（ぜつこうちょうそう）舌が広く長く、顔全体を覆うほど。32. 声深遠相（しょうじんのんそう）声が深く澄み渡り、遠くまで響く。

これらの内、確かに31番目まではすべて仏像や画像で表現することができる。しかし、声に関する項目に関しては不可能であることがみてとれる。そこで、釈迦の生命そのものである法華経を仏像に印して開眼供養することで、仏像や画像の功德が、生身の釈迦と等しくなるという**人法一箇**の法理を説いているのである。以下その御文を示す。 81/106

「色心不二なるがゆへに而二とあらはれて仏の御意あらはれて法華の文字となれり、文字変じて又仏の御意となる、されば法華經をよませ給はむ人は文字と思食事なかれすなはち仏の御意なり」（略）「法華經を心法とさだめて三十一相の木絵の像に印すれば木絵二像の全体生身の仏なり」即ち仏像とは、三十一相という仏と、梵声音（心法）を表す法華經という法の二つ、**人法一箇**から成り立っているとわかるのである。それならば、文字曼荼羅の中央に大書された南無妙法蓮華經も、法であると同時に本門の教主釈尊というインドの仏であると捉えればよいように思える。**本尊問答抄**には「**此（南無妙法蓮華經）の中には已に如来の全身有す**」とあり、この宝塔の中にいる如来こそが、**報恩抄で本尊と断定される教主釈尊と合致する**からである。

ところがこの解釈は前に指摘したように大きな問題をはらむ。南無妙法蓮華經即釈迦であるならば、南無妙法蓮華經即三十二相八十種好を備えた釈迦仏であるこの御本尊こそ、真の仏である、という記述にならなければならない。ところが最初に問題視した**御衣並単衣御書**の一説では、三十二相を備えた釈迦を退け、法を真の仏としているのである。**法蓮抄**には、「**仏には必ず三十二相あり**」とあり、完全に矛盾してしまう。又、南無妙法蓮華經即釈迦であるならば、両者の功德は全く等しくなければならない。ところが、先に述べた**上野殿御返事**には、法に供養する功德は釈迦に供養する功德に遥かに勝るとある。又、**本尊問答抄**も同様に、「**法華經の教主を本尊とす法華經の正意にはあらず**」とあり、釈迦を退けている。これも矛盾といえよう。

更に問題なのが、釈迦の寿命に関する問題である。「**本門を以て之を疑わば教主釈尊は五百塵点已前の仏なり因位も又是くの如し**」**観心本尊抄** ここで五百塵点已前の仏とあるが、問題なのはそのさらに前は因位、即ち菩薩という修業時代があったということである。この釈尊の修行時代の姿こそが不輕菩薩といえるが、それ以上さかのぼるとどうなるかというと、「**不輕菩薩は過去に法華經を謗じ給う罪・身に有るゆへに瓦石をかほるとみへたり**」**開目抄**、すなわち釈尊が謗法を犯していた時代にたどりつく。**仮に釈尊が根本の仏であるならば、南無妙法蓮華經は仏と分離されて単独で存在しており、仏のいない無仏の時代が存在したことになってしまう。**「**法身の無始・無終はとけども応身・報身の顕本はとかれず**」**開目抄** とあるように、法身のみの無始・無終と説く經典は劣る教えである。それではこの問題はどうか考えるべきかというと、三身常住を説いた次の御文こそが、全ての矛盾を説く鍵となる。

観心本尊抄には、「我等が己心の釈尊は五百塵点乃至所顕の三身にして無始の古仏なり」と、大聖人とその弟子たちの己心の仏界の永遠性と、三身の常住を説いている。なお、この釈尊をインドの釈尊と解釈することは不可であり、それならば、教主釈尊の己心の仏界は五百塵点乃至所顕の三身にして無始の古仏なり、とならなければならない。即ち、無始の古仏とは総じては地涌の菩薩であり、別しては日蓮大聖人その方を指すという日蓮本佛論がここから生じるのである。それでは大聖人が、釈尊を超える根本の仏であると仮定して、御衣並単衣御書等で示した矛盾点が解決できるかどうか、詳しくみていこう。

まず最初の御文、「応化非真仏と申して三十二相八十種好の仏よりも法華經の文字こそ真の仏」であるが、三十二相八十種好を備えた仏ではなく、南無妙法蓮華經という法と一体の仏が大聖人であるとしたら、全く矛盾は生じなくなる。真の仏とは、南無妙法蓮華經如来ということが今までの議論からいえるだろう。法勝人劣に関してはどうか？仏は所生・法は能生であることは、本尊問答抄から明らかだが、この理由は、諸仏は南無妙法蓮華經を修行することで始めて仏になることができたからに他ならない。だから、「經は師なり仏は弟子なり」乗明聖人御返事 或いは「法華經は十方三世の諸仏の御師」千日尼御前御返事となるのである。

そしてこの法という師から、応身・報身という人格を排除することは不可能である。釈迦の仏像の開眼供養の教えが示しているように、法には必ず仏という側面が付きまとう。そして、南無妙法蓮華經という最高の法を所有し、その法と体を一体とする仏こそが、日蓮大聖人その方ということができる。「上行菩薩所伝の妙法蓮華經の五字」法華取要抄 とはそういうことである。又、無始の古仏を説く観心本尊抄の御文の少し手前にある御文は非常に重要である。「釈迦・多宝・十方の諸仏は我（日蓮）が仏界なり其の跡を継紹して其の功德を受得す「須臾も之を聞く・即阿耨多羅三藐三菩提を究竟するを得」とは是なり」。即ち、釈尊のような長い修業期間を経ずして、一瞬で悟りを開いて仏となった存在が大聖人であると解釈できる。

故に、釈迦のような修行期間や謗法の期間を持たず、宇宙の根本法の南無妙法蓮華經と無始以来一体の仏ということがいえよう。諸仏はこの法即仏の御本尊を師匠として、悟りを開いたということがいえる。従って文字曼荼羅では、法勝人劣のような差別はなく、法即仏であるといえる。こう考えたとき、なぜ法より劣る仏も報恩抄や宝輕法重事、或いは本迹勝劣の事では本尊とするのかという答えも解けるだろう。根本仏には始まりはないからである。 83/106

かくして報恩抄で本尊とすべしととかれた本門の教主釈尊とは大聖人であり、本尊問答抄で説かれる法の中にいる如来も同様に大聖人と捉えるならば、人法一箇を説いた木絵二像開眼之事とも矛盾しなくなるのである。

さらにいうなら、高橋殿御返事には、「いさご（砂）のもちみを仏に供養しませしわらは百年と申せしに一閻浮提の四分が一の王となる所謂阿育大王これなり、法華經の法師品には而於一劫中と申して一劫が間・釈迦仏を種種に供養せる人の功德と・末代の法華經の行者を須臾も供養せる功德と・たくらべ候に其福復彼に過ぐと申して法華經の行者を供養する功德すぐれたり、これを妙樂大師釈して云く「供養すること有らん者は福十号に過ぐ」と云云、されば仏を供養する功德よりも・すぐれて候なれば仏にならせ給はん事疑いなし」とあり、法華經の行者（日蓮大聖人）を供養することは、インドの釈尊を供養することよりも遥かに勝る、と説かれているのである。このように説かれる御書は実は数多い。

日興上人の写本の残る土餅供養御書、真筆完備の国府尼御前御書、明治まで身延に真筆が現存していた法蓮抄等がそうである。そして興味深い対比が、仏に土の餅を供養した童子が、百年後に阿育大王に生まれかわったとして釈迦仏法の功德の大きさを説きつつも、妙法に供養する功德はそれに勝るとする上野殿御返事と、同じ説話をとりあげつつ、法華經の行者を供養する功德はこれに遥かに勝ると説いた高橋殿御返事であろう。一方は法、もう一方は仏である。そしてそこに功德の優劣はないのは明らかである。故に文字曼荼羅とは人即法、法即人の人法一箇でなければならないし、こう考えたとき、全ての矛盾は消滅するのである。

それでは釈迦を本佛とする身延派はこれらの御書をどのように解釈するのだろうか。どうやら、末法においては、釈尊の時代よりも遥かに迫害が強いので、法華經の行者を供養することで、釈尊を供養することよりも大きな功德をもらえる。従って有供養者福過十号の讃嘆文は、日蓮本佛論とは無関係であると、相当苦しい言い訳をしている。では実際にそのような意味で御書で使われているか確認してみよう。「是れ程に貴き教主釈尊を一時二時ならず一日二日ならず一劫が間掌を合せ両眼を仏の御顔にあて頭を低て他事を捨て頭の火を消さんと欲するが如く渴して水ををもひ飢えて食を思うがごとく間無く供養し奉る功德よりも戯論に一言継母の継子をほむるが如く心ざしなくとも末代の法華經の行者を讃め供養せん功德は彼の三業相応の信心にて一劫が間生身の仏を供養し奉るには百千万億倍すべしと説き給いて候、

これを妙楽大師は福過十号とは書れて候なり、十号と申すは仏の十の御名なり十号を供養せんよりも末代の法華經の行者を供養せん功德は勝るとかかれたり」法蓮抄 戲論で大聖人を褒めたところで迫害など起こりようがない。しかしそうすることは、釈尊を一劫（43億年）供養することよりも勝るという驚くべきことが説かれている。明らかに身延のその解釈は無理がある。当然といえば当然だが、戸田先生はこの讃嘆文を次のように解釈する。

「大御本尊の両脇におしたためになられておりますが、妙楽がいわく「若し悩乱する者は頭七分に破れ供養すること有る者は福十号に過ぐ」と。十号とは仏のことです。この仏は、釈迦仏法の仏です。大聖人の御本尊様の意味ではないのです。われわれがよく仏様だ仏様だと聞いているあの仏様に勝る（罰も功德も）こと、たいへんなものだという」（戸田城聖全集7巻、四信五品抄講義 p. 386）又、池田先生もこの法蓮抄の御文や、下山御消息の「教主釈尊より大事な行者一日蓮」を解釈して次のように主張されている。「日蓮大聖人は、釈尊よりも百千万億倍すぐれた御本仏である。大聖人に相対すれば（釈尊は）迹仏である」（御義口伝講義上 p, 770）

それではこれまでのまとめを述べてみよう。仮に末法の根本仏を釈迦と仮定した場合、御衣並単衣御書の「三十二相八十種好の仏よりも法華經の文字こそ真の仏（略）仏在世に仏を信ぜし人は仏にならざる人もあり、仏の滅後に法華經を信ずる人は無一不成仏如来の金言」は、明らかに釈迦以上の仏の存在をほのめかしているが、その仏とは法華經の文字であり、これは、法華經こそ釈迦の生命そのもの（人法一箇）と説いた衣食御書の御文や、「法華經は釈迦仏の御いろ、世尊の御ちから、如来の御いのちなり」開目抄の御文「此の經一部八卷・二十八品・六万九千三百八十四字・一一に皆妙の一字を備えて三十二相・八十種好の仏陀なり」と矛盾する。

人法一箇なのだから、御衣並単衣御書の「法華經の文字こそ真の仏」御文は、法華經こそ釈尊と一体の真の仏と説くと、法が仏の師匠と説く乗明聖人御返事「經は師なり仏は弟子なり」、本尊問答抄「仏は所生・法華經は能生・仏は身なり法華經は神なり」及び、上野殿御返事「仏はいみじしといへども法華經にたいしまいらせ候へば・螢火と日月との勝劣・天と地との高下なり」のこれらの御文と矛盾する。又、法華經即釈迦の生命とすると、末法では法華經は役に立たないとする次の御書と矛盾する。

上野殿御返事「今末法に入りぬれば余経も法華経もせんなし、但南無妙法蓮華経なるべし」高橋入道殿「末法に入りなば迦葉・阿難等・文殊・弥勒菩薩等・薬王・観音等のゆづられしところの小乗経・大乘経・並びに法華経は文字はありとも衆生の病の薬とはなるべからず、所謂病は重し薬はあさし、其の時上行菩薩出現して妙法蓮華経の五字を一閻浮提の一切衆生にさづくべし」観心本尊抄「彼（正法）は一品二半此れ（末法）は但題目の五字なり」

そして、「**教学要綱**」のように、法と人を切り離して、法のみを祈りの対象とするならば、御衣並単衣御書の御文「**法華経の文字こそ真の仏**」の真の仏と矛盾するし、仏が祈りの対象であると明らかに述べた**報恩抄**の御文、「**本門の教主釈尊を本尊とすべし**」と矛盾する。「**教学要綱**」はどうやらこの教主釈尊を法の教主釈尊と解釈しているようだが、この解釈は、「**法華経の寿量品の釈迦仏の形像を・かきつくれる堂塔いまだ候はず、いかでか・あらわれさせ給わざるべき**」**宝軽法重事**と矛盾する。「**法華経の寿量品の釈迦仏**」や「**真の仏**」という言葉を法本尊と解釈することは不可能である。

又、御衣並単衣御書のこの御文、「**仏在世に仏を信ぜし人は仏にならざる人もあり、仏の滅後に法華経を信ずる人は無一不成仏如来の金言**」は、**釈尊の法華経よりも大聖人の南無妙法蓮華経が優れていると解釈する以外にはない**。従って、「**日は東より出づ日本の仏法の月氏へかへるべき瑞相なり、月は光あきらかならず在世は但八年なり、日は光明・月に勝れり五五百歳の長き闇を照すべき瑞相なり**」という**諫曉八幡抄**の御文と全く同じ意味であると解釈すべきである。又これは、日興上人書写の御本尊の8割に認められた讃嘆文、供養有者過福十号にも矛盾しない。ところがである。男子部教室なる連中は、池田先生の名前を用いて、次のように主張しているのである。

<https://www.sokayouth-media.jp/answer/2825023.html>

「ここで日月の明るさの違いが提起されているのは、当時のインドや中国で仏教が失われていたことを表しているとして、「だからこそ、太陽の如く一切衆生の苦悩の闇を破る法華経の智慧の大光を、再び中国、インドの大地に還していく。仏法の人間主義の生命を蘇らせ、永遠に全民衆の心を潤していく。これを『仏法西還』というのです」と講義している。須田氏はこの御文には「日蓮が釈迦仏に勝る存在であることが示されている」と主張しているが、師の深い洞察に照らして、見当外れな解釈であるといえる」

実はこれは過去の池田先生の講義と真っ向から反するものである。「本因妙の仏法は、太陽が無限の光彩を放ちながら昇りゆく姿といえるかもしれない。それに対し、インド応誕の釈尊の仏法は、夕日の沈みゆくがごときものである。(略) 釈尊の仏法は、過去遠遠劫より調機調養されてきた有縁の衆生を救済する役割が、すでに終わった仏法となるのです。」(生命と仏法を語る 上巻, p318-319) 過去に出版された諫暁八幡抄講義には、この御文を解釈して、次のような講義が残っている。「釈尊の仏法と大聖人の仏法を、月と太陽の光の強さに約されて、勝劣を明確にされている」(御書講義 諫暁八幡抄, p236)

同じ池田先生の主張でなぜこれだけ食い違いがあるのか。それではどちらが正しいのか検討してみよう。「ここで日月の明るさの違いが提起されているのは、当時のインドや中国で仏教が失われていたことを表している」釈迦仏法が大聖人の仏法と同様に優れているなら、インドや中国で仏教が失われることなど果たしてあるのか？そもそも日蓮大聖人が日本に出現して、インドに再び仏法を返す必要などないであろう。今まで通り、オリジナルのサンスクリット版の法華経を修行していればそれでよいのである。又、わざわざ日本語の南無妙法蓮華経を唱える必要もなかろう。又、創価学会の存在意義というのも全くないであろう。

さらに、「教学要綱」を擁護する男子部教学室なる連中は、御義口伝講義上 p, 770 で池田先生が、大聖人は釈尊よりも遥かに勝る仏であるという根拠にされた御文、下山御消息の「教主釈尊より大事なる行者一日蓮」を、池田先生講義の名の下に、信じられないような解釈をしているのである。それが次になる。「末法における現実の衆生救済においては、歴史上の存在である釈尊が活動することはないのであるから、その意味において、「教主釈尊より大事なる行者」と述べられていると解釈すべきであろう」この解釈は、大聖人は既に故人だから、現在においては大聖人の御内証を受け継いだ御法主上人こそが最も大切なお方である、という某法主やその取り巻きの坊主らと全く同じ類の主張ではないか。悩乱していると断じる他はないだろう。

池田先生が現役のころの講義と比較した場合、明らかに低劣な講義が、2010年、池田先生が病気で倒れた後から、少しずつ姿を現し始めるのである。そしてあろうことか、池田先生の師匠であられた戸田先生の教えを完全否定する方向にひた走っているのである。人法一箇否定、人本尊否定がそうである。そしてその究極が、こっそりと釈迦を根本の仏にした、「教学要綱」ということができる。

仮にこの「**教学要綱**」こそ大聖人直結の真実の教えであるとするならば、私が今までに示してきた真筆御書及び日興上人の写本の残る御書のみに基づいた御書の御文の矛盾点を解決する必要があるだろう。2010年以前の戸田・池田先生の御書解釈に沿って解釈するならば、先ほど述べた矛盾点はもちろんのこと、冗長になるのでここでは考察しなかった開目抄の「**文の底**」や、「**日蓮が法門は第三の法門なり**」と説かれた常忍抄ともなんら矛盾しないのである。詳しくは各自で試してみれば明らかになるだろう。こうした矛盾点を無視するのであれば、それはもはやアカデミズムなどとは到底呼べない、**池田先生の名前を悪用した、独りよがりな独善排他の低劣な宗教書に他ならないであろう。**

今回の論文で特に重要だなと感じるのが、御衣並単衣御書と高橋殿御返事（新版では高橋殿女房御返事）です。残念ながら両者ともさほど有名な御書ではありませんが。真筆が残る御衣並単衣御書では、三十二相を備えた釈尊を退け、文字曼荼羅（法華経）を「**真の仏**」と表現し、さらに日興上人の写本が残る高橋殿御返事では、「**供養すること有らん者は福十号に過ぐ**」と云云、**されば仏を供養する功德よりも・すぐれて候なれば仏にならせ給はん事疑いなし**」、即ち**釈迦を供養するよりも、大聖人を供養することの方が遥かに優れているので、大聖人を供養することで仏になれると言い切っている**ことです。この場合当然供養される側である大聖人も仏でなくてはならないし、そうした御自覚が大聖人にあったということです。しかもこの仏とは、釈尊を遥かに超越した仏でなければならないということがいえます。これが御本尊の右肩に書写されている「**供養有者過福十号**」の隠された意味であることを、この御書は示していると思います。

更に、この御書を書写した日興上人の実に8割にも及ぶ文字曼荼羅にこの賛嘆文が認められ、更に、「**ほとけしやう人（仏聖人）の御けさんに申上まいらせ候ぬ**」歴代法主全書1巻 p199 と、はっきりと大聖人を仏として崇拝していたという記述が残っていることは見逃せない事実です。大菩薩ではありませんし、ただ単に初めて題目を広めたから御本仏でもありません。そして、大聖人を供養して釈迦よりも遥かに大きい功德を得られるのですから、**日蓮本佛論がここにあるということがいえます**。結論として「**教学要綱**」は全て間違いです。**五老僧の末裔の言質と同じなのは疑いない**ところです。一と。

以上、中村誠氏の「人法一箇」についての論考、そして「教学要綱」への破邪顕正は見事です、完璧と拝します！

なお、中村氏の論文と共に、日蓮大聖人御書講義第十六巻 御衣並単衣御書 383頁の以下、論述をご参考下さい。「人法一箇」の結論でございます。

法華経の本門寿量品では始成正覺を打ち破って、久遠五百塵点劫の成道を示し、久遠の仏寿を顕した。この仏性の常住があらわれることによって真実の一念三千が定まったといえる。

法華経は爾前に説く三乗を破って一乗をあらわしたのであり、衆生が三乗を求めるのに応じて化現する権教の仏は真実の仏ではない。三十二相八十種好の仏は、姿はいかに莊嚴でも、衆生に随順した仏であって法より劣るのである。これを人法勝劣という。権経では、二乗や女人、悪人等は成仏できないとされたが、法華経は「鉤山一不成仏」すなわち、一人として成仏しない者はなく、天地の違いがあるのである。

ただ、ここでは権教の仏と法華経との相対のうえから法華経の勝れることが強調されているが、法華経本門といえども、その仏は三十二相八十種好の仏であり、したがって究極は本門文底の人法一箇の仏に帰着することはいうまでもない。 89/106

4. ここまで、三代会長がご教示された「**人法一箇**」があまりにも簡単、且つ、無残に削除された近刊の教学書、聖教新聞、大白蓮華等の実態を明らかにしました。そして、池田先生が縦横無尽にご教示された「**人法一箇**」を捨て去っておきながら、池田先生のお名前を利用した作文がどれほど無感動で、全く、信心の歓喜、錬磨、向上に資することがない、ということを述べました。

特に、「御義口伝講義」は、私の知る範囲、計30箇所にある池田先生のご教示「**人法一箇**」が、全て削除されながら、削除後の文章が近刊書に引用されていることに、私は心底から嫌悪感、怒りを覚えます。

私は、これまでで、今回の拙文の主意を皆様にご提示できたと思いますが、最後に、私が、今一番感動申し上げている、新・人間革命第19巻に記載の「**御本尊七箇相承**」と、このご相承について論述された、須田晴夫氏の著作「**日興門流と創価学会**」また、「**法華経の智慧**」に記述の「**蓮華の意義**」について引用させていただきます。そして、結論として「**教学要綱**」と、それを底意にした近刊教学本他の邪義を明白にします。

まずは、「**御本尊七箇相承**」についての**池田先生のご指導**を拝します。

(小説「新・人間革命」第19巻宝塔の章より)

「“**日蓮大聖人は、いったい何をこの世に弘めようとなされたのか**”という一点であります」(中略)「大聖人がこの世に弘めようとなされたものは、端的に申し上げれば『**本尊**』であります。

『本尊』とは、『根本として尊敬すべきもの』です。人は、根本に迷えば、枝葉にも迷い、根本に迷いがなければ、枝葉末節の迷いも、おのずから消えていくものである。ゆえに、いちばんの根本となる『**本尊**』を、一切衆生に与え、弘められたのであります。では、その『**本尊**』の内容とは何か」

「それは、『**御本尊七箇相承**』に『汝等が身を以って**本尊**と為す可し』(『富士宗学要集』第一巻所収)とある通り、あえて誤解を恐れずに申し上げれば、総じては、『人間の生命をもって本尊とせよ』ということであります」

「**御本尊七箇相承**」とは、日蓮大聖人から日興上人に相承された、**御本尊に関する七箇の口伝**である。伸一は、力強い声で語っていった。

「つまり、大聖人の仏法は『一切の根源は”生命”それ自体である。根本として大切に尊敬を払っていくべきものは、まさに”人間生命”そのものである』という哲理であり、思想なのであります」

山本伸一は、さらに「御本尊七箇相承」の「法界の五大は一身の五大なり、一箇の五大は法界の五大なり」、また「法界即日蓮、日蓮即法界なり……」の文を引き、こう語った。「つまり、宇宙を構成している要素である地・水・火・風・空という、同じ五大種によって、人間も構成されている。

大聖人は、『宇宙法界の全要素』と『日蓮という一個の生命体の全要素』とは、全く同じものであると断言されているのであります。これは、大聖人御自身だけでなく、一切衆生にも共通することであり、わが身は即大宇宙であり、妙法の当体である。それゆえに、生命を『本尊』として、大切にするのであります。私どもは、この御指南に、『生命の尊厳』の原点を見いだすものであります」

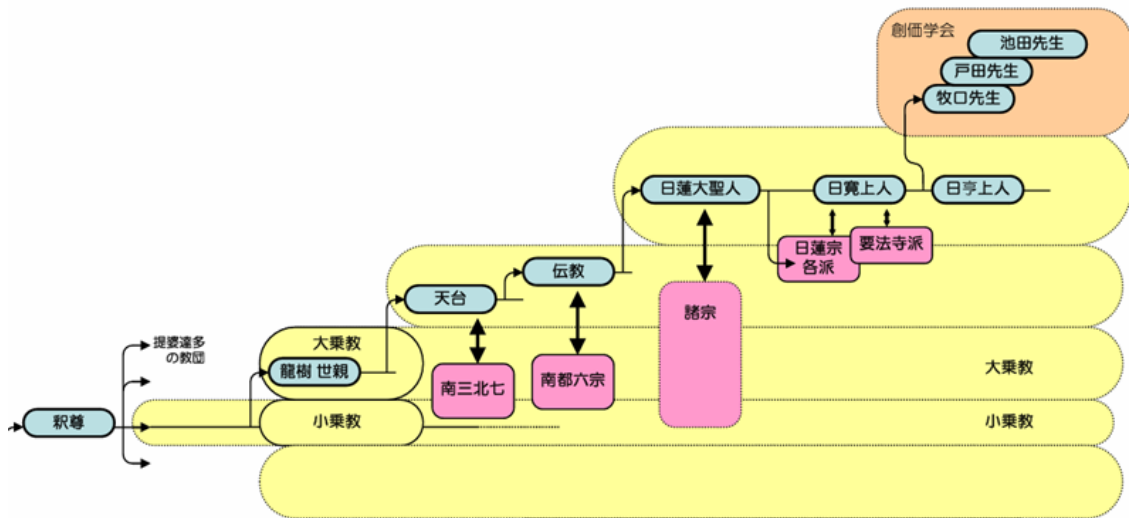
伸一は、日蓮仏法の本尊とは、決して神秘や幻想の象徴ではなく、人間自身の生命であることを明らかにしたのである。日蓮大聖人は、「此の御本尊全く余所に求る事なかれ・只我れ等衆生の法華經を持ちて南無妙法蓮華經と唱うる胸中の肉団におはしますなり」と仰せになっている。また、法華經に説かれた宝塔について、「宝塔即一切衆生・一切衆生即南無妙法蓮華經の全体なり」とも言われている。

仏は、遠い彼方の世界にいたるのではない。また、人間は神の僕ではない。わが生命が本来、尊極無上の仏であり、南無妙法蓮華經の当体なのである。ゆえに、自身の生命こそ、根本尊敬、すなわち本尊となるのである。そして、その自身の南無妙法蓮華經の生命を映し出し、涌現させるための「明鏡」こそが、大聖人が曼荼羅として顕された御本尊なのである。

* 上記、—法界即日蓮、日蓮即法界なり—は「人法一箇」との明確なる表現はございませんが、私見、この文意は広い意味での「人法一箇」であると拝し、僭越ながら、池田先生がご相伝「御本尊七箇相承」の本義を厳然と後世に遺して下さったことに、衷心より感動、感謝申し上げます。

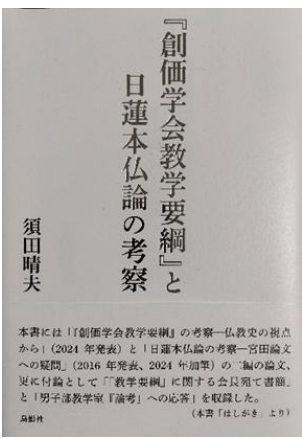
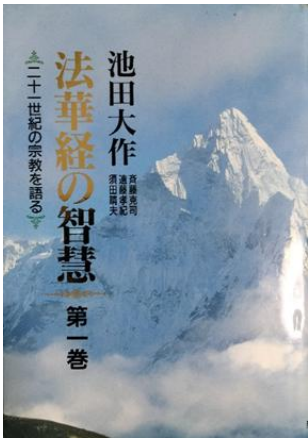
ここで、以下の系図をご覧ください。私見、**青の系統**こそが**釈尊**、**天台**、**伝教**を経て**法華經**の文底、**日蓮仏法**に至り、それを**継承する日興門流**と拝します。

学会に繋がる仏法の系譜



Clear Sky 氏の「創価学会の会員のための資料」<https://t.co/0pCNeSSStyC>

第三章 文底仏法と日寛教学（１９頁より引用）



そして、日興門流の正義を、現代に展開、ご教示されたのが「**法華經の智慧**」であります。

さらに、その清流を継承し、後世へ遺されたのが**須田晴夫氏の著作**であると拝しております。

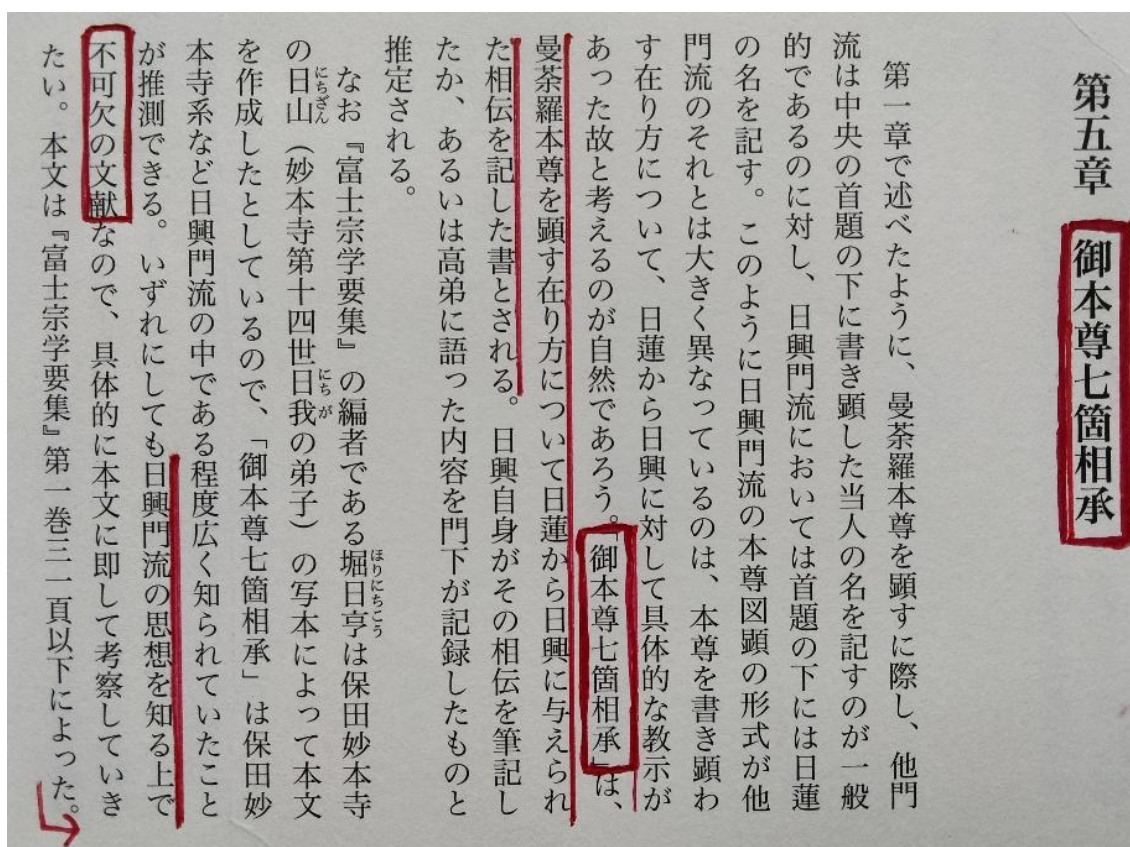


男子部教学室は、「**教学要綱**」の邪義を完璧に破邪顕正された須田晴夫氏へ下記にて、反論しました。

<https://www.seikyoonline.com/article/603E8EF7E9B96D20AF2920005F5C1C6B?snstoken=8adf6d02-2583-4ed9-a80c-d125adbab292> その中の一普遍的に説明一の箇所、**宗内でしか通用しない相伝書に依拠するのでは、普遍的な説明にはならない。**との暴言をしています。しかし、

私見、池田先生は、御書に掲載されていないご相伝「**御本尊七箇相承**」でも、その内容を日蓮大聖人の真意と拝察され、 — 「**御本尊七箇相承**」とは、日蓮大聖人から日興上人に相承された、**御本尊に関する七箇の口伝**である。伸一は、力強い声で語っていった。 — と明言されているのです！ よって、いかに、**男子部教学室の論考が誤り**であるかが判明されました！

そして「**法華経の智慧**」の鼎談者須田晴夫氏は著書「**日興門流と創価学会**」の中に「**御本尊七箇相承**」についての解説、論考をされています。その中心的論述を下記に、ご紹介します。



〈本文〉

七 日蓮と御判を置き給うこと、いかん（三世印判日蓮体具）。師の曰わく「首題も、釈迦・多宝も、上行・無辺行等も、普賢・文殊等も、舍利弗・迦葉等も、梵釈・四天・日月等も、鬼子母神・十羅刹女等も、天照・八幡等もことごとく日蓮なりと申す心なり」。これに付いて受持法華本門の四部の衆をことごとく聖人の化身と思うべきか。

師の曰わく「法界の五大は一身の五大なり。一箇の五大は法界の五大なり。法界即日蓮、日蓮即法界なり。当位即妙・不改・無作本仏の即身成仏の当体蓮華、因果同時の妙法蓮華經の色心直達の観、心法妙の振る舞いなり。また本尊書写のこと予が顕し奉るがこととなるべし。もし日蓮御判と書かずんば、天神地神もよも用い給わざらん。上行・無辺行と持国と、淨行・安立行と毘沙門との間には若惱乱者頭破七分・有供養者福過十号とこれを書くべし。經中の明文等、心に任すべきか」。

〈通解〉

七、日蓮と御判（花押）を書かれることはどのような意味があるのであろうか（三世の印判は日蓮の体に具わっている）。師（日蓮）は次のように言われた。「首題も、釈迦・

多宝も、上行・無辺行等も、普賢・文殊等も、舍利弗・迦葉等も、梵釈・四天・日月等も、鬼子母神・十羅刹女等も、天照大神や八幡神等も、全て日蓮であるという意味である」と。これに関連して言えば、法華文底独一本門を受持する僧侶・僧尼・男女の在家信徒はことごとく聖人の化身と思うべきであらう。

また師は次のように言われた。「法界の地水火風空の五大は一身の五大である。一箇の五大は法界の五大である。法界即日蓮、日蓮即法界である。凡夫の位のままで妙覺の仏となり（当位即妙）、凡夫の身を改めずに無作三身の本仏となる即身成仏の当体蓮華の妙法は因果同時の妙法蓮華經である。それを行ずることは色心ともに妙覺に直達する実践であり、生命そのものが妙であること（心法妙）を示す振る舞いである。また、本尊書写のことは私（日蓮）が顕し奉るようすべきである。もし日蓮御判と書かなければ、天神地神もよもや用い給うことはないであらう。上行・無辺行と持国天の間と、淨行・安立行と毘沙門との間には『若惱乱者頭破七分』『有供養者福過十号』と書くべきである。その他の經中の明文等などは書写する者の心に任せるべきであらう」と。

〈解説〉

曼荼羅本尊を図顯する際、日蓮は自身の署名とともに必

池田先生が「法界即蓮華」を引用

〔本文〕

七、日蓮と御判を置き給うこと、いかん（三世印判日蓮体具）。師の曰わく「首題も、釈迦・多宝も、上行・無辺行等も、普賢・文殊等も、舍利弗・迦葉等も、梵釈・四天・日月等も、鬼子母神・十羅刹女等も、天照・八幡等もことごとく日蓮なりと申す心なり」。これに付いて受持法華本門の四部の衆をことごとく聖人の化身と思うべきか。

師の曰わく「法界の五大は一身の五大なり。一箇の五大は法界の五大なり。法界即日蓮、日蓮即法界なり。当位即妙・不改・無作本仏の即身成仏の当体蓮華、因果同時の妙法蓮華經の色心直達の観、心法妙の振る舞いなり。また本尊書写のこと予が顕し奉るがごとくなるべし。もし日蓮御判と書かずんば、天神地神もよも用い給わざらん。上行・無辺行と持国と、淨行・安立行と毘沙門との間には若惱乱者頭破七分・有供養者福過十号とこれを書くべし。經中の明文等、心に任すべきか」。

〔通解〕

七、日蓮と御判（花押）を書かれることはどのような意味があるのであろうか（三世の印判は日蓮の体に具わっている）。師（日蓮）は次のように言われた。「首題も、釈迦・

多宝も、上行・無辺行等も、普賢・文殊等も、舍利弗・迦葉等も、梵釈・四天・日月等も、鬼子母神・十羅刹女等も、天照大神や八幡神等も、全て日蓮であるという意味である」と。これに関連して言えば、法華文底独一本門を受持する僧侶・僧尼・男女の在家信徒はことごとく聖人の化身と思うべきであろう。

また師は次のように言われた。「法界の地水火風空の五大は一身の五大である。一箇の五大は法界の五大である。法界即日蓮、日蓮即法界である。凡夫の位のままで妙覺の仏となり（当位即妙）、凡夫の身を改めずに無作三身の本仏となる即身成仏の当体蓮華の妙法は因果同時の妙法蓮華經である。それを行ずることは色心ともに妙覺に直達する実践であり、生命そのものが妙であること（心法妙）を示す振る舞いである。また、本尊書写のことは私（日蓮）が顕し奉るようにすべきである。もし日蓮御判と書かなければ、天神地神もよもや用い給うことはないであろう。上行・無辺行と持国天の間と、淨行・安立行と毘沙門との間には『若惱乱者頭破七分』『有供養者福過十号』と書くべきである。その他の經中の明文等などは書写する者の心に任せるべきであろう」と。

〔解説〕

曼荼羅本尊を図顕する際、日蓮は自身の署名とともに必

池田先生が「法界即蓮華」を引用

否定！

ず花押を記した。一般に花押とは署名者本人であることを証明するもので、判あるいは判形ともいう。曼荼羅本尊を図顕したのは間違いなく日蓮本人であることを明確にしたのが日蓮の花押である。花押は本人以外に記すことはできないので、日興門流で本尊を書写する場合は花押に代えて「在御判」と記す。

ここでは南無妙法蓮華經の首題をはじめ、本尊に記されている諸尊が全て日蓮と一体であること、すなわち曼荼羅本尊と日蓮が一体不二であることが確認されている。本尊に示されている十界は日蓮という仏に具わる十界、すなわち「仏界即十界」の存在となっている。この趣旨は「經王殿御返事」の「日蓮がたましい（魂）をすみにそめながしてかきて候ぞ、信じさせ給え」の文と軌を一にしている。ここに示されている曼荼羅本尊と日蓮の一体性を含めて、「人法一箇」には多重の意義があると考えられる。

★①南無妙法蓮華經における人法一箇

南無妙法蓮華經は宇宙の万物を成り立たしめている根源の法であるとともに、人格性を帯びており、法を所持する人格（仏）の名称でもある。その仏の名称は、南無妙法蓮華經如来（無作三身如来）となる。南無妙法蓮華經そのものが人法一箇の当体である。このことは「御義口伝」に「南無妙法蓮華經如来寿量品」として、「今、日蓮等の類いの意は、総じては如来とは一切衆生なり。別しては日蓮の

弟子檀那なり。されば無作の三身とは末法の法華經の行者なり。無作の三身の宝号を南無妙法蓮華經と云うなり」（七五二頁）と述べられている。

★②日蓮における人法一箇

末法の本仏（教主）である日蓮自身が南無妙法蓮華經と一体の存在である。日蓮が人、南無妙法蓮華經が法であるから、日蓮において人法一箇が成立している。

★③曼荼羅本尊における人法一箇

曼荼羅本尊そのものが人法一箇の当体である。曼荼羅の中央に「南無妙法蓮華經 日蓮（花押）」と大書されている本尊の相貌自体が、曼荼羅本尊が人法一箇の存在であることを示している。この点について大石寺第五十九世堀日亨は『日蓮正宗綱要』で「御曼荼羅の中心の南無妙法蓮華經は法で、日蓮判は人であるから、これが人法一体である」と述べている。日蓮の書と引用！

★④曼荼羅本尊と日蓮の一体性としての人法一箇

「經王殿御返事」「御本尊七箇相承」で述べられているのが曼荼羅本尊と日蓮が一体不二であるという意味での人法一箇である。曼荼羅本尊を図顕した人格主体である日蓮を人本尊、根源の法である南無妙法蓮華經を表した曼荼羅本尊を法本尊とするので、人本尊と法本尊が一体不二であることが人法一箇となる。

宮田孝一氏はこれを否定！

上記引用は、須田晴夫氏の著作「**日興門流と創価学会**」の「**御本尊七箇相承**」の冒頭と第七番目の解説、論考です。

その中で日寛上人と日亨上人のお名前、及び、日亨上人の著作「**日蓮正宗綱要**」の名を示し、日興門流の根本義「**人法一箇**」を4つの視点から解説されています。素晴らしいです。私見、池田先生の大著「**法華経の智慧**」の鼎談者である須田氏の解説と論考は広布史、そして人類史に輝き残る功績、偉業と拝します。

この須田氏による「**御本尊七箇相承**」の解説により、私たちはこの相伝の意義、特に、池田先生がご教示の**一大聖人は『宇宙法界の全要素』と『日蓮という一つの生命体の全要素』とは、全く同じものであると断言されているのであります。**

一 の本義が「**人法一箇**」であると理解できたのです。須田氏の論文は、まさに、日興門流の正義、清流を後代へと流れ通わせたと拝します。

そして、上記「**御本尊七箇相承**」の引用部でも記しましたが、「**教学要綱**」を書いたと自認する宮田幸一氏は、一「**私は日蓮の主張は誤っていると思っているから、曼荼羅からはその記述(「有供養者 福過十号」「若悩乱者頭破七分」の文)を除外すべきだと思っている**」と主張し、日蓮大聖人その人を否定する暴論を吐いて須田氏に批判されているのです。(『**創価学会教学要綱**』と**日蓮本仏論の考察**」p.158)。宮田氏の論述は一彼の論文「SGI 各国の HP の教義紹介の差異について」に掲載されています。



私は、宮田幸一氏が、昨年3月に、自身のフェイスブック上で、「**教学要綱**」を作成したと明記した事実を知りました。以下の言質は、昨年10月18日の**男子部教室の配信に、全く齟齬する大嘘**であり、驚愕しました。

一 2024年3月2日 この5年間にいろいろありましたが、**私にとって最大の事は、池田先生の生前に、『創価学会教学要綱』を完成することができたことです。**

これで完全に教義的にも日蓮正宗から独立したことが明示できたと思われま。完成に一助出来たことを**今生の誉れ**とし、余生を後進への手助けに捧げようと思っています。(宮田幸一氏の Facebook より) 一と。

10月18日、聖教電子版 ―〈男子部教学室論考〉「教学要綱」は創価ルネサンスの集大成 的外れな“批判本”を破す。―

<https://www.seikyoonline.com/article/603E8EF7E9B96D20AF2920005F5C1C6B?sntoken=8adf6d02-2583-4ed9-a80c-d125adbab292> ― には、以下あります。

一氏は、自身のホームページで『創価学会教学要綱』に関する原田会長宛て書簡」を公開している。そのなかで氏は「『教学要綱』を作成した中心は、創価大学名誉教授の宮田・菅野両氏であると聞いております」と記しているが、これは事実と異なるものであり、**宮田・菅野両氏は刊行委員会には入っていない**。（注：氏とは須田晴夫氏のことです。図斉記）

『教学要綱』の編集作業は、あくまで教学部を中心として進められ、仏教史などの専門的知見に関しては学識者に諮問する形で行われたのである。それに対して、須田氏が、曖昧な伝聞情報を不特定多数が閲覧することができるホームページ上で公表することは、学会本部や刊行委員会および宮田・菅野両氏の名誉を毀損するものであるといえる。―と、あります。

私は、宮田氏の暴言「**私は日蓮の主張は誤っていると思っているから、曼荼羅からはその記述(「有供養者福過十号」「若悩乱者頭破七分」の文)を除外すべきだと思っている**」は御書に記された十悪の内の、**妄語、悪口、両舌**であると同時に、法華経への**十四誹謗**の内の、**1. 驕慢、4. 浅識、6. 不解、7. 不信、10. 誹謗**に当たると断じます。

そして、**そのような人、宮田幸一氏**が書いた「**教学要綱**」を、**池田先生が監修されますか？否、監修されるはずがないです**。そもそも「**教学要綱**」は誰が執筆者であるかも明記せずに発刊されました。これは、社会的に通用しません。ゆえに、結論、「**教学要綱**」は即刻、絶版にすべきなのです！池田先生への背信は許されないのです！

さらに、宮田氏の池田先生への背信について、私の**親友、中村誠氏**から、以下の論述を頂きました。

一大白蓮華 6月号で、**釈迦が根本仏**という記事（私の拙文をご覧ください <https://jikatsu.net/80522/>）を大々的に取り上げたことは、人間革命第6巻p178で―**「釈迦が述仏であることはいうまでもない。だが、それは久遠元初の自受用身を本仏とするがゆえ」**―と、主張されていた根本教義が変わってしまったということです。そして、この源流をたどれば、宮田幸一氏の創価大学における、2015年日本宗教学会第74回学術大会における主張にたどりつきます。幸い全スピーチが文字起こしされています。

<https://drive.google.com/drive/folders/1wSKZjIOPLvyJVxUCWU8LL-LHJrg4ZNNi> (この中の最初にあります)

「改正の事情、これはやっぱり池田先生のですね、えー、健康問題、っていうのがあり、まあねえそれなりに皆、いつか、変えなきゃなんないっていう風に思ってたんですけどね。えー、池田先生が亡くなった後に変えるのか生きてるうちに変えるのか、っていうこういう選択です。ねえ、えー、まあ生きてるうちに変えたほうが、ねえ、まあ、何というか、えー、動揺が少ないんじゃないか、っていうことですね、まあ、色々ですね、やって、まあ、池田先生の、それなりの了解を取って変えたっていうこと、だと私は理解しています。」

ここで注目すべきは、「皆いつか変えなくちゃいけないと思っている」だ。皆とは一体誰を指すのか？池田先生でないことは確実に、学会の執行部の疑いが高まります。大白蓮華6月号の釈迦を根本仏とする記述はこれを証明するものです。そして、池田先生は、次のような教義変更を本当に許されたのかという疑問がわく。

「えー、大聖人自身が日蓮本仏論を持っていたというような立場はとらない、え、しかし、我々がある種の信仰のモデルっていうか ああですね、えーまあ、どういう姿でもって、信仰するかねえ、どういうことをやる、やるのか。というですね、お手本としてですね、えー、まあですね、日蓮本仏論というのを作り直すことが出来るんじゃないかと。」

日蓮は、自分は本佛と思っておらず、釈迦が本佛だと考えていたが、それだと動揺が大きいので名ばかりの日蓮本佛論（難に打ち勝ってこの仏法を広めたから、一応御本仏）を創作する。こうしたことを許し、今後の学会の根本教義とすることは、いままでの牧口先生・戸田先生の教え、そして何よりも、池田先生ご自身が命を削って作られた、御議口伝講義、人間革命、法華経の智慧、御書の世界、スピーチ等の教えを全否定し、かつてご自身が戦って打ち破られた身延の教えを肯定することになる。こんなことを池田先生が許されたとは到底考えられないのである。そもそもそんなことをする人物であれば、創価学会はとうの昔に滅びていただろう。

更に宮田論文に次のような記述がある。「創価学会はいつまで古臭い末法理論を採用し続けるのかということと、御書について現行の御書には問題があるから、改定する意志はあるのかという質問をただけであった。

そのときの会議を主催していた野崎勲からは明確な返答がなかったが、会議に出席していた戸田門下生で、男子部長を経験し、国会議員を長年経験した古参の幹部が、御書は戸田先生と堀日亨上人が心血を注いで作られたものだから、そこに問題があるとはどういうことだと反論してきた」（略）

「この世代の人には現行の御書は絶対不可疑の聖典だということが骨の髄まで染込んでいるので文献学的問題を冷静に話し合うことはかなり難しそうだと実感した。そしてふと思い出したのは、トーマス＝クーンが『科学革命の構造』の中で、パラダイムの変更は説得によってではなく、古いパラダイムを信奉している人々が死に絶え、新しいパラダイムを使用して仕事をする人々が増えるという世代交代によってなされるという議論である。創価学会の教義変更も同様のプロセスを経るしかないのかと少し寂しい気はしたが、自分が正しいと思っている人にその誤りを納得させることは非常に困難だと経験的に感じていたので、自分なりに新しいパラダイムで仕事をするしかないかと思った。」

ここで注目すべきは次の発言である。「この世代の人には現行の御書は絶対不可疑の聖典だということが骨の髄まで染込んでいるので文献学的問題を冷静に話し合うことはかなり難しそうだ」

信頼できる文献に基づいたならば、根本仏は日蓮ではなく釈迦なんだから、創価学会の教義を変えないと、こうした議論に対して最後まで反対を貫かれると想定される方、それは池田名誉会長、その人ではないのかということです。

そして、宮田論文はこう続く。「パラダイムの変更は説得によってではなく、古いパラダイムを信奉している人々が死に絶え、新しいパラダイムを使用して仕事をする人々が増えるという世代交代によってなされるという」

戸田教学等を身に着けた私のような学会員が死に絶えるのを待って、根本教学を変更していくのが最善と主張しているのである。事実、全く説明もなく、いつのまにやら、根本の仏が日蓮から釈迦へと変更されている。あまりにも姑息であると言わざるを得ないし、仏法者としての倫理に反している。創価学会員全員に私は尋ねたい。果たして池田先生がこのようなことをなされるのか？ 皆をこっそり騙そうとされるのか！—と。

中村氏の論考に賛同です。[宮田幸一氏による日蓮仏法の破壊](#)は許せません！

元に戻り、「**蓮華の意義**」についての「**法華經の智慧**」を引用します。

「**蓮華の文化史**」を語る 従地涌出品（第十五章）「**法華經の智慧**」第5巻



一切の法門は「**蓮華**」の二字から

池田 「**蓮華**」から万物が出生するという思想は、華嚴經の「**蓮華藏世界**」などでも展開されています。

（中略）日蓮大聖人は「**蓮**」の一字について「万法の根源、一心三觀・一念三千・三諦・六即・境智の円融・本迹の所詮源蓮の一字より起る者なり」とされている。また「一切の法門は蓮華の二字より起れり」と

も仰せです。万物を生む**蓮華**といってもその究極は**南無妙法蓮華經**以外にない（中略）要するに、**太陽も、蓮華も、宇宙のエネルギーの根源を象徴している。その当体は南無妙法蓮華經であり、妙法は即太陽、即蓮華です。人に即していえば大聖人が太陽であり、蓮華です。**

「**日蓮又日月と蓮華との如くなり**」

池田 神力品の文について、大聖人はこう仰せです。「上行菩薩・末法の始の五百年に出現して南無妙法蓮華經の五字の光明を指し出して無明煩惱の闇をてらすべしと云う事なり」と。末法で法華經の肝要である南無妙法蓮華經を弘通される大聖人こそが、上行菩薩の再誕であることを示されているのです。さらに「一切の物にわたりて名の大切なるなり（中略）日蓮となのる事自解仏乗とも云いつべし」と仰せです。

須田 自解仏乗とは、「みずから仏の境地を悟った」ということです。**大聖人ご自身が「仏」**であり、その悟りを「**日蓮**」という御名に込めてあるということですね。

遠藤 四条金吾夫人へのお手紙でも、「法華經は日月と蓮華となり故に妙法蓮華經と名く、日蓮又日月と蓮華との如くなり」と仰せですね。

池田 「**日蓮**」という御名を名のられたこと自体が、**大聖人こそが、法華經の御当体**であるということです。大聖人こそが末法の全民衆を永遠に照らす”太陽”であり、**諸仏を生んだ根源である清浄の”蓮華”**——なかなづく白蓮華であることを、示されたものなのです。**日蓮**という御名については、重々の深義があり、くわしくは、日寛上人が「**日蓮の二字の事**」（『富要』三卷二五五ページ）にまとめておられる。結論を言えば、**お名前自体が、大聖人こそ末法の法華經の行者であり、御本仏であるとの大宣言なのです。**

上記にも、「**人法一箇**」は明示されていませんが、以下の一文

—太陽も、蓮華も、宇宙のエネルギーの根源を象徴している。その
当体は南無妙法蓮華經であり、妙法は即太陽、即蓮華です。人に即
していえば大聖人が太陽であり、蓮華です。—

私見、この一文も、広く言えば「**人法一箇**」であると拝します。何と素晴らしいご教示、論述でございましょう！



私は樹木医です。「法華經の智慧」の「蓮華の文化史」の章は、樹木生理学としても大変意義深く、また、人類の悠久なる歴史の中で、蓮華がどれほど重要な使命を果たしてきたか！そして、「**蓮華**」が**日蓮大聖人のこと**であるとの意義づけは、感動の極みでございます！！

私は、池田先生の以下「**大賀ハス**」についてのご教示が大好きです。

従地涌出品（第十五章） 「蓮華の文化史」を語る **大賀ハス**

講義「法華經の智慧」（池田大作全集第 29-31 卷）

「ハスの種子」の強靱な生命力

遠藤 大賀ハスが花開いたのは昭和二十七年（一九五二年）。ちょうど日蓮大聖人の立教開宗から七百年の大佳節でした。しかも、その種子が発見されたのは大聖人御生誕の地・千葉でした。

池田 そうだった。そのうえ、ちょうど同じころ、“アメリカのワシントン国立公園で、数万年を経た「蓮華」の種が、薄紅の大輪の花を咲かせた”というニュースが伝えられた。

立宗七百年の年に、東西でそれぞれ、何千年・何万年も前の「蓮華」の種が開花したのです。

戸田先生は、これを大白法興隆の素晴らしき瑞相と、とらえておられた。
（「泥沼にあえぐ民衆の一大欲求は、一大仏法の出現である。崇高にして正しく、利益と罰と厳然として、だれ人も頼むに足るべき、偉大なる仏法が現れなくてはならないときである。東西両洋に咲いた蓮の花は、泥土より見事に花を咲かせたではないか。

すなわち、何千何万年の夢を破って。今、日本民衆の泥沼の中から、遠く久遠元初、近くは、七百年の夢を破って、末法御本仏の崇高なる仏法が、ぱっと咲き乱れるのである。この蓮華の花が、東西両洋に咲き出したということは、末法御本仏の仏法が、花やかに咲き出す瑞相でなくて、なんであろう」〈昭和二十七年九月三十日の「巻頭言」『戸田城聖全集』1〉）

私は当時、二十四歳。東洋へ、そしてアメリカはじめ全西洋へも、最高の「蓮華の法」を弘めていこうと決意を固めたものです。一と。

このように素晴らしい「蓮華」が、今、創価大学をはじめイタリアのミラノ会館他、世界中で咲き誇っているのです！

それは、あたかも、日蓮大聖人が世界中で人類を激励、見守って下さるのだと思っています。そして、私の究極的な感動は、私見、「蓮華」＝日蓮大聖人＝人法一箇である日寛上人書写の御本尊が、現在、全世界に流布され、SGIの皆さんが唱題していることでございます。何と素晴らしいことでしょうか！

しかし、その御本尊の真義を完全に否定したのが「教学要綱」であり、それと同じ底意を持つ近刊の教学書、大白蓮華、聖教新聞での池田先生の名を利用した作文の氾濫が現状なのです！

私はそれを知ったがゆえに、この度の拙文を記し、皆様にお伝え申し上げました。しかし、もう、これ以上の破邪顕正は、きりがないので止めます。

最後、池田先生の「御義口伝講義」（下）140頁、下記、ご指導を引用させて頂きます。このご指導も、私見「人法一箇」のご指導と拝しており、大感動でございます。

一 經王殿御返事（１１２４頁）にいわく「日蓮がたましひをすみにそめながして・かきて候ぞ信じさせ給へ、仏の御意は法華經なり日蓮が・たましひは南無妙法蓮華經に・すぎたるはなし」と。

したがって、大御本尊をたんに紙に字が書いてある程度に輕薄に考えているとすれば、それは大謗法である。そこに日蓮大聖人がおいでになる思いで、強き信心に立ち真劍な唱題に励むべきである。

日寛上人の觀心本尊抄文段上(富要集第四卷二三六頁)にいわく「今安置し奉る処の御本尊の全体、本有無作の一念三千の生身の御仏なり、謹んで文字及び木画と謂うこと勿れ」と。また同文段下(富要集第四卷二九七頁)にいわく「今調く妙法五字の袋の内に久遠元初の自受用身即一念三千の珠を豪むなり(中略)

問う、妙法五字の其の体何物ぞや、謂く一念三千の本尊是れなり、一念三千の本尊其の体何物ぞや、謂く蓮祖聖人はれなり」—と

本拙文の冒頭でご紹介の、Clear Sky 氏の「創価学会の会員のための資料」<https://t.co/0pCNeSStyC> の第五章には、一大聖人觀と御本尊觀の再考を一つの小題で、以下、記されています。

今こそ、会員一人ひとりが「大聖人觀」「御本尊觀」を確立することが重要だと考える。また、教団の教義はこれらを醸成するためのものであるはずだ。しかし、今は残念ながら、そうっていない。学会教義は、正しくあるべきである。幸せになるための教義である。劣悪な教義を定め、会員に押し付けるべきではない。—と。

まさに、正論と拝します。私たちは、毎日拝する御本尊様が、どれほど偉大な「人法一箇」のご当体であるかを、三代会長、就中、池田先生の本当のご指導に立ち返り、自身の胸中に確立すべきと思っております。

以下、本拙文の結論を記します。

『**教学要綱**』、近刊の**教学本**、**大白蓮華**、**聖教新聞**、**教学用語集**等は、日蓮仏法の根本義「**人法一箇**」を捨てました。そして、大聖人は、あくまでも、「**釈迦仏の使い**」「**上行菩薩の使命を果たす存在**」で、釈迦が「**使いを派遣した主人**」としています。その教義は「**釈迦本仏・日蓮菩薩論**」です。

『**教学要綱**』は、狡猾にもそれを明言せず、あいまいにしています。これは実質的には身延派と同義なので『**教学要綱**』は創価学会がこれまで維持してきた根本教義を根底から破壊するものです。

須田氏が「池田の逝去直後に発刊された『**教学要綱**』は池田の監修を得たとしているが、むしろ『**教学要綱**』の内容は生前の池田の思想とは大きくかけ離れており、同書が池田の監修を謳っていることはいわば池田を利用した態度であると評せられよう」（『**創価学会教学要綱**』と**日蓮本仏論の考察**」 p.93）と批判するのは当然です。

こっそりと教義を変更しようという態度は『**人間革命**』の改竄、文章変更にも現れている。例えば、「**時代の進展によって変更しなければならない教義や、矛盾に満ちた宗教は、誤れる宗教と断定すべきである**」（『**人間革命**』第2巻 p. 265）の箇所は**ワイド版の『人間革命』第2巻（2013, p. 308）には見当たらないのです。**

日顕は法主本仏論という邪義を主張し創価学会の破壊を企てましたが、日蓮仏法の根本教義まで破壊することはありませんでした。しかし、『**教学要綱**』はそれを行っているのですから、**日顕以上の大謗法であり、大邪義**なのです！

「人間革命」第10巻一念の章には、

日蓮大聖人は、四条金吾を戒められた御手紙に、『**なにの兵法よりも法華經の兵法をもちひ給うべし**』とお書きになっています。これは、いかなる活動においても、どんな作戦、行動よりも、法華經の兵法、つまり、信心から出た作戦、行動を用いる意外にないのだ。それが最高の作戦であり、最高の行動となるということです。右往左往する必要はさらにありません」伸一は、さらに言葉を続けた。「刻々と推移する情勢を、誰よりも敏感にとらえ、的確に行動する知恵は、信心から出るんです。

將軍学の真髓は法華經にあることを、私は、ついこの間わかりました。以上二つの要諦が調和して進む時、法華經に説かれている通り、『諸余怨敵・皆悉摧滅』となるんです。もろもろの怨敵は、皆、ことごとく崩壊し、滅びゆくとの意味であります。一とございます。私見、「教学要綱」は、この法華經の兵法、即ち、大聖人の仏法、人法一箇の御本尊の本義を破壊なのです。よって、『諸余怨敵・皆悉摧滅』が叶わないのです！

また、「御義口伝講義」(下)最後775頁で、池田先生は下記ご指導です。正法を天下一同に信仰せば此の国安穩ならむ—「正法を天下一向に信仰せば」とは、すなわち仏法である。「比の国安穩ならむ」とは王法である。安穩とは国家、社会、世界が平和になることであり、依報たる国土世間も地震や台風、あるいは干魃などの災害に襲われない、平穩な国土になることを意味する。ここで「正法を天下一同に信仰せば」と仰せのごとく、王仏冥合といっても根本は全民衆がこの三大秘法の大御本尊を信仰することである。一と。

このご指導についても、「教学要綱」は三大秘法の大御本尊の本義を破壊しているのです。よって、上記、国家、社会、世界の平和も、依報たる国土世間も、地震や台風、あるいは早魃などの災害に襲われない平穩な国土になることも、大変、厳しいのです！

したがって、—彼の万祈を修せんよりは此の一凶を禁ぜんには—であり、「教学要綱」は、即刻、絶版にすべきなのです！

「創価ルネサンスの集大成」と主張する「教学要綱」に対して、全会員による一大教学勉強会の旋風を巻き起こしたく思っています。私の拙文によって、会員があらためて「日蓮本仏論」「文上・文底」「人法一箇の御本尊」の捉え方の正しさを学ぶ良いきっかけになってほしいと願っています。

以上で、私の拙文を終わります。この拙文にご賛同の方は、どうぞ、親しきご友人にこの拙文をご紹介下さい。そして、私の下記アドレスへ、忌憚なきご意見、ご指導を頂きたい思います。kiiroibara.526@gmail.com 敬具

図齊 修